北辰會雜誌

第拾貳號

第四高等學校北辰會

明治二十九年十一月二十日發行

（非賣品）

北辰會雜誌第拾貳號目次

論說

トライチケ氏を想ふ　浦井鍠一郎
北陸の幼大學（世眼に映する）　遠山淵
時習寮（承前）　河原始二

雜錄

ショウベンハウア語錄　B. T. 抄譯
阿奴浦の一夜　内藤柳外
戀瀨川　舊庸生

文苑

堀四郎大人追悼會に　安木田頼方
斧の柄の記　草野時雨
追悼の詞　蓬生庵
送臺灣守備隊歌并短歌　福井喜彦
歌十五首
蝶の花妻　遊童子
今樣四首　村上函峯
俳句十五句　垂東仙史
登白山記
顆郝隆曝腹書圖
詩二十五首

批評

本誌第十一號を讀む　泉南漁史

雜報

梧葉秋聲。新入生を迎ふ。第二回琵琶湖聯合大競漕會と我端艇會。警省錄。千紫萬紅。其他十數件

附錄夏季跋涉錄

白山登りの記　楓溪山人
五箇山紀行　豐泉生
御嶽、立山紀行　義山養愚

北辰會雜誌第拾貳號

論說

頃者余の恩師博士リース先生余に贈るに先生の近著を以てせらる其書題して Zur Erinnerung an Heinrich von Treitschke とふ先頃物故したる獨逸有數の歷史家トライチケ氏の性行著作を論ずること詳に頗る有益の文字なりとす因て不文を辭せず其大要を譯して本紙に掲くることとせり

本論中に屢々見ゆるトライチケ氏の著獨逸史とふ（るは本名十九世紀に於ける獨逸史（Geschichte des Deutschlands in 19 ten Jahrhunderts）とふひ其五卷たけは既に出版せられたり第一回は後巴理條約に至り第二卷はカルヽスバッド會議まで第參卷は七月革命まで第四卷は一八四〇年まで第五卷は一八四八年に及べり間も無く完結を告くる筈なりしに中道にして易實せり

浦井鍠一郎記

ハインリヒ、フォン、トライチケ氏を想ふ　（四月廿八日死去）

一千八百四十年より同き七十年に至る迄の間は獨逸歷史家にとりて彼等の史學上の研究と當時殊に眼前に切逼せる政治上の實際問題と極めて密接の關係を有せる時代にてありきされば此時代に於て名聲嘖々たりし獨逸歷史家の大多數は何れも皆席を議會に有し公法學者（プブリチスト）としても亦有名なる

人々なりきダールマン氏（Dahlmann）とゲルビヌス氏（Gervinus）ヅンケル氏（Duncker）とドロイゼン氏（Droysen）ホイセル氏（Heusser）とバウムガルテン氏（Baumgarten）ワイツ氏（Weitz）とシーベル氏（Sybel）レオ氏（Leo）とモムゼン氏（Mommsen）の如き皆入りては議場に於て辯論を闘はせ出てゝは當時の政治問題に就て互に文壇上に論爭せし者にて要するに其局今日の獨逸なる一統國（アインハイトスタート）の成立を見るに至れり而して以上列記せる諸大家は今日皆在らず其最後なりしハインリヒ、フオン、シーベル氏は昨年八月氏の著獨逸史（此書題して Die Begründung d. deutschen Reichs durch Wilhelm I とゝふ）の結尾たるべき第七卷の史料を蒐集し始むると殆んと同時に溘然此世を辭し去れり而して今や又前記の政論を闘はせたる歴史家社會の年少者其跡を追ひ獨逸帝國の繁昌を見捨て去れり是を最も達辯に最も多情性急にして又最も世人に愛せられたるハインリヒ、フオン、トライチケ氏とす

ハインリヒ、フオン、トライチケ氏一千八百三十四年九月十五日を以て撒遜州のドレスデン府に生る父は撒遜國の士官なり氏は年壯にして獨逸の諸大學に歴遊せしが特に力を政治學の研究に用ひ社會學の基礎（Die Grundlagen der Gesellschaftswissenschaft）とゝふる題にて歴史的とゝはんより寧ろ政治的の論文を著してより其名大に現れ一千八百五十八年ライプチヒ大學に招聘せられて同大學の歴史科講座を擔任することとなれり（獨逸大學には講師即ちレクチュアラアとゝふ者なくプロフェツソル、オルデナリイ、プロフェツソル、エキストラヲルヂナリイ、及び Privat-Docent の三ありて是は講師と違ひ講義を爲せども無報酬にてトライチケ氏は此プリバート、ドチェレトなりし也）而して其れと同時に種々の方面に向ひて氏の文壇上の働は始まりたるが氏の勇壯なる達筆は獨逸の名ある新聞社をして爭ふて氏の寄稿を求め氏は我社の其寄書家なりと世に吹聽するに至れり氏は先づ樣大の筆を奮ふて古今詩豪の評論を試み Kleist Otto Luwig Hebbel 及び Milton 等は氏の文壇初陣論題なりき其後一千八百六十一年自由論（ユーベルヽフライハイト）とゝふる題にて演舌を爲しゝを始とし引續きて歴史的及ひ政治的論文を公にし時々古今の名ある人々の評論を爲せり我輩は氏の數多の論文の内たゞ其三者を擧くべし一千八百六十二年のフヒテと國家的觀念（Fichte und die national Idee）一千八百六十三年のバイロン卿と急進主義（Lord Byron und der Radicalisms）及ひ一千八百六十九年のカブール論（Cavour）是なり其他氏の論文にして最近史に關する政治的問題を以て中心とせる者極めて多し例せば獨逸國と和蘭國とを例證として說明せる聯邦國（ブンデススタート）と一統國（アインハイトスタート）との比較論の如き或ゝ佛國なるボナパルト宗（Bonapartismus）を論じ深く其卑むべきを極言すると同時に微妙の同感を表せし如き又は獨逸なる立憲王國を論じて其稍や高等の者にして其人民の自由に利益ある點より見るも專ら黨派政治の行はるゝ議院政治の制度に優るを說きしが如き是なり是等の論文は何れも氏が敘事評論共に巧に總ゆる獨逸一切の事物に對して熱心なる愛情を有すると同時に豈くも道德上の罪過は之を惡むこと蛇蝎の如く這般の事實を見聞する毎に赫怒禁ずる能はざる的至情を有せることを證明すること歴然たり氏の文を草するや其材料の配置は通例頗る簡單に其各箇の聯絡は意を用ゐずして甚た綿密ならさりしかども氏の文學的天才は寧ろ艶麗なる敘事巧に撰れたる適切なる比諭及び豐富にし

て有力なる形容に於て顯はれたり而して氏は最も思を各文章の結尾なる用語及び思想に凝らして其有力ならむことを勉めたるを以て氏の論文は現今獨逸文學の中最も感化力に富めるものといふも溢言にあらざるべきなり

氏は大學に於て講義を爲しゝ以來大に辯論の力を養成せしが特に一千八百六十七年ハイデルベルヒに聘せられホイゼル氏に代りて其講座を擔任せし以後は其發達最も著しかりき此時に當り氏は感官的疾病に罹り始の間は氏の聽講生は氏の講義を聽き取るに頗る困難を感する程なりしかとも講堂は常に聽講生を以て充滿したりきと傳ふ氏は未た老年ならざるに既に耳遠くなり其爲め屢々調子外れの高聲を發し又一句を述へ終りて他の句に移るに際して毫も音調を上下せずして一呼吸に述べ去るかと覺へば時として句の途中にて激に留り長大息を爲す等の事ありて甚た流暢を飲きたれとも兎に角氏の有せる天與の能辯と先天的人をして感奮せしむるの力とは氏の講義を聽く者をして前記の困難を忘れしめしといふ特に祝祭紀念式等執行の節は大學教官室中に於ても議會に於ても豐富艶麗なる思想を以て巧に祝賀の止む能はざる所以を述べ聽衆に有力なる感動を與ふる點に於て氏と肩を比する者一人もあらざりきとぞ又氏の著せる詩篇の內には氏の有せる燃ゆるか如き愛國の熱情歷然として現はる

一千八百六十六年以後氏は普魯士年報といへる雜誌の編輯人となりしか其政事通信欄內に於て氏は全獨逸國は王政的强固の團結を作らざるべからざる旨を痛論せり而して彼の普佛戰爭に因りて此目的の達せらるゝや氏は步を進めて議會に於ける達辯と公法學者の健筆とを奮ふて新獨逸帝國の政治社會及ひ宗教問題に就て熱心に論究するところありき氏は至りて性急なる性質にして豈くも說を異にせば氏の親友たりと雖も容赦なく激烈なる攻擊を加へ激語を放ちて窮追止まず爲めに其人憤怒して友情の冷ゆるをも顧みざりき蓋し氏は人と論爭勝敗を爭ふの際に在りては罵詈嘲笑も必用の武器にして決して咎むべきにあらずと信ぜしが如し一千八百七十四年に編纂出版せられたる氏の論文集（Zehn Jahre deutscher Kämpfe）に見えたる氏の早き論文中には未た氏の此性質充分に現はれ居らずと雖も一千八百七十五年氏がSchmollerと議論を鬪はせし以來氏の性質は益す顯著となり來たれり但し此は氏の性質の變化せしといはんよりも寧ろ當時獨逸內政の變調著しく氏を激せしに因れるならむ兎に角其等の爲め氏の一躰の性質は溫良なりしにも係らず氏の親友の多數を氏の敵中に見るに至れり然れとも舊友を失ふと同時に年少氣銳なる青年社會は氏の勇氣を贊賞し此輩中に多くの崇拜者を有するに至りき

一千八百七十六年以後氏は現世紀前半の獨逸國史の編纂に力を盡しゝが該博の考證精妙なる記事は共に之を既成五卷の書に於て見るへく從來氏の手に成りたる無數の著述の一として之に及ぶものあらず氏は其同情を有せる人物及ひ文學的現象を論するに當ては充分の理解力と之を言ひ表はすに先天的詩人の才を以てせり氏の歷史中充滿せる人物評論の二三と審美的及美文的研究の多數とは正確明晰實に此種の文章の摸範とするに足る氏の著書は其各頁精神充滿し文章に生氣あり讀者爲めに動く特に人を感動せしむるの筆は氏が獨得の妙技にして敍事の流暢にして實現的なる彩色の鮮明なる到底他の歷史にして之と肩を比する者あらず氏の獨逸史は又能辯の見本にして獨逸

散文の一大紀念碑なり獨逸各種族の特質獨逸風景の美美術の巧同情を寄する著名人士の半ば自ら悟らさりし隱微なる感情人種の天性時勢の風潮を洞見するの慧眼と之を說明するの巧妙なるとは氏に於て始めて之を見るべし然りと雖も氏の論定の時として一方に極偏し光線と陰影との配當正鴻を失し現時論爭の問題に關して甚た頑固なりし事等は常に公平なる判定者の不同意なる所なりとす氏か事の普魯士に關しフリードリヒ、ウイルヘルムに關る者は事々物々辯護讃賞し反之口を極めて獨逸中部の諸侯を罵りメッテルニヒ及ひフランツ二世を嘲りし如きは眞面目なる批評家の許さゝる所なり盖し氏は英のマコーレイと同しく時として曲筆以て事實の眞想を蔽ふの弊に陷れり氏を以てマコーレイに比するに研鑽の精と勞力の多きとは氏の方彼に優るといへとも感情に激せられて史筆を曲ぐるに至りても亦マコーレイに讓らす彼の英國史と氏の獨逸史とは共に公明正大なる研究の結果といふよりも寧ろ激しき政治的論爭の生產物として見るべく此點に於て氏の著の方一層著しきか如し實に氏は其史論中に於て平素の感情と冀望とのみならず一時の感情と意見とを憚なく露出せりされば人曰く一千八百十四年より同き四十八年までの氏の歷史に對しては殆んと間然すべき所なく稍艶麗に過くるの嫌なきにあらねど大躰に於ては頗る眞實なる抽象を與へ讀者をして首肯せしむと雖も現世紀なる南獨逸及澳太利の獨逸に於ける關係自由主義（Liberalismus）躰育宗（Turnerei）學生黨（Burschenshaft）獨逸青年（Jungen Deutschlands）等の傾向を叙するに至りては往々正鵠を得すと盖し是等の缺點を補ひ誤謬を訂し以て獨逸歷史の完成をなすは他の歷史家を待たざるべからず

氏は其史筆の主觀的なるを知りたれども故意に墻を設けて之を限らむとはせざりきされは氏の著程に記者其者が紙上に躍動せるは類稀なり氏が自家の著を顧みて凡そ史書の人を感ぜしむるの力は常に著者人物如何に因るといひしは確言なりといふべし

氏の獨逸史の後卷は之を前卷にして著しく顯點の減少せることは凡ての批評家の皆許す所なり而して世人は此變化を以て氏が重き眼病を患ひたるのみならず年老ひて温和となりたるに因るといへとも然らず此相違を來せる主因は前三卷にありては專ら力を叙事に用ゐたるに反し其後卷を編むに當りては專ら材料の集合と因果の說明とに力を盡せしに因るなり如此なれば事實自ら重く氏か前に耽りたる如き聯絡に乏き影像に優るや遠し普通世人の思考するとは異りて歷史的叙事の主角的なるは材料配置の性質如何に因る事多き者なり

トライチケ氏の爲には猶一の大事業ありき一千八百四十八年の革命及ひ憲法論の事蹟は未た多く研究せられずして內部關係の明瞭ならさる件頗る多し是等の問題の滿足なる解釋を得んことは日夜世人の待設くる所にして歷史研究者及ひ叙述者にとりては至難至尊の業なり天は現時に此事業に最も適當なる歷史家をして此秘密の琴線に觸れしむるを欲せざりしにや突然此前途多望の史家を奪ひ去れり今年春氏は恐るべきブライト氏的腎臟病の徵候を發し一時快方に向ひし後再ひ重患に陷り日頃强健なりし氏も六十二歲を一期として空しく此世を辭し去り史學社會は爲めに一の大なる冀望を失ひしこそ悲けれ

北陸の幼大學

（世眼に映ずる）

遠山熙

朝に曠世の英才あり、かつて教育の普及せざるを痛慨し、愾然俗眼の排難を凌ぎて、大に雄遠の精慮をくだき、期年ならずして五大宏校を全國に植つ。彼や非命、一朝兒兒の毒刃に斃れ、悵然大望の骨となつて朽ちしも、彼が盡粹せる策畫は、歳々その礎を固めて、隆々日に盛大をいたし、いまや五校の地、俊兒秀才の笈負登門するもの、憧々として向背相望む、旺なる哉。

則ち都門の健兒は、渺たる向陵のほとりに、雄心落々、斬然としてしさしく覇を輦轂のもとに稱し、奥羽の健兒は、俠骨稜々、松島灣頭、獨眼將軍の青葉城下に、嚴然として東北の樞機をにぎる、山紫水明の裡、屹たる比叡の一峯を仰いで、神樂丘畔、宛然關西に號令するものは三高なり、阿蘇山の噴烟をのぞみ、白川の珠漣に沈臥して、ひとり驍名を西陲に擅にするものは、九州の健兒にあらずや。飜て更に皚たる白嶽の麓、彭湃たる北溟の狂浪を呑吐し、窮冬隆寒の間に、多年圖南の鵬翼をみがきて、ひさしく萬里の長風を待ちつゝあるもの、之を吾が辰章校となす。あゝ北陸の幼大學？、世人の眼青に映ずる聲價は則ち如何、同胞校の間に於ける褒貶は則ちいかむ。」

校や、北陸の雄鎮により、十萬の城市を提げて立つ、地は峨々たる巒峯峥嶸をへたてゝ、東海京畿の連絡を遮斷し、北は久利加羅の棧峽をわたるの外、峻嶺の起伏は、逶迤として遙に能州の微翠に入り、西部の一帶、わつかに蒼海を抱いて、やゝ輪船の往來を俟つをうべきのみ。夫れすらも猶、雪冬飛絮の候を迎ふれば、天地暝々、霏々として連月開かず、陰風怒號し濁浪空を排するあり、日星光をかくし山岳形をひそむるあり、檣は傾き檝はくだけ、家をくづし、路を埋めて、商旅は行かず船馬通はず、海陸の交輸ともに道を失ふにいたる雨は濛々として降ること四季を撰はず、雨量の多き實に全國に冠絶し、氣候の變轉、朝は夕べを保せざるものあり。されば交通の便否は固より、昭代の惠潮も、未だ蓊然として、此の寰宇を浸襲しいたらず、太平洋岸諸州の般盛富厚なるに比すれば、開明の度に於て、優に三年五年、若くは十年を遲ふせりと謂はざるをえず、人情風習のごとき、又從て尨然たる大封民の餘風を失はざるものあつて存す。嗟吁金城の地域かくの如く、辰章校の位置また此くの如く、吾幼大學の聲譽も（世眼に映ずる）、亦實に斯くの如き觀なき能はざる也。

想ふに我校は、たゞ石川、富山、新潟、福井等の數縣を管領するに止まりしのみ、規模の狹劣なる、位置の僻隅なる、經費の些額なる、學生の僅少なる、つねに幾歩を同胞校に輸せし所以のものは、蓋し免る能はざるの數なりき。甲午の秋、たま〳〵改革令あり、舊京の健兒、俄然離散の災厄に罹りしより、我が金城の亞壁、聲望とみに加はり、校名やゝ重く、近畿都門の青雲兒、遽々然、白嶽の皓雪をのぞんで、遠く北海の狂瀾を渡るものやうやく繁し。之に於てか、敦厚なるもの、輕跳なるもの、撲吶なるもの、翕然として相蝟集し、校風極めて雜駁となり、氣習互に砥磨讓脱する處となりて、端莊なる一個の特風、まさに混合の要素中より醸酵し來らんとするの機に逼れり、吾曹の不愍なる、斗觥を浮へざらんとするも豈に得んや。

吾校刻下の形勢は、それ斯の如く恰も朝曦の波を蹴て昇るがごとき觀あり、然れども顧みて、比

年帝國の奎運も、亦幾歩を進めたるを想はざるべからす、東京に、仙台に、熊本に、はた山口に、我同胞校の盛觀は、いよ〳〵冲天の猛力をもつて、擴大せられつゝあるを忘るべからす、八百の鳳雛は皇京に蟠踞し、半千の乳虎は宮城野に吼哮し、六百の美貌は九洲を蹂躙しつゝあるを記せざるべからず、而て同時に、吾曹は陬僻に據り、世朝に背き、隆塞と戰ひつゝあるを念はさるべからさる也。

夫れ陬僻に據りて不利益と戰ふ、君曹の失ふ所は、擧て數ふ可らざるものあり、未開と語り固陋と狎る、日進文運の階梯を攀づる學生は、獲るところ終にみるべからず。これを同胞校の境遇に較ぶれば、吾同學は文運啓發の位置上に於て、既に幾等を下り、見聞學上の打算に於ても、又はるかに數歩を讓るの地に立つものなり。看よ校周幾十里の間、劉々たる笛聲の、朝霧暮靄を渡りて響くもの、微々としてわづかに一二、會社製造所等の學生を裨益するの機器類のごときに到りては即ち絶無（？）、況や瓦斯電燈の煌火をや、又況んや鐵道戰艦等の觀察の如きをや。若し吾曹の學識をして、居常觀聽の結果に基くもの夥多なりとせば、我校生のごときは、此の智識に於て、實にコンマ以下を占むるものと見做さゞるをえず。半歳の長冬、天與の暗乾坤を築きて、山を仰き雪をながめ、蓬室に潛伏し、盲々然として駒隙の流るゝに任せて、やがて雪溶け風暖かに、萇々たる東風に、一陽の來復を覺ゆるのときは、既に業に新來文明の波濤、一瀉千里の滔勢をもつて、五港の嶋頭を出入し、東京を呑み、大坂を捲き、東海の一帶を蠶食して、餘勢漸く中央の貫脈を超へ、僅に白嶽の一峯をふき渡るの時にあらずや。一歳の間、世潮の惠彩に背くもの、それ既にかくの如し、二年三年將た十年を閲みせば、遲々たる霄壤の差は、むしろ驚くべきもの無くんばあらず、維新の初め、簇々たる十四萬の人烟を輳集したる、百萬提封の巨城が、世の盛運に逆ふて疲衰睹るか如く、二十年後の今日に、八萬餘口の炊烟を維持するに至りしもの、豈に偶然なりといはむや。宜なり、世人の眼底やゝもすれば金城の名なく、從てまた我辰章校の盛況を說くものゝ少きや、京童集れは、嘵々としてたくみに都門の壯大を誇り、平安の驕兒を贊し、奥羽西陲の健兒を評價するものあるも、わが北溟の雄校に至ては、語るもの寥々として僅に指を屈すべきのみ。あゝ土地の僻遠は未開を意味し、未開地の學舍は劣等を意味せらる、蓋し通俗の觀察なり、一般の認識なり、憐れならずや。

吾人しば〳〵北陸を縱斷して、信越の曠野を踏み、東海道を旅して舊都に遊び、關東を經涉して奥羽を巡れり、その旅舍に投するや、墨痕淋漓、數枚をにぢらせて、吾校名を大書するを常とするに、到る處の旗亭あるひは怪みて僞校となし、懇敎再三に亘りて尙了得に臻らがるものあり、彼の衆人の輻輳する滊車旅行に於て、往々にして奇問を差向けられ、詰問の酷なる、殆と窮答するのためし少なしとせざるなり。是れ必竟彼等の無識にして、豆小なる眼界の視るところなりと雖とも、又以て北陲の赤煉瓦舘の聲譽が、如何に萬衆の腦裡に了解せられつゝあるかを推知するを得べし。吾曹はもとより彼等野人の嚬笑は、吾校の芳譽上に於て、些毫の影響を加へざるを信するも、衆口金を爍かし積毀骨を銷す譬あるが如く、かれら輿衆の談柄は、所謂萬人の叫聲なり、輿論の一部なり、聲價の現はるゝ所以にして、方今の時勢、公議輿論の皷噪が、吾黨の校脈を左

右する一大勢力なるを想はゞ、彼等の論談はむしろ大に戰慄慎誡すべき聲ならずや。

世に輿論の盲動ほど恐るべきはなし、盲見より生する盲論は、爆然として盲聽者の耳朶をつんざき、盲識盲眼の人士を風靡して、終に社會の潛勢力となり、一大輿論となる。人は仁義に醉ひ盛德に飽くの今日、盲論の魚貫して進む處は、疾風の落葉を拂ふが如く、高韻清風の士、或は迷ひ或は惱み、颯然として底止する所を知らざるものあり。吾人今夏鄕に歸り、一日東都舊京の驕兒と携へて、暑を某濱に避けたるの際、たま〳〵慇懃を同樓の一紳士に通し、無聊に乘じて大に各高校の形況を討論するをえたり、紳士曰く、貴校の盛名、聞くをえさること久し、現時狀態敢て他の諸高に劣るなきをうるや、と語調既に幾分の輕謾を挿むの言なり、吾曹の不遜なる、なほ怫然として熱汗の背を傳ふて流るゝを覺えざりき、噫、彼は嘗て輿論の代表者たる議院において、高等中學の廢滅を絶叫し、殆と吾曹の肝膽を寒からしめたるの名士なり、而て尙這般の寒見を有する也、之を以て之を推せば、世俗の凡流が誤認謬見の甚たしきは、固より易々として知るべきのみ、遺憾なる哉。

夫れ衆人誤解し、識者さとらず、同胞の校友も亦實に此の般の懷想を有するとせば、よしんば盲論にもせよ、則ち公衆の意見なり、輿論の部分なり、社會の叫聲なり、吾曹菲才と雖とも、苟も籍を峨閣にとゞめ、一校旗のもとに馳聚するもの、豈に多少寒心戒懼する處なくして止むべけんや。

然れとも、校域の僻遠に位置するを以て、直に鼎の輕重を問はんとするものゝ如きは、抑も大海を窺はざる井蛙の管見にして、未た意に介するに足らざる痴論のみ、未た變轉の歷史を繙かざる狂蠢の愚見のみ。平門の榮華にあくや、雄風一陣、快鞭長驅して、槿花一朝の驕りを西海の波濤に漂はしめたるものは、木强なる關東武士の一脈なりき、元龜天正の際、兵馬倥偬のうちに崛起して、快刀亂麻をたち、蜂雄を掃蕩して、千代田城奥三百年の泰平を歌はしめたるものは、質樸なる三河武士の子孫ならずや、內訌外患、いよ〳〵激切にして、國非日に急をつぐるのとき、徒手空拳を振ふてたち、南轅北征の間に、よく回天の偉業を遂けえたるものは、薩州一脈の武骨書生にあらざりしか。試にかれら一脈の粗樸武人か、寒山無畝の間に生長して、ゆく〳〵一國の樞權をにぎりたる所以を精究せば、窮邑陬驛の大氣か、吾曹青衫の發育をたすくる興奮劑として、少なからぬ功能を有するものに非らざるなきを知らんや。彼の大江戸政府か、天下の學才を網羅せりと誇張したる聖堂か、さらに雄傑の人才を造出せざる譏りあるにあたりて、偉人英士の多分は、反て落莫たる邊隅の各藩黌に、生れたるもの多きを見れば、朱門盛都の、いたづらに浩潔の心を、輕躁に導きやすきを知ると同時に、いはゆる山河淑靈の氣の磅礴する處、世の人物を感化し、皷吹することの、益々著大なる所以を知るべし、それ然り、位置の僻遠は、寧ろ大に、吾曹學生に欠くべからざる、剛稜勇敢の氣節と、不屈撲直の精神を養ふの利を有し、氣候の酉寒と積雪の深きは、躍々たる青衫の猛膽を練り、淫逸放恣の通弊を治する良藥たるを想はずや、僻邑にして淳樸精勉、華衒に學んで輕跳狂肆、勝るところは果していづれゞや。かの津々として都語を喋り、都人を氣取り、都服を裝ふて、皓明なる神心を腐蝕し、蠢爾たる眉態、ふけば飛ばんとす

る洛陽の輕才子は、すべからく來て、我が北陸山川の壯絶雄大なる凄容を俯仰し、澹然として鼠大の蛙識と豆の如き懦心を打破しつくして可なり。

若し夫れ、文明技術の見聞に欠くる處あるが如きは、稜々鐵を欺く双脚の肥ゆるあり、叩て以て幾旬の修學旅行を企て、優に無量の新知識を博得して、浩然の氣象を素養するにたる、七旬の校暇には又、一笠孤筇、白雲を追ひて懸崖をよぢ、湖海に伴ふて青松にうそぶき、時には草蔭に孤立する斷碑のもとに、無名の英雄か、長恨を宿して過ぎし昔を忍び、歴史と人物とに關連せる舊跡をたづねて、平昔の興廢に一掬の涙をそゝぎ、綽然として身は「踏破天下七寸鞋」を唱ふの餘勇を具ふ、豈に壯ならずや。

誰かいふ、尾山城畔の宏堂、聲譽いまだ揚らずと、來れ、願くは臂を把つてともに當世の智識を語り、北國男子が由來潛養し來れる、卓犖不撓の堅節を試むるをえん、吾校の健兒、何んぞ俄に諸高の後に瞠着たる者ぞ、此くの如くにして、若し我同學の技量、諸高に讓歩する處ありと云はゞ、乞ふ反省幾番、精勉努力して激勵微弊をさり、宿痾をのぞき、雪燈幾年、書を枕にして學術の泉源をきはめ、智識の深淵をさぐりて、瞑たる彼の蒼穹を擽するの覺悟あるべきのみ。

時習寮（承前）

時習寮の自治制

河原始二

寮生は總て舍務掛の命令に從ふべし

是れ時習寮が未だ自治制（純然たる自治制ならざるにせよ）たらざりし時、寮生心得第一條に記されたる恐しき文字にあらずや。其才德學藝或は此に適する能はざるを耻づと雖とも、兎に角に尋常中學規定の學科を修得し、今や正に高等教育を受くる吾人か今日猶舍務掛の命令を待て而して後始めて行動せざる可からざるか、進退せざる可からざるか

吾人は記臆す、年齒吾人と伯仲の時代に於て既に天下の重きに任じ、西鄕南洲をして推服措く能はざらしめたる橋本景岳は其著書啓發錄の劈頭に去稚心と論破したることを。仁慈なる父母、懇篤なる師長は杞憂の餘り吾人を目するに猶或は小學兒童を以てせられむも、吾人は既に其躰格に於ては銃劍を提げて國家の干城たるべく、其精神に於ては正義を持して日本の國民たるべし。學の淺き未だ以て天下の眞理を窮めず、識の薄き未だ以て社會の事物を議するに足らざるも、而かも吾人の良心は常識的に善の善たり、惡の惡たるを教示し、事の當さに爲すべきと爲す可からざるとを辨識せり。可愛兒には旅を爲せよとは世人の屢々口にして且つ眞理なりと信ずる所、吾人は其所謂世間知らずの可愛兒か父母の膝下を辭すること僅かに一年、歸省に當りて又先きの乳臭兒たらさるを知る。修むる所の學術効果なきにあらさるも多くは接する所の境遇之をして然らしむるのみ。朋友を擇て其人なきを歎し、先輩を訪ひて其德なきを悲む。異鄕病臥我を慰むる至親なし吾人は自ら攝生を力めさる可からす、四圍他人我を守る家族なし吾人は自ら保護を計らざる可からす。南窓兀坐一念鄕里に馳すれは老親堂に在り日に吾人か健にして業の卒るを待ち給ふ、吾人何の幸か神地に生れて男兒たるを得、又聖代に遭遇して學海に棹せり。父兄我を奬まし師長

我を導く、誠に以て夙夜黽勉學の蘊奥を極め恩の萬一に報せさる可からず。義務を知れは義務大なり、責任を悟れは責任重し、而して吾人は既に此義務を盡し此責任に堪ゆ可きを信す。豈に他の束縛掣肘に甘むじ伸ふ可くして伸ふる能はさるの愚に處すへけんや。父兄師長將た徒に婆心杞憂を抱き氣鋭心壯敢爲進取の青年をして空しく婦女的制裁の下に屈せしむへけむや

我の感する所は他も亦感する所、自治の聲は何時しか寮の内外を動かし大勢の向ふ所、寮則の改善を促し舍務掛も其說を贊助して種々協議の結果、時習寮細則二款二十八ヶ條、寮生規約十五ヶ條を改めて内則八ヶ條、寮生規約四章二十五ヶ條となしたり。是れ本年二月二十日より實施し現今行はるゝものとす、今一々之を列擧する能はざるも其最も主眼と認む可きものを採らは恐らく左の條々ならむか

内則第一條、　時習寮の管理及寮生規約の督勵は舍務掛之を掌る

之を舍務掛の命令に從ふ可しと云へるに比せは寛猛同日の論にあらすと雖とも而かも未た純然たる自治制ならさる所以のもの實に此に存す

寮生規約第一章第十一條、　室内の整理に關しては其室員連帶の責任とし、一室員の行爲に關しては先づ其室員全躰責善の義務を有す。若し此規約に背くものあるときは第三章第十六條に依り其情狀を酌量して寮生相互の制裁を當人に加へ、又塲合に依りては其室員全躰に加ふ可し

第三章第十六條、　寮生相互の制裁を分ちて戒飭、禁足及諭告退寮の三種とす、但し此の制裁は懇に忠告善道の情誼を盡くし毫も之を用ゐさる塲合に至りて加ふるものとす

「室員連帶の責任」と云ひ「室員全躰責善の義務」と云ひ「寮生相互の制裁」と云ひ「忠告善道の情誼」と云ふ皆自治的精神に出てさるなし。各室員各自其責任を重じて而して後連帶責任の事說く可く、各室員各自其義務を守りて而して後全躰責善の義務談すへし、既に連帶の責任あり全躰責善の義務あり而して後寮生相互の制裁論すへき哉。其源に溯れは何れか室員各自の自治自由獨立特行にあらさる、若し夫れ學生相互の感化薫陶切磋琢磨に至りては予既に嘗て「朋友」一篇に於て本誌を汚したるとあれは此に冗せさるへし

寮内一般の事各室員全躰連帶の責任に依ると雖とも專ら其局に當りて之か整理に任する者なかる可からす、此に於て各室員互選に依りて一室一名の室長を推選し、校長の認可を經て一學期間其整理に任せしむ。入寮退舍の許否、門限遲刻、外泊の管理、其他之を約すれは寮生規約の厲行實踐は多く掛りて室長か雙肩に在り、故に室長を推選するや能く其任に堪ゆ可きものを擇ひ、室長に推選せらるゝや己を致して其義務責任を盡さむことを要す。各室の室長自ら率先して此規約を厲行し、其室員相競ふて後れさらむことを期さは寮風の善美誰か又疑はむや。假令其數にして七十餘名を算するに過きすとするも、嶄然として校内の精鋭となり、嚴然として校風の指導者たらむこと何の難きことか是れあらむ。自治制の良法たるを信して自治制を欲し、自治制を得て自治制に生活する現時の寮生は思ふに自治制以前に比して幾何程の發達をなし、隨て寮風も亦幾何程の改善を致せしならむ。而して果して發達をなし改善を致せしか、予は寮生諸君か三省を請はむ

と欲す

案するよりは產むは易く、其結果如何と氣遣はれたる自治制も實施以來着々武歩を進め、規約を厲行し義務責任を盡し、殆むと舍務掛の命令干渉を待たすして燦爛たる美花を咲き豐熟せる好果を結はむとす。然れとも自治制の實施後日月を經ること未た多からす、時期創業にあり創業の易くして守成の難きは古往今來實事の證明する所、此に於てか吾人は舍務掛に向つては今日の成蹟上寮生に更に純然たる自治制を許可するの不可なるなからむを申言し、寮生諸君に對しては愈々益々規約の實踐を厲行し、寮風をして愈々益々完美の境に至らしめ以て純然たる自治制實施の一日も速に近かむことを冀ふあらむを切望す

時習寮の增築

寄宿舍は如何なる必要ありて如何なる目的ありて設置さるゝや

他府縣人に便益を與へむ爲めに

校風發輝の指導者たらしめむか爲めに

此二者を出てゝ、學校所在地外の府縣より負笈せる學生は多くは其地に知己親戚を有せず、習慣風俗を知らす、下宿屋ありて吾人を歡迎すと雖とも其商賈的根性と翻手作雲的交際とは初めて家庭を辭したる眞率無垢の青年をして感染下達せしむること測るへからす。此に於てか寄宿舍あり父兄安むして子弟を托し、子弟亦安むして勉學す。他山の石相磨し相琢き光澤温然融合和樂し、各自反省克己良習染み惡癖去りて玆に純良なる寮風を生じ而して校風の中堅たるへきとは予既に略「時習寮と校風」に於て論したれは再述せす、直ちに此の二の必要を目的として我時習寮は今日の規摸を以て滿足すへきや否やを問はむと欲す

第一高等學校寄宿舍

木造三階建二棟　五四九坪九四八　（學校生徒數九一七名）

人員を限り寄宿せしむるものとす

但し新入學生は學級に拘はらす一學年間入寮すへきものとす

第三高等學校寄宿舍

木造三階建一棟　四八三坪　（生徒數六三七名）

寄宿舍に入らむと欲するものは保證人二名と連署し其願書を差出すへし

第五高等學校寄宿舍

木造二階建二棟　六三〇坪　（生徒數五七八名）

願に依り習學寮に寄宿することを得

但し醫學部生徒は當分第二年級以下都て寄宿すへきものとす

若し正當の理由ありと認むるときは通學を許すことある可し

山口高等學校寄宿舍

木造二階建三棟上下合せ　五四一坪六六六　（生徒數一五八名）

本校生徒は都て寄宿舍に寄宿すへきものとす

但し特に許可を得たるものは此限りにあらす　（以上廿八年調規則書に由る）

第四高等學校寄宿舍

木造二階建一棟　一四〇坪二五　（生徒數六二八名）

時習寮は入員を限り學生を寄宿せしむる所とす　（廿九年調）

調査精細を欠くと雖ども諸君の烱眼は此の對照を見て得る所ある可きを疑はず、所在地方の便宜によりて入舍規則を異にし隨て建築に大小あるは理の當さに然る可き所、生徒都てを入舍せしむる山口あり、學級を限りて都て入舍せしむる第五あり、新入生は學級に拘はらす一學年間入寮せしむる第一あり、願に依りて入舍せしむるは事の最も公平なるもの、學級を限り一學年を限り必す入舍せしめむとするは他を束縛するもの、而かも校風養成の點より考ふる時は吾人は此束縛干渉を甘受せむと欲す。我校に於ては即ち如何

年一年と新入學生の金澤に來る者增加するや不完全なる下宿屋亦從ふて增加すれとも其數たる未た以て新來者に稱ふ能はず、加ふるに鐵道の竣工と師團の設置とは物價を騰貴せしむること甚だしく、蜂章校の學友ならねども下宿屋の無禮跋扈を忍ばざる可からす。唯之を忍ぶ猶可なり、此が爲め愉快に勉學し能はさるを如何せむ、而して時習寮を顧みれば入舍定員は僅に七十許名にして夥多の出願者は空しく稀有の欠員を待つのみ。校風養成の爲め特更に束縛干渉を用ゐずして勢既に此の如くなれば我校の當局者は必ずや新寮增築の計劃あらむ、予れ規則書に現寮に並びて點線の一棟あるを以て之を知る、而かも吾人は計劃あるを知りて之を喜ぶと共に其實行の遲くして吾人をして速に增築あらむことを請求せしむるに至れるを悲しむなり。若し之を學校經費の上より云はゝ新寮一二棟を增築するも何程の事かあらむ、而して之を學生の修學と校風の消長とより論せは其影響する所決して尠少ならざるべし。故に吾人は當局者に獻言す、請ふ速に新寮を增築せよ、而して學生の道德智識を進め校風の純良を致さむか爲めに其例を第一高に取り、新入生は學級に拘はらず一學年間寄宿す可きものとせよ、而して寮内には純然たる自治制を施行し寮風をして校風の中堅たらしめよ。吾人は當局者か一日の苟且姑息は遂に百年の悔を殘さむことを恐る膨脹的日本の青年を敎育する者、豈に猛省せすして可ならむや

結　論

予は今筆を擱くに當り篇を逐ひ號を重ねて如何なる事を論したるやを再考せむと欲す、予は「時習寮と校風」に於て寮生諸君に寮風即ち校風にして寮生の數之を全校の學生定員に比せは凡そ九分の一にだも如かすと雖とも、其關する所淺からさるを以て須らく自重自任身を修め心を誠にし純良善美の寮風を化成し煥然輝發校風の指南者たらむことを切望し。「時習寮と勉學及運動」に於ては從來寮風委靡振はす端正嚴肅なる諸子をして足其地を踏むを屑からざらしめたるも今や改良歩を進めて亦疇昔の時習寮にあらす、武道修行躰育實踐は其最も特長とする所、自修勉學は我欲するに任す、正に是れ相磨勵して德性を啓培し他を知り他に知らるゝき所乎。即ち敢て通學生諸君に入舍を勸告し提携以て寮風即ち校風を純化せむとする所以を說きたり。「時習寮の自治制」は寮生をして義務責任を重むじ稚心を去つて大男子たる志氣を鼓舞涵養せしむ。予は當局者諸氏に

向つて純然たる自治制實施を請求し、寮生諸君に對して寮風の純良之をして速に至らしめむとを謀り以上の目的を大成せむには先づ第一着に「時習寮の增築」をなし、新入生は一學年間寄宿せしむ可きを以て今日の急務たるへきを論しぬ

論や淺薄、文や拙劣、自ら顧みて我厚顏に驚く況むや博雅の君子をや。然れとも予は猥りに筆を弄するものにあらす、心實に之を以て必要と認め之を以て急務と信すれはなり。當局者、通學生及ひ寮生の諸君願くは予か愚衷を察し各自三省九思高敎を吝むなからむことを　（完）

雜　錄

ショウペンハウア語錄

B. T. 抄譯

○哲學を研究するは猶ほ高山に登るが如し。荊棘を排し蒙茸を披き、幾たびか躓き幾たびか倒る。然れども歩一歩、里一里、登れば登るほど廣し。下界に瞰臨し俗世の喧囂を離る。其絶頂に踞して嘯傲し、遠く雲物を見て超然たるの愉快は他に求め得べきに非ず。

○大學に在て哲學を敎授するものは皆な麵包を獲んが爲めなり。彼等は乞食なり山師なり、彼等は馬鹿なり阿呆なり。豈に哲學の何物たるを知らんや。

○古往今來、眞に大哲學者と稱すべきものは只だ三人のみ。「プラトン」「カント」及び予是れなり。

○動物の中最も大膽なるものは蠅なり。他の動物は殊に人を恐れ人を避く。而るに蠅は人の鼻端に止る。

○衆人は獨居すれば退屈す。蓋し彼等は獨りにて笑ふと能はざればなり。彼等は獨笑を以て却て馬鹿氣たるとと思惟す。然らば笑は他人に對する記號に過ぎざるか。否な然らず、衆人の獨笑する能はざるは想像力の缺乏せるに在り、精神の痴鈍なるに在り。猶ほ下等動物は獨居するも群居するも決して笑はざると同し。昔し「マイソン」嘗て獨笑してありしに、或人之を訝り問ふて曰く「君は何故に笑ふや、何人も居らざるに非ずや」と。「マイソン」之に答て曰く「是れ其最も可笑しき所なり」と。

○佛人は卑怯と呼ばれて怒り、獨人は馬鹿と呼ばれて怒り、而して英人は紳士に非ずと云はれて怒り、虛言者と呼ばれて尙ほ怒る。

○劇場に行かざるは猶ほ鏡なしに化粧するが如し。

○大器量を有する人は、尋常人を相手とするよりも寧ろ馬鹿者を相手とするを好む。此れと同理によりて、暴君と一搔、祖父と孫は、自然の同盟者なり。

○歐洲各國の語に、人間を顯はすにPerrsonの字を用るは頗る其當を得たるものなり蓋しPerrsonaてふ語の本義は假面にして、古代劇場にて役者の用ひしものなり。世間何人も自己本來の面目を顯はさずして、常に假面を被りて其役を務む。畢竟社會に間斷なき「コメヂー」に過きず。是れ少しく心あるものは社會を以てつまらなきものとするも、馬鹿者は大に之を喜ぶ所以なり。

○空間に於ける距離は物をして小さく見えしむ。故に亦欠點なきが如く見ゆ。是れ景色を縮寫すれば實際よりも大に美麗に見ゆる所以なり。而して時間に於ける距離は亦た同一の結果を生ず。遙か昔しの光景事情及び人物は頗る美麗雄大に見ゆるものなるが、是れ其輪廓のみを見て詳細なる欠點を見ざればなり。現存者は之に反して、いつも多く欠點のみを見らるとなり。又た空間の點より觀るに、小物も接近すれば大物となり、益々接近すれば遂には其物以外には何物をも認めざるに至る。而して少しく遠さかれば小物益々小となり、遂には全く見えざるに至る。時間の點に就ても亦た然り、吾人は日常些細なる出來事に就て心を勞し情を激す。是れ其の吾人に接近して大事の如く見ゆるを以てのみ。故に時日の經過するに從ひ吾人は全く遺忘するに至る。

○外部の活動を要する人は內部（心）の不活動なるに因る。內部の活潑なる人は啻に外部の活動を要せざるのみならず、却て其思想を亂し大に害を與ふることあり。

○世には佳麗なる風景多し。去れ共其間を彷徨する人間の形貌は至て醜陋なり。此の如きものは見ざるを好しとす。

○風船に乘る人は自己の益々上りゆくを覺えず、唯だ下界の益々沈降するを覺ゆ。

○世に處する正確なる羅針盤を得んと欲せば、常に此世を以て後悔塲若しくは流竄地と觀ずるに若くは無し。予は啻に予が哲學に本づいて斯く言ふのみならず、各代の賢者亦皆然か斷言せり。耶蘇教父に在りては「オリゲン」の如き、又た婆羅門教、佛教の如き、希臘の哲學に在ては「エムペドクレス」の如き、「ピタアゴラス」の如き、其外「チツエロ」の如き、「ウアニニ」の如き、然りとす。殊に眞正なる基督教に在ては、人間の生存は罪惡及び過誤の結果なりと爲す。故に吾人は日常、人に對して君よ、足下よ、等と云はずして、我が苦しみ仲間よ、と云ふを以て適當なりとす。

○吾人は實に苦痛なる世に在るが故に互に相助け相負ふ所あり。是れ蓋し忍耐、同情、寛容、博愛、の必要なる所以なり。

○予は眞理を說くが故に、人或は予が哲學を以て快樂なきものと爲す。此の如きものは去て坊主に行き、復た哲學者を勞する勿れ。

阿奴浦の一夜

內藤柳外

前言

こは余が今を去る三年以前、吹くや若葉に輕き軟風の、綠の空をあやどるは、遠き霞烟か近き嵐霧か、行き通ふ人の袖薰る春の中、思ふよしあれは、錦を衒ふ都の艶狀にそむきて、一笠一杖飄々乎、山水自然の懷に逍遙し其析、眼に映り、耳に響き、胸に浮びしまゝ東西南北となく、書きつゞりし鞋節萍蹤てふ日記の一章なり。

文は拙劣、想は滅裂、萬眼の一瞬顧を希ふは愚か、燒いて灰にしつべき品物なれど、誠宿せし昔日忍べは、今更に何となく別れ難き思して、名殘惜まるゝ心の內、咽びて流す一事こそ、怪しき情の奇しき絆なり。

吾ながら恥らふ鞋筇莽蹤一篇、諸賢の嘲笑招くは固より覺悟のとなり、投炎の金輪際、手向のまるしに、せめて孰れ一章にても、掲げ給はれかしと泣賴の末、漸々これはと指れしこの一章、それすら所々省きたれは、いやましにまして物苦しく見榮なかるべし。讀む同學の諸君其心して、さな責め給ふな。

今　日　　柳　外まるす

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

水や空なる碧玲瓏の阿奴浦、白沙を嚙みて渚涯に、號り狂ふ濤浪の、怪岩奇磵を食みては飛び散る露珠の、高く霄をついて霓虹に入れど、雨滴潛として壤を浸濡せざるは、その皓光を、あるやなしやに粲めく、黃昏の宿星と競ふ意にや。寒煙輕く苫屋に騰りて、濃く曲浦をかすみ罩め、梢上奏づる琴瑟の籟音は、遠く長汀千里に、耳をそはたてなは、微に聞き得んも、一連の青松は影淡く、穹畫に靄をたゝみて東西に蜿蜒り、滿堤の蒹蘆は黑く、鹽を孕みて海風にそよぎ、漁舟點々瀰湲に乘り、漾瀲に操つる櫓聲の崩す所、櫓齒の弛突急旋に應じて、閃く蹴波斬浪は、舟舷たゝく漣に紫紅を映しつ、西山に舂く金烏は、能峯に崩す黯灰の雲霧に迎へられて、落暉遙に加岳の陰に沈み終へ、只一路の餘光、靜と動とを辨つあるのみ。今やこれ冲天に騰る數個の赭龍、洋海に横はる數個の白龍、共に勢盡きて的玉を爭ふの力なき時、塘を急ぐ歸鴉の喧しさに、全くの詩心破られて見上くれば、輝影一つ二つ三つ、彼方此方の空天に、果ては極みなき列星の狀」。川添の柳陰流潤ふ所、白鷗暖く水村漁廊の夢に入りてより、幾時をか經たりけん、弓手に櫂ぐる短檠の燃油、燼きなんとして明又滅、滅又明、あるか眠むれるが如く、なきか死せるが如き燈光の、馬手に繙く船山詩草に鬱影をたゞ〳〵朧々、字行も定かに讀み得ねは、萬感胸に迫り來りつ。悲しや位と分とを打ち忘れ、術なくて騎れぬ青雲に、照る月を操りて遊はんとせし猿猴の身の、あわれ世に破られ、自も破り〳〵てうちそこねし腹皷、荻の葉に置く露浴びる老狸の風情のそれならで、蜘蛛の巢而已の書窓に颯と吹き來る青嵐を、骨のみに破れたる古扇に煽ぎ、拜みては慚汗したゝる先師の遺筆、苔蒸し墳缺け、蔓草塚の丈に及ふ下、先師の靈、吾が無智を怒り給ふならん。讀みては涙をそゝぐ家君の戒書、家君齡既に七旬を過ぐ、弓腰白髮門に倚りて、吾が無識を怨み給ふならん。解きて愁に沈むは舊知の音狀、舊知皆弧矢を誇り、輕車揚々、吾が不遇を憐み且つ誹笑するならん。四圍すべて斯る楚歌の中、焚く香煙に白塑の面影くゆらせる吾が瘦軀臘身を、幸福の花園に笑ひ、光榮の灌汁に醉ひ、安慰の搖籃に息ふ人々に見られぬこそ此上なき事なれ、いざや萬古歲を經て變らぬ自然に、悠久流るゝ銀河の洒く聖氷を浴びて、折ふしの觀に有耶無耶の想を走せん、只の今里越に響き渡りし遠寺の鐘聲の凍り淋び、もの悲しきを脊に受け流しつゝ、朝日山下の假寓を龍鐘として出で、竹叢を潛り、墓圃を渡り、麥壠を脫け、蹣跚として淵涯に蹌跟しは確然午の刻なりき。

只見れは、望界濛々漠々、帝坐垂れて笠の如く頂に迫り、蟐峨深く桂樹の繁に跡を晦まし、玉兎蟾蜍に騎りて潮に棹さゝす、海若疾めるか、風伯病めるか、霎時が程は密雲固く地を封じ、凝風靜に天を包みて、萬籟俄然熄みぬる時もありけり。海に螢つく漁火、天に粲めく星、共に影や何

地、寫す鏡面を暗から暗に稻妻引く數路の腥氣、嵐と化りて界隈を繞りつ、幾世龍姫の犧牲たりし幾多の亡魂が、赤奮若の彼角、攝提格の此隅、もらす嘆息のみは、降りて海面を掠め、冷へて煙の如く淡く、激して幻の如く宛然に輕し、かゝる悲慘の光景を現出したる造化は、尙も人類をして苦ましめんとにや、暗迷黑灰の裏、霜枯れにし花野の末の秋の夕暮に、明日知らぬ賜物を怨み嘲つ蟋蟀の音よりも細かるべき、一路の呼吸嗽々と、嵐待つ秋曉の明星の如く、卵塔塲に明滅する鬼火の如く、大空に茫乎と照る一個の燈光を、吹き回るを聞き得べし、これ磯丘洗ふ波音の松籟に通ふなりけり。知らず、下界の人畜悉く死床に呻吟き盡せるには非ざるか、知らず、惡鬼羅刹跳梁り出でゝ狂ひ回るには非ざるか。呼、夜は更けて人は將に眠れり、人は華胥に淪みて夜は將に深し。

萬籟忽ち死して、造化業をなし盡し終りたらん今、死の神の宮殿かと思ふ計の此景臺に、死せるが如きわれ、只一人天地に俯仰して、古往、今來、未垂を想ふ。前を望む浩々蕩々幾千年、先聖遠く形骸腐り、偉圖灰となる、來を望む滔々幾千萬年、世や如何になり行くらん、これを想ふて涙滂々たるは、陳子の憂なる情なり。道にくらく、德にうすく、事にうとき吾人は、人生五十蠢々として花に眠り、月に醉ひ、一直線に「死」の軌道を急ぐべきか。果た天にありては星、地にありては花、人にありては愛、其愛の關係を斷ちて冷然、世外に超躍すべきものか。吾之に迷ふと久矣、今來りて「ホレプ」山に羊を牧ひ、燃ゆる柴の異象を見し摩西に傚ひ、天地の聲を聽き、神明の言に耳を傾くるも、聖訓到底腦に入らず、福音に接するの階段高く俗臭益々胸に湧く。

屬を訪れて艶盼を娛むの郎なく、旗亭に招びて嬌音を喜ぶの客なく、綺羅身を纏ふも愁益深く、粉黛誰の爲にか鏡筐を開きて顏容を飾らん、琴瑟の絃悉く斷ちて、金釵の爪纖手に弄せられざると日月に及び、日夜涕淚、舊の情郎を慕ふは、妓の慣常なり。嗚呼寂寥の荒野に、枯葉拂ふてしたへる軒の軒に、咽ぶは獨りかれ〴〵の秋虫のみならんや。情あり、涙あり、血あるもの將に皆然り。余が契交の知己、概ね轗軻沈淪の人、恩愛の綱をきり遺篇一筐、杜鵑に意を通し自刃して、小羊の如く聖壇に犧牲たりしもの一人。父兄に背き、朋友に反き、飄然去りて戎軒に從ひ、馬革に骸を包み、遼左を紅に染めしもの一人。宿志に非ざるも、一業を得て北米の礦坑にあるもの一人。企計破れ、事業廢れ、天變地災に罹り、三族の親を失ひ、憤然山門に入りしもの一人。渠等共に富城、神江の流滾々、立嶽の雪皓々、天聾し地啞し文昌君帝紫微の宮を出て給ひし時、其の脚下に俯して血をすゝり、兄弟たりし者、今や四散五分、悉く社會の逆流兒、社會に個人たる權なき不幸兒なり、加ふるに生存するもの余を算して五中の三、中獨り余のみは青衿界に滄浪す、而も將に渠等の境に逝かんとす、之を想ひ彼を想ひ、一念吳山麓下の茅屋、蓬髮亂體、肩を接して肉を炙りし舊社に及べは、怪しや五體震動き、心天外のものたらんとす、運命の神は何故に吾等五子に災する斯く甚しきや、五子各父あり、母あり、弟妹あり、其不幸に泣くもの五子のみに限らざるに、運命の神は何時迄、吾等を弄せんとする。

（未　完）

戀瀨川

奮庸生

戀瀨川は古歌に、「筑波れの峯よりおつるみなの川」の末流にして、源を筑波山下に發し、東流して霞が浦にそゝぐ河なり、大さ犀川にくらぶへく、沿岸の風光すこぶる古雅明媚にして、古趾舊蹟の尋ぬべきもの少なからす、余れ、郷にありしころ、しば〳〵清遊をこの畔りに試みて、想ひを文墨に寄せたるものは即ち此のなまめかしき調なり、燕韵みだりに高教を仰くの値いなけれど、時にこれ金風淅瀝、軒端に涼しき夕風も、いつか眞葛をひるがへして、過ぎにし方のすゞろに忍ばれやすく、幾群の秋鳥、雲にいりて故郷にかへるの候、あへてその一節を篋底にさぐりて、茲に餘白を汚すといふ。

戀の種、たがいつの世に蒔きそめて、情けの實生さきしより、をさはたの梭を投ぐるいく世幾代、哀はれいくそばくの花柳を挫き、女蝶をや殺しけむ。妹脊川朝な夕なの船渡しの、棹すになやみし風波もたゝず、百年の苦樂、土となるまで、洞房花燭夜をつらねて、盧生か枕さむる期なく、槐安の樂みつくる時なく、音羽の花見、小倉山の紅葉と、この世面白く經渡りにしためしは希れなり。ふりわけ髪の雛事にも、戀衣きせつ着せられつ、十八公の操も匂ふ花盛りには、晴れてゆるしの下紐を、阿漕か浦の鴛鴦にさへ比べて、死なば諸共に蓮臺に半坐をわけてと、契りにし比翼の赤繩も、仇櫻、いつかは染めし眞紅のもつれ結ぼれてより、友千鳥ひとり荒磯にすてられて、今は浮名もたちばなの、花の姿も萎みはてつ、陽炎の明日をもしらぬ命の裡に、つゆの情けをたよる人々の憐れさ、探り叩かば、落つる涙はいづれ沈みし戀瀨川のふち瀨か。

大觀すれば、一代のいのち、遲速開落の差別はあれど、やがて戴く一杯の土饅頭を此世のしるしに、五十年の旅路につかれて、長へに夜臺の睡りさめずなりては、綠髪も、明眸も、英雄も、痴漢も、はた榮枯も盛衰も、歸するはをなじ冷かなる黃下の一髑髏のみ、憐むべからずや。雨にやつれ、風に惱める乙女の匂やかなる、よしや、姿は仲秋の月にも似て、彌生の花にくらぶべく、國を傾け城をみづくの媚ありとも、芳容のうつろはぬそも幾年の間ぞや。春の風、なよやかに咲かせつる梢は、やがて打ち戰ぐ木の葉の時雨に秋長けて、淺茅が原に、かれ〳〵なる虫の怨も、絶え〳〵て細りゆくめり。けさは錦上の花桃源の春ふかく、妖艶たぐひ希なる盛りと、眺めたる小町櫻も、夕べは卒塔婆のもとに棄てられて、千金をかこちにし果てありと知らずや。

さても青春に再來の期なく、紅顏のいたづらに老え易きを惜みてか、燭をきりて遊びけるそのかみの豪華、思ひいでゝいよ〳〵やさし。何事もたのむ樹の下雨もりて、此世はかりの笠宿りと、三界のよしあし解脫したる出家沙門の聖人だに、紗羅桑樹の花の色めでゝ、人知らず墨染の戀妻にやつるゝも、しかすがに浮世の曇りは拂へかねければにや。まして外道の俗習が、もろかつら寄り添えやすき牽牛花に、露の思ひは數ならぬ女涙男涙の、みぎはの泡と消ゆるまでも、狂ふ煩腦のたわけさ、怪しとや言はん、あさましとや見ん。盛遠武者か、命をこめし懸想のふみは、ひと夜相初川の關路ゆるされて、忍びに斬りし一刀の寢首は、ねらふかたきと思ひきや、いざよふ月の戀人を殺して、むせかへる千行の涙に外を忍ぶ摺、亂れぐるしと髪おろして、たのむはあの世の契り冥土の裏に、我身一つの秋ながら、天蓋のもとに隈なき圓相の月をながむるの譽をさへ殘しぬ。兼好は曰く、世の人の心まどわすと色慾には如かず、人の心は愚かなるもの哉と、げに凄まじきものは戀の業なり、戀の奴なり、やよ、空とぶ鳥も、草葉にすだく虫も、萠えづるも枯

るゝも同じ戀愛の哀れは、いく千百年のとし月を經てか盡きんとすらん、みなの川、筑波の峯より落つるみかさの、戀ぞつもりて淵となる世に。

文　苑

堀四郎大人追悼會に

安木田頼方

梅のよき香は心なき賤山かつもあなとぞ行かてにすなるまいて若木（鷹摩卿）のかをりをや　頼方舊藩の國學御内用方と稱へしつかさに連りつとめし頃ほひ青木秀三郎　秀枝高木有制（守衛）ぬし等かすめら御國の本つ道の大き道と君臣の名分大義のある所をは藩の世子の君の豫てゆ心とし給ひ大き御藩とあるつとめをいや勤め勤め給はんのみ心ならひにませは猶も諸藩の事情と時勢なとつら〳〵椿つはらかにきこえあけんと君側にさもらふ士をあ率ともひ仕ふる大野木源藏大人堀四郎の大人なとに源藏大人の宗家なる二郎の大野木克敏大人と共に　勤王のやことなき事をは蓮（ハチス）の浦のうらなく語らひ汀のあしのしけく行かひおのも〳〵燒太刀の利心（トコロ）ふりおこし此時にこそ大御世をいにしへにかへしてんおとろへ來し大道の榮をも仰き見はやとひたふるにも道さまたくるうはらからたち伐りそけつゝ殿の預りおさめ給ふるさき卿の三つの御國の御民らの眠れる夢さましてん　皇祖皇宗の大御をしへなる眞直の道の大き道をさとし蟹の行横さの道にふみまとはしめじとおもふとちくさ〳〵はかりごちたりしに大人は其中のたのみ殊なるひとりになもありけるを今は行水のかへらぬ人の數に入りての後を年へぬるはいとものくやしくいたくいたましく深くもあたらしくもとものうらめしくこそ

御世の爲若木の梅の陰にゐてなす事ありし君そかなしき

といひしは明治廿九年といふとしの八月廿三日

斧の柄の記

草野時雨

今宵は舊暦七月十四日夕の空曇なく晴渡り日かけふかく海に沈みなからも猶西の空紅なる頃よりはやひむかしの山の嶺より圓かなる月はさしのぼりてあかし、月見月には一月はやく望の夜にはひと夜さき立ちたりかゝる時の月にあくかるゝも興ありぬへしあはれこのをかしさを其まゝ見過すへきやさはいへあまりに里はなれし處もいかゝあらん辰巳の御園こそ昔おもほへてよかめれと日頃へたてぬ千木の舍のあるしをそゝのかして出ぬ道すから物語に心うつりて覺えぬにはや團子坂てふを登りて瓢か池にいてぬ邊は名にしおふ夏不知森なり月はまた高くも昇らねはかくれて見えすたゝ暗きか中に松陰の瀧のひゝきのみ我物顏に白し頃は秋なからまた夏の心地せられて暑きに名もつき〳〵しき夕貌の亭にかすかなる燈火池水にうつりて漣にくたくる樣なと畫にもかきたらんやうにてめつらしさこよなくなんこゝも過きて高野亭の跡に藩の君のさかしくおはせしむかしをさぬひつゝ黄門橋を右に松林を過くれは霞か池也汀の古松の下の涼の臺にこし打かけてなかむれは月いはやう昇りて常には高き山崎森の梢もいとひきく覺ゆ池中の龜甲島の古松蔭深く沈ん

てば魚木に登る心地し竹生島のけしきをいとちいさく作りたらんやうにていはん方なし折しも蘇武か文結ひてし雁ならぬ五位てふ鷺一隻月を横切りて聲もらせし樣よ斧の柄も朽ちぬへしあはれ歌の片はしをたにと千木のやにあるしのいへりけれはさなりとてひねれともいてこす只徒に時もうつりぬればこゝを立ちて右に折れ汀にそひて行けば月見橋に出てぬ見渡せは夕霧を中に隔つる向山嶺つゝきなる涼山なと薄墨にかきたらんこと嶺の松なとおほろけに見ゆるに遠く蓮の湖に月の光のほのめくさまけに月見橋の名にそむかてなんこゝをもたちてやかて成巽閣をめくり曲水にさかのぼりて山崎山にのぼる茂りあひたる森の中にたてる古亭はむかしのみやひの後也傍にたてる手水鉢石燈籠苔むしてふりにける石の色こゝは紅葉の名所とて流石に茂りに茂れは月もさたかには見えす木の間をもるゝ影も一しほに心ゆくさまなりけりおもはすやすらふまゝに時もうつり肌もいと寒おほえぬれはいさいなんと千木のやの主人をうなかしてこゝを下り道をかへてさゝえ山をめくりてやかて家にたとりつきたる頃は月は中空をやゝかたふきぬ

追悼詞（之れは去八月五日亡友追悼會の折、讀みて供へし者なり。）

逢生庵

廣き武藏野に生ひたつ草は繁けれと、香ぐはしき花を開らき功ある實をも結ふはいと稀なり。茲に晩霞の君は早くより學の道に志しふかく、自つから家の風をも吹かせてんと向が岡の高等學校に入りて、夏の夜の螢、冬の晨の雪に怠らずいそしみ勵み給ければ、績もまるく久方の月の桂もたはやすく君こそ手折るべけれと、吾も人も羨み慕ひまつりしか。よき事にまか事いつく世の習にもれずや、ことし明治廿九年七月四日の朝の露のひるまもまたずかへらぬ旅に出立ち給ひぬ。あはれ根ざし異なる紫の此の一もとよ。世にも人にもめでたゝへらるゝ生ひ先なるを、霜おき初むる秋をも待たず無常の嵐に吹きまはれぬるぞ、いともあたらしう悲しく痛ましき極なりける。ましてや君か病の床に伏し給し時、身は越路の學の窓に繫きとめられ、心の駒は天かけれともせんすべなくて一度も音なひ奉らず、また況んや葬りの席にだも連なりえざりしをや、飽かず口惜しくなかき恨は何時の世にかわすれうべき。偖ても今日なむゆかりある友どち打ち集ひて、君が靈魂を慰め祭る席の末にありて、此くなむ聞えまつるわか思の丈を、露もあはれと聞し召し給へと、捧げまつる榊葉に取り添へて惶み畏み。

位山のほる麓の道ならて何いそきけんよもつひら坂
一とせをなかに隔し友垣も歸らぬ道の關となりける

送臺灣守備軍隊歌幷短歌

福井喜彦

あづさ弓引きてゆるべぬ、ものゝふのますらたけ雄は、大君のみことかしこみ、からくにのさゝげし島の、高砂のくぬちまもると、あらしほの八潮路わけて、岩根ふみたかやま越えて、現身の人きりはふり、しが首を手矛にかけ、しが肉をさきて食ふとふ、けものなす夷がともを、日に月にことむけやはし、むら肝の心きたなく、から國をしたひあふぎて、おほけなく射向ふものを、うちきためきためにきため、大君のおほき御稜威を、鹽泡のとゞまるかきり、谷蟆のさわたるき

はみ、いよ〳〵にかゝやかすべく、ますらをが出で行く見れば、かけまくもあやに尊き、天照す皇大御神、あしはらの瑞穂のくにを、皇孫のかみのみことの、遠長に知らさむ國と、かしこきやさだめたまひて、いや先にくだしたまひし、健御雷かみのみこと、經津主かみの命の、五月蠅なす荒ぶるかみを、神とはしとはしたまひ、神はらひはらひたまひ、言問ひし岩根木根立、草の葉も言やめましゝ、いにしへの神ついさをゝ、玉手繦かけてしぬばゆ、そゝもへは尊くもあるか、こゝをしもあやにかしこみ、二神の御稜威あふぎて、あさ日の御旗の風に、くさも木もなびけまつろへ、うちわたす島のことゴ〳〵、あだ波の寄するひまなく、やすらかにまもり治めよ、ますらをのとも

反歌

生ひしげるからのしこ草刈りはらひ八洲のほかに國つくれきみ

けものなす夷とはいへどやはしなばすなほに猛き人なるものを

女郎花を人に送るとて　香村茂富

口なしの色にし咲けは女郎花ことの葉くさも折添へてけり　氷室　饒村彬成

鬪鷄野なる遠き昔の氷室より世のすゝしさや流れいてけむ　樹蔭納涼

涼しさのかきりなりけり夕月夜へたてぬほとのならの下陰

水鷄

門に來て今日もたゝくは交をひとにもとむる水鷄なるらし　遠浦霧

ありとしもおるくはなりぬ秋きりに朝日さしたる浦の松原　山家月

山里の秋のあはれもあるものを有明の月にましらなくなり　述懷

吳竹のなほくて色の常磐こそならひて千代の年はへなまし　月夜笛遠　草野正義

あはれはれさかのゝ昔しのはれて笛竹遠き月の夜半かな　朝顏　長谷川福平

明なはとちきりし友をまつの戸にまつはりて咲く朝顏の花　秋夕

柳ちる軒はを見れは三日月の入日にかわる秋のゆふくれ　夏月　鷹見茂

手ならしゝ扇の風もわすられてはしおうれしき夏の夜の月

月前眺望

目もはるになひく尾花か末までも月影ひろき秋の野へかな

祖父の一周忌に　戸村義保

逝く君と共に月日はたちしかと年のみかへることそ悲しき

袖か浦雜咏中月の歌

なかめやる方より雲は晴れそめて月を寄せ來る沖の白なみ

袖か浦の波の事と月かけをすゝりの池にうつさましかは

待月　長谷川福平

へたてぬ友と松かけの、
　したしき袖に影さして、
　洪水の荒跡を見てよめる
節面しろくうなゐ子か、
　花の散りにし川つゝき、
　秋の夜古戰場をよきりて
鋤をけつりたゝかひし、
　照すは哀れものゝふの、
塵うちはらい我をれは、
　隈なく照らす夜半の月。
歌てうゑしなてし子の、
　老のなみたの淵もあり。
荒野に殘るはたすゝき、
　かはねの上の月ならむ。

祖先の墓前にて

眞如の月はおくつきの、
　草はなみたの露おきて、
苦むす石を照らしつゝ、
　分くる袂もぬるなり。

蝶の花妻　遊童子

金絲梅　ちるひとひらを
　とふ胡蝶　ひら〳〵と追て
唯ふたり　風のまに〳〵
　はてもなく　迷ひ行らむ

かきろへる　光もつよき
　夏の日を　厭ひしもせす
花妻の　あとにすかりて
　千里をも　ちかく飛らむ

夕日影　いやてりつけて
　吹風も　やみにしきさみ

花の動き　やう〳〵遲く
　え堪でも　地にや落らむ

『俄にも　病むかもいもは
　羽がきの　動かすなりぬ
里とほく　連立ち來ては
　うら佗し　とみの事とて

かやかくと　撫ても生けむ
　我が思　くみてもいきよ
やよ〳〵と　よへといらへす
　はし妻は　いゆきけんかも』

この時し　そこそともなく
かすかにも　聲は聞えぬ
汝か妻　いきん日もあり
風ふかむ　折ふいきんと

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

世にかゝる　人しなくやは
家妻の　まことをすてゝ
香をきそふ　花にあこかれ
色をうる　ちまたに迷ふ
其花し　うらぶるをりは
いたつきに　なやむと思ひ

くさ〳〵に　てあてをすれと
我にのみ　ものしくは見ゆ
文の道　わけてし大人も
國あかた　うしはく君も
かくあらむ　とわりふらに
千萬と　おもひまとひぬ
つれもなき　其顏ゑまひ
心しも　なひかんをりは
ぬりこめの　倉ゆ風たち
花のごと　こがねちるをり

俳句

秋季雜詠

蜘蛛の巣に枯葉かゝるや古祠　横行

虫鳴や百萬石の城のあと　呑空
長明か落穗拾ふぞ哀れなる　泥牛
古院寂として栗地に落る響あり　同
百舌鳥鳴て山影長く門に入　同

秋季吟咏

天文　三日月や山たのもしき窓の前　秋竹
　　兼平の塚ふきまくる野分かな
地理　洪水の草屋根ひたす三日の月
　　薄野や月も出て居て塔五重
動物　百舌鳥鳴や並木過くれは淨土寺
　　噴水に亂るゝ庭のとんぼかな
植物　茫然と稻刈るあとの鴉かな
　　尼寺や庭狹うして萩の花
人事　弱さうな案山子立なり塚の上
　　禰宜招き新酒に神を祭りけり

登白山記

村上函峰

白山距金澤南十九里。我邦屈指之高山也。余來此有年。常欲登觀未果。今茲七月。例賜暇。一日訪石川澹堂。澹堂白山宮司也。談及其勝。余游意頗動。然以本月二日暴風雨。疑不便往來。澹堂曰。近有歸自山者。爲子徵之。既寄書曰。險則險矣。且可遊也。乃拉上田生爲伴。八月廿八日。雞晨發金澤。取路野町。抵野々市。左折過田畝間。曉霧始散。心目豁如。食頃抵鶴來。地爲一小街。有一川自北來。曰手取川。發源白山。土人云。前日暴風雨。此地當水衝。堤坊決壞。浸屋毀舍。流亡頗多矣。路上寓目。爲之慘然。南行數十步。抵白山村。左轉詣白山神社。聞祀菊理媛命。爲白山本社。社背月惜山。老樹蓊鬱。使人悚然起敬。此祠舊在舟岡山。文明十二年。遷于此。復來路。又南行。鶴來以南。層嶂重巒。夾手取川。山勢起伏。如列屏障。蓋白山支脈也。經福岡江律吉野諸村。抵木滑新村。自鶴來迄此五里。平時通輪蹄。頃遇水災。山崩橋墮。頗苦經涉。渡尾添川。有橋曰濁清橋。下流合湯谷川。爲手取川。行數十步。路傍有碑。右牛首。左中宮。乃取右路。溪山相迫。大木援。巨石顛。皆以風雨也。歷女原村。攀艇降谷。則奔流激石澎湃。渡假橋。抵五味島村。民舍破壞。隴畝化沙磧。無復蹊路。僅覓人迹而行。歷深瀨村。薄暮投桑島村。山氣凄肅。夜無蚊。

廿九日。褥食而發。殘月懸山。曉露滴衣。陟降里餘。抵牛首。牛首爲一大村落。往々見數層家屋。蓋以冬季大雪。由上層出入云。過林西寺。觀阿彌陀十一面觀世音銅像。並白山所置。中興初。白島爲神祠。故移此。又有泰澄大師木像。大師越前淺水人。養老三年。有禱白山比咩神社。遂與其徒。冒險阻。踏積雪。進達絕頂。始有人跡。出寺南行益險。誤入絕谷。復來路。問樵夫。超懸艇。如是者數次。抵赤石村。渡飛橋。身足俱疲。憩少頃。余顧上田生曰。所歷險阻如是。白山可知也。過午達市瀨。是爲白山西麓。市瀨以溫泉著。夏日來浴者多。余价澹堂書。投山田亭。脫擔試浴。肢體舒暢。疲困若遺。乃召主人。以謀登山。主人曰。登路有二。曰東路。曰南路。東路四里半而易。南路六里半而險。余曰。往取其近且易者。歸路反之。乃雇人爲導。將以明晨登。既就寢。夜頓暖。不能交睫。

三十日。黎明蹶起推戶。密雲覆山。意頗沮。少頃雨至。無聊頻浴。浴後閱地圖。以爲消閑之具。入夜雨甚。加東南風起。山鳴谷震。屋宇搖撼。猶坐船中。客皆無人色。上田生曰。此行具歷險阻。痛痛已甚。復遇暴風雨。恐不得登覽。余曰。此風盡夜而止。則明日必晴矣。三更果止。

卅一日。雨猶未止。烟雲四塞。唯聞雨聲泉聲耳。余以病禁酒。無慰旅況者。天冥即寢。至二更起開戶。則雨止雲解。星斗爛然。余狂喜喚起上田生曰。白山在我掌握矣。生驚起。爲之躍然。

九月一日。風起一天澄霽。四山如沐。飯浴畢。尾導者而出。過華表。登石磴。行數十步。有坂曰階子坂。坂險如名。傴僂而躋。柳谷川自北來。環流東麓。坂盡艇來。右轉左廻。徑益隘。右顧望別山巍立千群峰之上。有雙檜。俱大七抱。高可十仞。蓋七百年外物。有社趾。曰

檜宿。登數十町抵指尾。踞石而憩。左見一條素練穿雲而下。即千丈瀑也。往益險。一峰盡。而一嶺來。不遑應接。有三大石當路。曰胎內竇。匍匐過焉。徑躬見一大巖窟。名曰剃髮。相傳泰澄大師。剃髮于此。陟降數十町得平原。曰慶松臺。有板屋。曰慶松室堂。越前人慶松某。始造之。以便養客。登別當坂。見不動瀑。瀉下如垂水晶簾。路傍灌木叢生。絕無喬木。有一大巖。曰仙人巖。如虎據巉而蹲。降畜生谷。又登數十步。有池。曰殿池。一掬醫渴。至花圃。奇花異草。青紅如畫。殊爲佳觀。愈登愈險。左右皆絕谷。中間通一線。如馬鬣。故曰立髮。是爲最險處。過五色濱。登數十步。得平原。曰彌陀原。豐草如氈。暉映殘雪。廣袤凡十町許。仰而登。是爲五葉坂。五葉松夾石逕。敷地繁茂。不知幾千種。頗似庭園。過午達室臺。室堂之所在也。堂廣可容數十人。有先余登山者數人。已降自絕頂。憩于此。余喫行厨。皆告別復來路。二人向別山去。余謂導者曰。彼今向別山。果盡日得歸否。導者曰。山民跳躍如猿猴。固無險阻耳。休歇良久。復登峻坂。凡八町。達御前。是爲最高峰。有祠祀白山比咩神。余拜畢。題其扉曰。明治二十九年九月朔。相摸村上珍休。加賀上田柾雄。朝山拜祠。北距八町。有大汝嶽。祀大巳貴命。南距三里半。有別山。祀大山祇命。併三社。曰白山奧宮。御前絕頂稍坦。絕無草木。後斷壑萬仞。俯瞰使人震慄。雲煙靉靆。東北諸州山川。不可望。祠側置測候臺。臺下有石室。爲技師所居。其上有一大巖。巨石倚疊。形如倉。故曰實庫。其後隔谷劒峯屹立。巖石成骨。沙礫爲衣。不可登。其左右谷有池。大小四。翠池最大。窈然沈碧。其深難測。大汝嶽。形如覆盆。盤旋而登。沙礫隨步崩下。鑿々有聲。纔達絕巔。祠左有地平濶。坐而臨西南三州。曰越前加賀能登。悉聚眼界。忽有白雲。蓬勃鬱興。須臾彌漫。成銀世界。青山群露角尖。最爲奇觀。良久回踵。右轉出千歲谷側。積雪凍合。千歲不消。所以得名也。釋而注者。涓々成流。即湯谷川發源處。命導者採數塊餐之。寒冽透心肝。四顧則燒石磥砢。蓋故火山也。及還室堂。曰已晡。晩風料峭。就爐燒松枝。復喫行厨。守堂者。能諳地理。曰。白山之脈。自越中來。一赴加賀。一走越前。即白山。一大過接處也。余聞之。大有所得。凡作文者。不知過脈之所在。則不能作一大篇也。偃臥爐上。且話且睡。夜半數起候天。浮雲如奔。殘月朦朧。頗患明日之陰晴。

二日。黎明霧消雲散。乃促導者。復欲登御前觀出日。疾走而出。及坂見雷鳥飛于松石之間。形似鳩。毛有雉班。見人不驚。人亦謂之靈。而不敢捕也。伊藤東涯。柴栗山。作雷鳥記。考證雖繁。難得要領。百聞不如一見。果信。既達絕頂。寒氣凜冽。殆不可堪。少焉太陽露一峯上。如一大赤瑪瑙。圓光閃爍。天地變爲黃金色。大呼稱快。東南則美濃金花山。飛驒槍岳乘鞍岳。信濃御嶽駒岳。皆競高峻。而御嶽形最雄。東北則越中立山。儼然突出。氣壓萬峯。如與我白山爭伯仲。其餘群峯。若蹲若奔。若拜揖。詭狀不一。亦偉觀也。復回踵還室堂。傳餐將發。導者曰。別山徑甚險。本年開山以來。越此者不過數人。徒犯危險。不如復原路。余曰。昨既有向彼去者。余雖老矣。豈下於人耶。且余生他鄉。再游難期。勿復言。直取路犀川原。有坂曰御前坂。嶔石嚙足。棘針鉤衣。鞠躬窘步。漸聞水聲鳴脚

底。意頗安。降數百步。始達谷底。有泉清駛。曰龍川。掬飲清冽。源發山姥谷。末流爲柳谷川。左視龍馬塲。陟降數十步。峻坂當前。曰油坂。仰則雲際纔通一線。蟻附而登。前後頂踵相接。不十步輒息。息復登。遂至稍夷處。左則懸壑千仞。飛驛白川。繞谷流。如拖銀線。俯視。則兩脚俱戰矣。踰小屏風坂。及大屏風坂。拔葛捫蘿。猿其臂。轉折而陟。別山在目。不脚從之。加以疾雷暴雨。山崩崖圻。殆難受趾。時抽身輕跳以行。若一失足。即粉齏矣。晌午達別山。祠後有稍高處。是爲別山絶頂。別山距御前大汝。三里餘。別爲一峯。故名。藉草而坐。東望飛信諸嶺。西瞰越前山川。白雲盡處。一碧如線。即爲九頭龍川。御前絶頂。爲飛信高嶺所礙。不得望富嶽。獨得於此云。會御嶽左右。白雲蓬勃。一闔一開無定。導者曰。此雲散。則得之。須臾彌漫。終不見。甚恨之。既笑曰。闕陷世界。何求圓滿。乃下。復見雷鳥。如再遇熟友。曲折而下。十町許。達別山室堂。食畢。謂導者曰。所歷危嶮。勝所聞。前途尚有三里。其險何如。導者曰。自此而降尚險。然稍見其勝。余笑曰。愈險愈佳。自思至此。惴々無益。故作大言耳。跡導者行。下御前坂。及栂坂。土滑石搖。無駐足所。坂稍下六七分。比之前登者。疲乏亦倍蓰矣。既出三峯側。左有一逕。是爲自越前登白山之道。右轉蛇行數百步。復得坂。曰縱坂。縱樹掩天。仰不見暉影。如投井底。愈下愈險。樹根與石。參差如鋸。一脚固駐。而一脚始下。聚全身之力於脚。偪仄以降。纔至畜生谷。溪水沒脛。石滑欲仆。渡谷暫歇。自此達山麓。一里而近。余兩脚顫動。不能一步。顧導者曰。吾脚死矣。請借汝力。導者曰諾。乃縛余背而行。袁子才登黃山。縛於導者背。自笑曰。羸老乃復作褓襁兒耶。余亦二毛作褓襁兒矣。爲一噱。負者。右轉左廻。衝突急走。捷如猱猿。自覺此身已羽化。忽下前坂。是爲山麓。渡別山谷。沿谷登降數十町。渡柳谷川。達市瀨。過晡還。主人迎余賀。余曰。登山何用賀。主人曰。昨有二客而登。歸途向別山。俱誤失足墮谷。一客幸得免。一客則死矣。是以賀。余聞之大驚。顧上田生曰。彼昨別於室堂者也。非獨登山犯死。而世之犯險招死者。不遑僂指。可不愼耶。一澡終飯將寢。既思天候不常。宜早就歸途。乃議曰。取路牛首。雖近。或恐遇雨假橋墮。不若取路越前。向勝山。雖遠無虞也。

三日。詰旦復倩導者而發。過柳橋。濟三谷川。沿川而往。余前日憊未愈。舉趾浸遲。頗病蹉蹉。小原嶺當前。鼓勇而躋。鳥道磬折。喉間成聲。汗流浹背。凡三憩始達絶頂。是爲加越界。北顧望白山。排雲而立。如依々送我者。余憊甚。導者扶携以降。抵佐和盛村。喫午飯。山腰有佐和盛鑛山。規模頗壯。經小原村。雨驟至。甘受沾濡。蹉跎行。昏至勝山宿。聞平泉寺。距此一里而近。蓋平泉寺。嘗管白山。余欲翌晨過觀焉

四日。昧爽以疾甚不果。乃雇車而發。渡九頭龍川。堤壞田荒。一目荒寥。近午抵丸岡。自此熟路。然疲未愈。復馳車數十步輒睡。恍在白山室堂之中。歷大聖寺。至小松。迂路渦湊。呼船而渡。即手取川之末流也。小松以北數里。水害最鉅。不知其所極。民隱可思。抵松任點燈。歸則尾山鐘報初更矣。余此行。登白山。以遂宿望。然所歷至險。艱楚備至。不遑留連風景。以發揮之。聊記其實況。以示澹堂。澹堂曰。不入虎穴。不得虎子。子不

有斯勞。烏得斯文。時明治二十九年九月某日也。（完）

題郝隆曝腹書圖

垂東仙史

蠕々乎窮措大也、田無一頃之可以耕、家無儋石之可以儲、而日晏如、偃臥於庭中、便々夸腹曝於烈日、人過問輙曰、晒腹中之書也、嗚呼何其爲之似狂、而其言之類妄也、是有說焉、在昔秦始皇焚書坑儒、而道遂不可滅、明太祖興乎學下於賢、隆治豐績、宜彬々而成、而世道日衰、國綱益不振、獨何哉、是可以見矣、夫書可以博智、而不可以陶養氣品、品性之妍媸、未在學與不學也、是以有胸藏韜略、而不知兵者、有一部魯論以宰於一國者、唯顧心性如何耳、晉之世、賢相能吏非不少、良將勇卒非不乏、而人心衒奇喜異、清談放蕩、道義拂地、國事日蠹、清廉之士、或挂冠退去於山林、河觀嵓居、或解綬耕於寬閑之野、釣寂莫之濱、避世脫俗、高蹈自適、不復拘世事、蓋隆亦超然遯世之士矣、腹中之書遂無用、乃託事以諷刺世耳、而猶有笑之以爲狂且妄者、隆若知之、則必也反叱而謂狂且妄矣而已、吾特恨晉人之不狂且妄、而至國土遂不血食、

滋賀

百里蜿々鐵軌橫。重來不負舊題名。湖州到處皆相識。山媚水明車外迎。

西京

阪本三橋曰。　并州風月。夢寐未能忘。對此篇。情懷殊深。

蓉湖漁史

枯節也訪白河湄。夢裏遊蹤嘆髩絲。三十六峰依舊好。剩看金碧起崇祠。

又曰。　語淡情饒。餘韻不盡。

大阪

千載繁華何所基。層樓傑閣擁江涯。中洲來訪人嘆噫。碎雨零烟豐國祠。

又曰。　過中洲者。皆有此感。而未經人道。浪華商賈。高厦大屋。富豪自誇者。果有何顏。

南都

采女祠邊雨始晴。景清門外夕陽明。薰風吹送蘭奢待。扇影衣香趁隊行。
啣杯燭影簫聲裡。曳杖苔清雲白間。一笑兼魚與熊掌。繁華閱了乍溪山。
故都光景足吟情。三笠山頭孤月明。今日乘槎客多少。何人文藻似朝衡。

高野竹隱曰。　俯仰古今。感慨係之。何人文藻似朝衡。語簡意該。如有諷旨。詢乎風人之遺。

夏日偶題

冷骨

家在江村畧彴邊。青山入水水連椽。風吹湘帙妨鉛槧。蟬韻清陰誘睡眠。性拙任呼牛又馬。心空畢竟佛乎仙。好呼風伯命雲駕。跡似飛龍翱九天。

洪水記異

陰雲十日雨風連。禹鑿無功水決川。屋外魚龍偏得意。樹頭鷄犬暇安眠。艱飢求食幼呼老。異變接踵人也天。從是秋風寒趁節。因何百姓擧炊烟。

北遊雜詩　節錄

知己百年何處求。胸懷欲遣嘆無由。田園蕪沒悲鄉國。書劍飄零重浪遊。欝々樹林千里合。滔々水勢四方流。聊將天外孤鴻意。說向親朋復少留。出鄉

扁舟一葉載吾頭。人事百般渾不關。碧水秋來天共淨。白帆風穩客還閒。連峯千疊圍湖出。歸雁幾行呼侶還。顧我歸期何日是。細看勝景解愁顏。瑤邑湖舟中

秋濤八月生溟海。玄氣蒸騰迫日宮。九萬鵬程風動地。千尋鱷浪水搖空。乾崩坤潰冥濛際。若躍龍淨髣髴中。拔劍舡頭發長嘯。十年意氣得偏雄。從敦賀抵金石舟中、此日風浪甚太惡、

遊山寺　　中尾熙丸

牽杖上高岑。麗暉到祇林。磴幽苔蘚滑。門古蔦蘿侵。風入菩提樹。鳥傳微妙音。歸途趁鹿跡。迷却白雲深。

寄畫工栖霞山人

山河到處寄形骸。流水行雲入畫懷。榮辱毀譽君不管。一枝健筆是生涯。

中秋賞月

吟賞銜杯作月遊。風光千里豁雙眸。晴空今夜一輪滿。不識誰家廋亮樓。

聞國手舘龍君之易實

丹竈青囊幾十年。回生妙訣屬神仙。一朝騎鶴昂然去。鳳管何時奏九天。

妙典寺僑居雜咏　　香陽陳人

擺落人間累。借居甘露城。上方燈射闇。下界雨翻晴。塵想定中失。道心香裏生。枕頭山水好。禪味入詩情。

斜陽上簾額。好景枕頭開。溪曲青瑤照。山橫空翠堆。雲濤迷海角。烟雨過城臺。散髮時長嘯。清風千里來。

讀殘經一卷。解帶臥蕭齋。修竹陰侵座。莓苔綠上階。松頭翻夢鶴。草底叫天蛙。日暮疎鐘歇。凄風月入懷。

入懷圓滿月。樹罅漏光青。魍魎吹燈死。精靈襲納腥。磬微堂自寂。草濕露空零。四顧具無見。荒塋燐火熒。

青燐熒古塚。默念倚枯禪。百歲歸三寶。美人還九泉。金釵成土散。魚帶化塵捐。富貴春宵夢。髑髏苔井邊。

綠苔橫白骨。夜鵑曳杉枝。生也必有死。魂兮何處之。寧疑千古理。却笑半生痴。坐念西方佛。殘星樹杪垂。

垂星耀忽過。靈焰照巖阿。人世悲龍漢。乾坤掛蔦蘿。頑儒多執拗。妖釋落禪魔。文教東西亂。紛紛奈何。

其如斯道亂。億兆日滔々。傀儡爭場上。聖知聯袂逃。人情雨翻覆。名利火煎熬。滿目徒幽憤。仰空髣髴搔。

仰空書咄々。天道亦昏々。獨此江山興。役予風月魂。人生空草露。行樂只金罇。拂曉雲霞起。翠

鸞飛入軒。
軒入飛鸞影。乘吾舞碧空。群仙迎且揖。八表伴相通。骨馥桂花氣。衣間輕闔風。逍遙遊宇內。此樂繫窮無。

批評

本誌第十一號を讀む（圏點あるは前號の借用文辭なり）

泉南漁史

回顧すれば、北辰誌一度呱々の聲を北陸の邊陬に擧げて以來、年を閲すると一又半、號を重ぬること十有一、其間幾多の困難幾多の障礙屬集し來りて、月一回の發兌も投稿函を傾くれば舞出づるは一葉二葉の原稿のみにて、萎微沈滯の極に達し、漸く部長浦井先生が熱心なる輔助と委員諸彦が非常なる黽勉とに依り、辛く一縷の命脉を繫くを得しも、數へ來れば每號紙數僅に六七十頁、嗚呼斯の如き微々たる小冊子を以て、是れ辰章校の機關誌なり、四高健兒の反射鏡なりとして唯々滿足せざるを得ざるに臻りては、誰か全國の高位に列し、儕々たる半千の青衫を有せる辰章校裡一人の文士なきかを怪まざるものあらんや、矧んや編輯局內部の狀態を公然暴露して徒らに編輯難を愬ふるか如きは、醜の最も醜なるもの、ために毀を他校に買ひ、嗤を識者に招き、本誌否な本校の體面を汚瀆せしこと抑も亦幾許そや、然れとも委員豈奇を好むものならんや、其無限の恨を呑み萬斛の淚を澆きて、此醜の最も醜なるものを暴露し、一掬の溫き同情を會員諸子に需むるの歇む能はさらしめし所以のものは果して誰の罪に歸すへきか、嗟乎、北辰誌は編輯委員か慰み半分の玩弄物に非ずして、辰章校の校風を外部に向て發揚するの機關なり、我辰章校我北辰會の事業史たるを思はゞ、初め其趣旨に贊して此か會員となれるもの、奮起一番其稜々たる渾身の覇氣と其綿々たる滿懷の詩囊とを傾注して、本誌の隆運を冀圖せさるへからずとは、當時聊か心あるもの〻一汎に唱道せし處なりしに、僅に半載を經過せる今日に於て驀然一翮冲天の勢を以て鋭進、他の同朋校誌と共に逐鹿の活趣を帶び、殊に嚮に新委員俊才が初陣の首途に、尨然たる百有餘頁の大冊を綴りて、凄しき手並に滿校を驚呆せしめしも尙慊焉たらず、多々益々旺にして第二回目の本號に臻りては、實に發刊以來特筆大書すべき未曾有の巨篇にして、而かも內量盡く之に協ひたるは、偏に委員英才が盡力と會員諸子が熱心の結果にして、本誌の前途亦多望と謂ふべし、されども、榮枯盛衰の離れ難きは是れ塵世の常理、諸君宜しく之れに狎れず、奮勵拮据以て事に膺らは、啻に今日の隆運を繼續し得べき而已ならす亦以て夙夜省慮措く能はざる校風煥發の如き、或は之れを達するに庶幾からん乎。

論說欄內收むるもの僅に二篇なるは、他欄の材料豐裕なるに比して寧ろ寂寥と謂はざるを得ず、本誌の特色として常に同朋校誌に對し傲る處のものは、考證該博なる史傳欄にもあらず、艶麗絢爛なる文苑欄にもあらず、眼光明徹なる批評欄にもあらず、はた瀟洒灑落たる雜錄欄にもあらずして、光彩陸離、炎々たる萬丈の氣焰を本欄に蒐集せるにあり、委員諸君何を苦んてか其特色を失はんとする、劈頭第一揭ぐる曾我部俊雄君の大化の革新に就ては、余も多少意見なきに非すと

雖未だ本論に入らされは輕々しく筆を下す能はす、他日其完結を俟ちて教を請ふ處あらんとす、但し筆路の何處となく民友社(?)風を帶びたるは、必ずしも惡しとは謂はねど冗長に渡れるを厭ふ、

次は河原始二君の時習寮とす、之れ由來時習寮か蒙れる世評の寃を雪ぎ、兼て寮風即校風を發揮せんがために草せられたるとなから、通覽一番其餘りに我田引水的議論の多きには喫驚せざるを得ず、抑も時習寮は、其形態に於て、其性狀に於て、其言語に於て、はた其習風に於て、相異なる各種の分子七十許名か、第二の家庭として相集まる處なるも、精神上肉躰上萬事萬般に於て同一の感化を受くるか故に年月の經過に從ひ、不知不識漸次調和せられ、融合せられ、陶冶せられて、一致協同の美德美風を涵養しうるは素より言を待たすして明なり、されども、時習寮が未知の人か考ふる如く勉强を妨ぐる程騷々しからずと云ふに、入寮後兩三日を經騷々しくて夜の十一時頃迄は、神經鋭敏なる人には中々安眠するを得す、從ふて翌日は茫然として何事も出來すとて、退寮せるものありしは奈何、試驗前時習室を去りて、態々賄室若しくは教場の片隅にノートを開きつゝあるも多きは奈何、學年試驗に落第生比較的多くして級の上席を占むるもの尠きは奈何、又君が所謂不勉强家にして入寮せば云々の說には、よし規則に嚴禁しあるも各室の往來自在なる處に、交際巧にして愛想よき人、二人居ると、六人集ると、何れか談話の端緒を開くに利便なるやとの疑問を呈せんのみ、君は又無聲堂裡大勢力を有し大原動力たるものは寮生なりと喝破し、ロンテニスも水上運動のため寂寥視さるゝグラウンドも、一縷の導火を保つものは寮生の力なりとは何を論據とせられしや、請ふ眼を活大にして運動場を睹よ、グラウンドの裡、ボール飛びラッケット閃く底の活劇を演しつゝあるものは殆んと通學生のみ、殊に其撰手たるの桂冠を有するものは盡く通學生に非すや、而かき其撰手なる名稱か孜々琢磨の後にあらされは得へからさる彰譽語なりとすれば、如何に通學生か斯道に熱中せるかを知るに足らん、又無聲堂內二三の人は知らず其所謂驍將株たるもの通學生に多く彼等は地位の不便に處するも敢て寮生に遜色なき否な寧ろ超越せるの剛毅熱心を以て、日々龍鬪虎擊の壯觀を顯はしつゝあるに非すや、其他漕艇仲間の如き通學生と雖、登校せる際教室に於て有志を募らは立ろに成立しうるは、既に業に君の知る處なり、君は未た論せられされとも、寄宿生にして(各校共)最も利便と有益を感するものは、夜間圖書室の書籍を手元に借用しうるにあるも、我校の如き通學生も午後八時までは書庫に出入しうる處にありては、其利便と有益との點に於て、餘り大差なけむ、君の敢て之を論せさるは之を識りてなるべし、況んや朔風峻列邪寒骨に徹する冬の朝、寮生が偷安爐邊に蹲りて痿靡蠢々たるの時は、是れ通學生が風伯怒號して寒聲地を震はし、霜毛亂飛して寒氣膚を剪るも屈せず、堆積三尺の雪路を踏んて、凜たる北國の寒颱に健骨を練り鐵脚を鍛ふの際にあらすや、斯く論し來り論し去ると雖、余は君か時習寮に對し絕體的反對を試み、徹頭徹尾之を破壞せんとするものにあらす、只賞贊實に過くることとなきかを疑ひ、自から懷抱する處を告白して、君か參考に供するのみ、史傳欄內、初めの勢にては何日終つへくとも見えさりし、埋木の翁の國學復興者としての契冲阿闍梨は、俄に古人の二三の評隲を借りて、其局を結はれたるは何となく殘惜しくはた物足らぬ心

地しつ、されどこれも寄る年波の數には洩れ難き老の病の業にもあるへければ、今は何事も申さし、龍頭蛇尾の誹は翁の甘受せらるゝ處なるへしと信すれば、雜錄欄例に依て賑なり、能登島の地圖に就きては、地質學研究上裨益を與ふべく、貞婦を訪ふ記並三度櫻記は國文志望者に無上の歡迎を受くるなるべし、富士川舟は、在大學の白楡太郎君より遙に寄せられたるもの、君か本誌を懷ふの深き豈感謝せさるへけんや、其輕妙なる一種の文躰と淡々たる有趣の筆致は、巧に白雲碧水の奇を敘し閑雅幽邃の境を描きて興味津々、身は恍として其邊に徜徉ふか如し、蓮湖周航の記、風晨雨夕漣波灑瀲たる鴉の海に長程七十餘里の遠征を驕りしものは三高の健兒に非すや、春風駘蕩柳櫻妍を競ふ墨陀の流れに、長櫂を揮て波上白龍を躍らし意氣昂霄常に百戰百捷の勇に傲るものは一高の壯士に非すや、而かも我短艇會組織せられて既に半歲、未た一人の立て湧膽を澎湃たる北海に洗ひ鐵腕を淘湧たる怒濤に試みたる士あるを聞かす、毎に望々遺憾とせり、圖らさりき卿等一團の快漢が奮然蹶起時は正に三冬如月の空、凜冽たる北溟の寒飈と戰ひ、鞜々たる蓮湖の狂瀾を競ひ、六華繽紛横に撲ちて手足凍冷殆んと感なきも尙操櫂を熄めす、一難は一難を加ふる毎に、勇氣百倍し來りて屈せず撓まず、卒に克く先鞭以て千古の大快事大壯擧を遂行せられたる、膽斗の如きを感歎せすんばあらず、宜なる哉一度之を開けは、滿紙爽颯風生し雲湧き、猛虎一聲寒月に吼ゆるが如く、慘憺たる當日の凄景、眼前に髣髴して腕鳴り神躍るを覺ゆ、諸氏夫れ健在なれ、松原神社に詣てゝは、不眠坊君が滿腔の熱膓を灑きて、耕雲齋等四百の志士の孤忠を悲み英魂を吊するの文、墨痕淋漓辭氣壯厲、讀んて降を加州の蟹門に請ひ萃に千歲の鴻圖を懷きて無窮の白刃に斃るゝの邊に及べば、悲憤慷慨眦裂け髮豎ち涕淚自から禁する能はさらしむ、

籠庵記は湘浦庵殘雪君の作なり、浮世は何の五十年、祇園精舍の鐘の音沙羅桑樹の華の色、觀し去り觀し來れは、まこと榮枯や盛衰や、共に之れ初産終焉を刃亘る漣波の波峯波谷に過きすして、ヲリンピヤ山上に熖ゆる無限の燈火に照しては、春宵野邊にもえたつ果敢なき陽炎に髣髴たるかなと、妙にひねくる强ね男、大なる六尺の體を湘水の庵に投け入れて、面壁茲に三年、朝には閼伽の水を汲みて汚しき塵を洗ひ、夕には眞如の月に嘯きて濁れる心を澄ますとは、浮世を忍ふ假りの名、まことあはよくば人知れず、ユオリヤの詩聖を吊ひ高く天外の偉音を求めし、ケンブリッチの詩隱を學はん忍しの企みを、さら〳〵さッと書き流したる才筆、これも昨日まて外道に狂ひ、戀の巷に浮身をやつせし懺悔の一ふしとや謂はまし。新綠蔭深き處碧潭水清き畔、讀みて一服の清涼劑となるへきものは、奮庸生君の夏を迎ふの辭なり、されと末段樂は夕顏棚の下涼みの藝韻卑調を漁るものを咎めなから、可憐可愛の小女が手づから贈る一枝の花を得んがために、雨を衝きて茅茨を叩けとは前後撞着せずや、又蒼波浩渺の海泉を吾人が消夏養神の好遨遊に供せすして、松露隕つる畔、臂を曲げて盧生の癡態を學べとは聊か考へ物なり、且君は文を華麗ならしめんがため、多くの形容詞（往々新熟語も見受けたり）を用ひ、反て文勢を弱めしは可惜。文苑欄の歌何れも香ひめてたくおかしからさるはなし、淡翠迂人君の軒の雫は、校友（長野尋中雜誌）の再勤、餘り難有からす、胡蝶のやどりは流麗温雅にして、春の水の流湲く溶々靜かなる野邊を縫ひ行くが如し、山寺は無理に句數を調へしがため冗字頗る多し、例へは第一段第二句のしら雲

の、第三段第四句の果散なくもの如し、第五段第二句の松風に塵の世をさけとは如何なる意味か、又枕詞は既に千万の歌人か使ひふるせしもの、餘り用ひぬ方宜しかるへし、加之春日の陽と葬送の陰とを配合せしために、深酷悽愴なる感念を讀者に惹起せしむる能はす。琵琶の曲は、小武横行君の筆、三段に書きて而かも五頁とは、隨分の長篇なれとも、恨むらくは糸の音強く響く時の外、何等の抑揚もなく頓挫もなく頗る單調に失せり、且字句如何にも生硬にして尚再三の練烹を要するか如し。俳句、宇宙の美自然の妙を僅々たる十七文字の裡に發揮せんとす、抑も亦難哉、されは日本の詩歌は餘韻嫋々とやらを尚ふと申す由なれは、あはれ古池の流を汲める人達、願くは其餘韻の嫋々なるものを揭けて、吾人の飢腸を充たしめよ。漢文例に倍して賑なるは殊に嬉しく、村上浦井の兩先生が金什絶ゆるとなく、吾人初學面牆の徒を啓發せらるゝの篤きは、深く感銘に堪えさる處、隨て本誌か兩先生に向て負ふ所尠からさるなり、高橋亭君の蝸牛子傳は字句整然を以て優れるか如く、垂東仙史の北陸名勝誌序は筆力遒健を以て勝れるが若し、能載子君の論壬申亂是れ亦一論、唯措字好奇の癖あるを憾むのみ。詩は其專門家に讓りぬ。批評欄の立消えとならざりしは、獨り自から進んで以て聊其郭隗たらむを期せし九龍齋主人の欣ひのみにはあらず、露子の君の批評折々如何はしき節も見ゆれと、大槩其正鵠を得たらん樣なり。洵に本號程雜報欄の豐富にしてしかも光榮あるは蓋し異數なり、曩に故有栖川宮殿下紀念樹を培栽して、些か當年の至遇に奉答し、今又小松宮殿下の親しく鶴駕を枉けられ、且褒詞を辱ふしたるか如き、實に萬世不朽我校紀に一大光彩を放つものと云ふへし、若し夫れ末尾の附錄に臻りては、雄心落々氣骨

稜々たる四高半千の健兒か、鐵脚以て加越の野を蹂躙し、健腕以て蓮湖の波を蕩破せる、虎嘯龍騰の大々的活動を細舒せるもの、筆鋒鋭邁序事滑暢、實に好個の紀念史なり、委員諸氏の盡瘁焦慮多謝々々、吾人性元來狷介不羈敢て辭禮に嫻はす、其往々直截にして虛飾なきの言、或は諸君の感情を害し忌憚に觸るゝなきを保せず、然れとも吾人豈爲めにするあるかために、漫りに無責任の語を放て人を罵倒するものならんや、唯自から信し自から感する處を序するのみ、此間胸中綽々として光風霽月の如く一毫の疚しきを覺えす、若し之を以て漫罵をなし偏頗となすの人あらは、吾人不肖と雖禿筆を呵して當壇に馳騁するを辭せす。

雜報

梧葉秋聲

烏兎匆々、曩きに歡樂の雲を望んで苦痛の雨に逢ひ、短簑蔽笠僅かに試業の關門を過ぎて夏期の休暇をお土産に、西に東に南に北に、流離散轉、袂を校庭に分ちし以來、滿眼の風物杉の板戸の隙行く白駒に送られて、世は早くも梧葉秋聲、燈火親しみ易き候と變り、吾曹は再び諸子と一堂の裡に相提携するとゝはなりぬ。

思へば永くて短かき七十有餘の安息日、千々の夢想に消夏の策を講ぜしも未だ來ぬ間の樂なりしが、案ずるより生むは易くて塵事纏綿、夢と過ぎ現に去りて顧みれば或は重來兼恐無尋處、落日風吹鼓子花の歎なきにしも在らざる可しと雖も、併かも此の如きは長袖寬帶、時俗に追隨する蒼顏雪皮の徒の云爲にして、流石に白山の麓、犀川の東、醫王の嵐冴え吳れて巴に吹き卷く六花の朝に、無聲堂裡に心膽を鍊り、鐵腕海若を叱咤して三春の行樂を波上の夕に眺むる青衫の諸子が潔しとせざる所、必らずや臥薪嘗膽、或は半日の清閑に魚鼈を驚かし、或は青山白木を踏み破りて紫明の氣を貯へ、或は吃茶咬豆の衣、襟を開きて戀々の情を温め、偖ては壯談快話、東西を評倒して順流にのみ棹さす軟腸動物を驅り、富士川の平氏を再演せしむる底の快を盡したりしなる可し。

今や秋風冷露、鄕關を辭して古窓を拂らい、靜かに青燈を剪りて淨几に對するの時、縱令しや張翰の昔を學びて驢魚の膾と思はずとも、破窓の風琴頹籬の虫聲、何れか諸子の濃情を感愴せしめざる。之を無聲に聞けば宮城野以北太平洋の西、濁浪山立、片月を嚙んで暴威を逞ふせし沿岸一帶の如き、黑風白雨、河伯の怒に觸れて見渡せは點々たる寒村十里の波上に漂ひし地方の如き、幾萬無辜の同胞は襤褸の袖に傷心を包んで竊かに天道の是非を問ひつゝ在るに非らずや、若し夫れ諸子の高懷清情、冥々の間に神仙融化する者あらば、幸に雲烟を飛ばして本紙に流露せしめよ。徒に佛者の西敎に對する的俗情を唱ひて空しく金塊を砂中に堙滅せしむる勿れ。刀圭の余文壇を摑歩する者あり。砲烟彈雨、死生の巷を奔走してなほ消息を印刷機上に漏らす者あるを見ずや。直往勇進は男子に尙ふ所なり。

卒業證書授與式

本校第八回卒業證書授與式は七月十日を以て執行せられたり。同日午後二時、一響の振鈴に連れて職員生徒席に着き、第二鈴にて來賓諸氏の座定まると共に、大島校長壇に上り、擧式を告げ併せて從來の佳例に倣ひて勅語捧讀の旨報せらるゝや、一同肅立低首、やかて朗々たる發音は堂に滿ちて觀愈々肅びたり。納卷の後、證書の授與、校長の告別、卒業生總代茨木清二郎君の謝辭等、式は順次に流れて、本校の現況報告し了れば、校長は一禮壇を去られたり。次いて海軍大機關士齋藤氏の登壇あり、微髯一撫、徐ろに本日の佳式に臨めるを幸ひ一演せんとを告げられ、舌頭は流石に軍艦、兵員、兵員生活の狀に走り、更に向上的現時の國勢に鑑みて深く人材の樞要を說き、再轉之れが養成の任を卒業生諸子の双肩に歸し、一々證を日清役に於ける氏が實歷に徵して演々數百言、切實に海軍思想を鼓吹せられたり。此にて式全く終り、來賓を別室に誘ひ立食の饗應ありき。當日證書を得たるの諸子は左の如し

法科志望生（十八名）

中大路正雄、谷野裕、佐藤信安、中村孝、築山直彦、佐藤家太、飛石久太郎、五十嵐嘉一、中谷正造、鶴見左吉雄、佐治修三、三好久明、奥山万次郎、谷野作治、森山守次、中司正朔、大田四郎、本多政好、

文科志望生（十一名）

茨木清二郎、小松倍一、虎石惠實、杉木榮一郎、河野元三、中川忠順、中尾敎審、有馬祐政、林安繁、長連恒、富士澤信隆、

工科志望生（六名）

岩田成實、石黒爲次郎、永江誠一、信濃榮三郎、小西虎藏、渡部鐍、

理科志望生（二名）

清水清藏、今川一、

農科志望生（一名）

本多菊吉、

卒業生を送る

謹んで卿等の去るを送り聊か所思を述べんとす、幸に首肯せらるゝや否や。思へば卿等か靴音高く踏んで證書を受けたるの際、破顔一番、頰邊に湛えたるの微波か如何に明かに卿等の心魂を反映せしめしよ。卿等恙なく千山万水の行路難を踏盡して、此に吾校を去り、更に七旬の長暇に餘勇を鼓して一躍高く大學の門を叩かんとす、卿等胸中の得意想見するに堪えたり、況んや下風に立つの吾曹、焉んぞ之を卿等の爲に、吾か校の爲に、將又國家の爲に祝せすして可ならんや。然りと雖も翻りて懷を沈むれば吾曹は遂に一片の愁思なき能はす、蓋し卿等校に在るの間、常に先進として吾曹を啓發誘導せられき。吾曹もまた先進として恭敬私淑するものありき。然るを卿等一たび去りて吾曹また校裡に敎示を卿等に仰ぐを得ずなりぬ。抑も吾曹之を悲しむ可らざるか。嗚呼之をしも歎ず可らずとするか、さればとて卿等偏に吾曹を以て佐々木の亞流となす勿れ、吾曹元より高綱の魂膽を賤しむと雖も、何んぞ徒らに梶原の愚に傲ふを欲せんや。願くは卿等東去の後、時にタイムを割愛して卿等の所感を雁信に附せられよ。尺牘一片、卿等の恩旨に接するに及んでは、蓋し景慕の念胸襟を衝きて慨慨俯仰に堪えざる者あらんなり。今や風雨蕭颯、羈旅の窓下に百虫の悲音を傳ふるの候、卿等愈々自愛せよ。

入學式

連日の愁雨跡なく晴れて今朝珍らしき朝日の影、霧に離るゝ山の端より輝き渡れは、麗かに新學年第一の日は來りぬ、九月十一日は來れり。あはれ快しかりし休暇は過去に葬られて再ひ回さむ由なけれど、吾曹寧ろ去る者は追はじ、いざや待ち付けし新學年の舞台に勇躍一番、養ひ來りし渾身の精氣を漏らし盡して止みなゝん。本校は例に依り例の如く、日の午前九時を以て本學年入學式を例場に擧られたり。新入學生は東に面し、舊學生は西に向ひ、而して敎官職員其席に就くや、大島校長壇に進みて靜かに入學式の辭を述べられ、新舊學生を紹介し、次いて嚴かに五綱の學生心得を朗讀せられて新入學生に望まるゝと厚く、更に特待生の芳名報告し了れは紫電一閃、迅雷は天漢より奈落し來れり。校長は最後に音吐高朗、特に來夏校を去る工科志望生諸子の爲に告ぐる者ありの冒頭を以て、來學年工科大學に於て入學を許可すへき豫定人員と及ひ入學志願者の數とを明示せられ、比較せられて反覆丁寧、痛く諸子の猛省を促されぬ。若し其の承細なる者に至りては別貢に觀せられよ。

新入諸子を歡迎す

秋風東去の客を送りて傷思未た消えざるに、新

に百有餘の俊英は遠く來り投せらる、吾曹焉んぞ觀迎せさるを得んや。抑も今日あるの諸子は、各自學術に品行に、優に鄕黨の譽望を荷ひて、或は一校の校風を代表し、或は少くとも試驗場裡のヰクトルたらすんばあらず。何れ劣らぬ氣鋭の若武者か心の駒に鞭ちて今や互に其の校風と譽望とを一堂の間に發揚せられんとす。元より其の文たるを問はす武たるを論せず。吾曹は誠意之を待つ可しと雖も、吾か校には由來吾か校の精華あり、漫りに他人の蹂躙を許さす、而かもなほ他山の石捨ふて以て玉を研くに吝なる者にあらす、諸子請ふ抱負する所を聞かしめよ。吾曹左に諸子の爲に本會各部を紹介せん。

底球部。聲なきに何の雲雀ぞ練兵場の綠野晴空にボールの飛はぬ日なしと歌はしめたる當年の勇氣も、落花流水、何時しか銷滅して鳴かず飛ばざりし者既に歲餘、養浩の會や有爲の倶樂部、抑も今何處にか潛める。遙かに望めは武香陵頭の櫻木男か吐き來りたる氣焰の凄じさよ。青葉城の全窓また桓公に擬して覇を東奥に稱へ。龍南の健兒も時に紅霓を綴るに非らずや。飜りて吾か校のグラウンドを伺へば秋風愈々荒れて跡問ふ人影もなし、委員の心苦寧ろ憐れむ可く新來の勇士を待つもの切なり。

テニス部。元より奔馬天空に躍り狂風雷霆を催すの壯なしと雖も、柔能く剛を制し、虛に出て丶實を謀るの妙に至りては蓋し本校の特色なり。技や激に失せず弱に流れず、僅かに一把のラックットに小球を數歩の間に弄するに過きずとせば。抑も亦至簡至易の者に在らずや。之を以て往々婦女子の未技と排する者なきにしもあらず、吾曹また必ずしも硬骨男子の遊技とは云はずとも焉んぞ蒲柳の文士が躰を鍛ゆるに足らざらんや、且つや吾か校々庭の寂寞を打破して多少の氣焰を添へ來りし特技なるをや。自ら運動の激に堪へずとなすの士、幸に一顧せよ。

擊劍柔術部。之れやさは吾か校運動界の大立て物、試みに本誌を繙きて陸上運動界の消息を尋ねなば、焦天の氣焰、附錄を添ふる者他に之れある可くも見えず。まこと不香の花を餓りて雪天に躍り、三伏の酷暑に睡魔を拂つて無聲堂裡に叩き上けたる雄心や。押ゆるも發して柔道に擊劍に、紅采陸離、越路の空爲に震ふ。恨むらくは柔道部未た競拔の敵なく、竊かに素養の功を守るに過ぎすと雖も、劍花に至りては尋中師範偖ては警察の髯男あり、聊か以て慰するに足る、あはれ爲す有る新來の好漢達、閑に乘して鍛錬の餘慶を占むるも快ならずや。

弓術部。無聲堂の東、尾城の艇下に世の騷擾を拗ねたる一構は、問はてる著るき弓術部の本營なり。よしや世は韶光滿ち〳〵て花に宿かる春の日も、胡茄互に動きて牧馬悲しぶ秋の日も、幽かに漏る丶彈弦飛箭の響こそ、茲寂寞と思ひの外、窺ふ隙にも座作進退の床しきは之れや本技の特色ならんかし。吾曹豈に養由の技を願はんや、虎と見て石を穿ちし昔も古るく、弓張月に名をば雲井に擧げ丶んも學ばん所にあらざれど、世は流れ行く洗季の今日に、儀容禮節を尙ぶ本技の校友諸子に顧らる丶を賴母しからずとせんや、濃情篤行の士、幸に此の高闘を踏め。

演說討論部。情を陳んずる必ずしも管城子を用んや、三寸の唇角心琴に觸れては五釆の龍を驅りて百年の功も一夕に收む可し、マセドンの奸雄もフヒリピックに驚歎し、印度の虐將ヘステンゲをして茫然自失、心杳然として此の世また已に過くる大罪人あるましと寒膽せしめし者はバーク氏の彈劾演說に非らずや、さはれデ氏の習練を狂波頽濤の濱に求めし如き、バ氏のト

リニチー、スクールに於ける素養の如き、所因せる所を採り來らば蓋し本會に本部の設けある、意夫れ知るべきなり、諸子苟も躊躇する勿れ。

雜誌部。あはれ和氏の璧も荆石に韞まれ、隨侯の珠も蚌蛤に藏れて、歷世遂に眠る無んば、景曜を含み英精を吐き千載を曠ふするの光抑も覺束なかる可し。如何に萬卷の珍書を嚥下すと雖も、苟くも之を咀嚼し同化し發揮する無くんば遂に蠹魚と一般、何の値をか有する。此の故に本會特に本誌を綴りて螢雪の花を匂はせ、研磨琢磨、相共に爛枝の美果を收めんとす。諸子や天與の英資を以て夙に學海を漁さり、微を拾ひ幽を發きて造至深厚、蓋し濱の眞砂の盡きざるものあるや必せり、願くは時に之を漏らせ。

短艇會。若し夫れ操艇の技に至りては本校別に短艇會の設あり、委員は門を放ちて既に諸子の侵擊を待ち、蓮湖の海若また諸子の蹂躙を恨まず、諸子宜しく突擊猛進、健腕を叩きて直ちに故老を驚敗せしむ可きなり。然るに何事ぞ委員此の頃荐りに悲運を慨くとは、偖ては委員の罪に在るか、抑も亦諸子の致す所か。テームス河上の競漕か如何に英國士民を皷舞するかを顧みなば、海國思想の煥發以來、本技の効否は元より說くを要せず、且つ夫れオールを取りて長風を御し、眄顧の間に江色嶽聲を含んで鍊膽鍛軀の快あるに於けるをや。願くは新來の諸士、吾曹をして再び委員の歎を聞かしむる勿れ。

警省錄

明治卅年工科大學に入員せしむ可き豫定人員及ひ入學志願者表

學科	豫定員	志願員	超過員	不足員
土木工學科	三二	六二	三〇	
機械工學科	一五	三四	一九	
造船學科	一二	二一	三一	
造兵學科	六	三		三
電氣工學科	一四	三五	二一	
造家學科	一五	四	一一	
應用化學科	二〇	一〇		一〇
火藥學科	四	二		二
採礦冶金科	一五	一五	〇	〇
計	一三二	一九八	九一	二六

備考。志望者の計百九十八人の外學科未定の者一名あり。本學年に於ける入學生に變更を生する時は隨て三十年に於て入學せしめ得へき學生の員數にも變更を生ず。

明治卅一年以降工科大學各科に在學せしめ得可き總人員及毎年入學せしめ得へき平均人員、

學科	總人員	平均員
土木工學科	九六	三二
機械工學科	五一	一七
造船學科	三六(六〇)	一二(二〇)
造兵學科	一五	五
電氣工學科	四八	一六
造家學科	三〇	一〇
應用化學科	四五	一五
火藥學科	九	三
採礦冶金科	五四	一八
計	三八四	一二八

右は特に心得の爲に掲示せられたる者なり。回顧すれば曩きに榮花の軍に從ひ、二州の水村山廊を跋涉して歸り來るや、時ならぬ悲風は駘蕩たる心眠を破りて端なく法科志望生諸子の頭上に荒めりき。爾來風木の感、痛く五曹の警省を促したりしも、誰れか料らん半歲後の今日再ひ此のとあらんとは。風聲鶴唳、元より憐れむべしと雖も併かもなほ落人の注意如かく到れるを見ずや。今日之を工科志望生諸子の爲に悲しむ

も、焉んぞ明日自ら悲しむ者たらざるを保せんや、飛雲の集まるを見て霰に備ふるは蓋し處世の秘訣なり。

特待生芳名錄

廷芝を悲しふ業にも在らず、千里を忍ぶすさびとも見えねど、吾から花神月靈に背きて六臺の天地に籠り給ひし者、蓋し竊かに今日の榮譽を夢みたりしならん。今や迷霧晴れ渡りて螢雪の功此に表はれ、左の九氏は實に本學年の特待生とはなられけり。

第一部三年法科志望生　（四名）

鈴木市太郎、高橋清一、佐藤周輔、佐々本雄二郎。

同　文科志望生　（三名）

丸山環、鈴木保臣。宮川鼎。

第二部三年工科志望生　（一名）

堀覺太郎。

同　理科志望生　（一名）

齋木政吉。

あはれ其の盡く故老三年生諸子の頭上を飾りしもの抑も近來の異觀に非らずや。之を見る若手の面中、果して人知れず袖を嚙みしものありやなしやは、餘桃の罪を抱きて榮花を羨む身には知らず。

校內雜俎

陞叙。教授今井省三、同福岡清一郎兩氏は高等官五等に陞叙され從六位に叙せられたり。

囑托。松田晋齋氏は新に講師（英語）に囑托されたり。

動植物實檢室竣功。植物園內に新築中なりし同室は豫期の如く休暇中に竣功し奇花異草を繞らし自から別天地の觀あり。

無聲掌普請。敷板取り換へも一兩日中に終る可しとか普請終らは倍舊の勇氣を以て戛々鞳々の聲四隣を震はせよ、

時習寮普請。寮內も休暇中に種々普請されたり下駄箱、應接所、浴室の脫衣場、湯呑所、就中寮生に便宜を與へたるものは机に引出しの出來たることなり。

千紫萬紅

嗚呼流に從ひて波を揚く、よしや濁らすと雖も獨り淸まず、糟を餔ひ醨を啜る、幸に醉はすとも夫れ遂に獨り醒めんや、況んや全く濁醉せる者に於てをや。由來順流にのみ掉さすの筏士が、一朝風潮の激逆に際會して底藻たらずんば魚腹に入る者、要は習性の如何にあるのみ、試みに見よ、春風徐ろに渡りて枝頭の雪に匂こぼれ、春雨綠濃かにして鶯聲香はしき花鳥の春に浮かるゝ輩を。蓋し彼等の心眼には斯の風斯の雨、長なへに催花促綠の種と映じて秋天落木の輪回を見ざるなり。故に坤圓めぐり來りて一たび胡笳悲鳴するや、綠の若葉も紅に染み、果ては果敢なくも萬段の錦を淤泥に委ねて空しく當年の陽春を繰り返へす夢の奴となり了る。あゝまた憐れむ可らずや。

翻りて吾黨の行働を尋ぬれは抑も如何。一陽來復して江水江花春色に湛ゆるに際しては、誰れか之を樂しまざらんや、吟花嘯風、吾曹の胸襟爲に和するありと雖も、なほ一片の心念は常に懸りて曙近かき天王山の旗影に在り、故に試考一たび了れば七旬の長暇に意氣活動し、胚胎し來る諸種の想望は盡く金氣肅颯、凉秋九月の新天地に煥發して萬丈の紅霓を吐くを常とす。是に於てや春風春雨に醉ふて愁風愁雨に醒むるを要せず。所云順流に在りて鳴門の海の泳者たらんを期す、誠に快心の極に在らずや。

今や新天地は既に開けて新學年青陽の季は來りぬ。夫れ焉んぞ徒らに過さんや、落々たる雄心

押ふるに由なく、控所の壁上氣焔の上る者千丈また萬丈。宛かも桐の一葉に秋を催して郊野一面、千紫萬紅の草花を見るに異ならず。劈頭耳を襲ひし者は擊劍部の嘯聲なり、柔術部の鋭氣は直ちに之に反響せりと雖も、意外〳〵、堂塲修理の廣告は端なく兩部の勇者をして髀肉の歎を爲さしめき。後れを耻ちつる後陣の面々、時こそ來れと短兵突擊、東に西に翻へしたる旗影を弓術部とテニス部の對陣とす。黑影參差、庭芝を踏んで靜勝館前に熱球を追ふ者は底球部の練習と知らずや、鳴かす飛はざりし潛勢力は早くも溢れて焰天を衝かんとす。若し夫れ墨痕鮮かに、蛟龍の雲烟を吐きて三間の紙上に舞ふものは、二年生諸子が發起に係はる漕艇の大々的飛檄なり、偖ては荻葉風に鳴りて鷗眠冷かなるの邊、河北の瀉に波を彩りて恣まに海若を叱せんとするか、知らず十七日の擧、如何なる驚天動地の壯劇をか演ずる。

運動界の活動既に此の如し、文藝部夫れ能く默するに忍びんや、縱令本誌委員の手に出でたる形容詞の警告は問はずとも、突差風雲を呼起して卓上に號嘯する演說討論部委員の奔走を見ずや。彼等は將さに歡迎されつゝある運動界の榮譽を羨みて人には見せぬ苦心の魂膽、何れ寒雨冷嵐の間に電光迸しるを免れ難き天邊の雲脚なりしが、果然々々、月の最終日、最後の紙片は潑溂たる元氣を載せて控所の一方に翻れり、之れぞ委員が忍びて注ぎし血の涙、あはれ開幕の曉、果して凱歌を擧くるや否や。却聞講談會もまた月に入らば深遠幽妙の學理を發揮せられんとすと。彼を見之を聞きて躍る者は抑も亦吾曹のみに非らざるべし。清硯淨几。吾曹之を次號に報導せん。（九月三十日締切）

菊を見て一言

とく起きて窓押し開けは金城の青嵐颯と吹きて睡を覺ます眼の下に見ゆるは黃菊白菊の蕾豐に匂ふなりけり、咲き揃ひなは色も香もめでたくまして世の塵を拂ひこそせめ丈夫か今は潛みて身を修め學ひて時に習ふてふ寮のうちに友垣の垣根堅くも結ひ合ふ七十餘名ぞ頼母しき。

過る休みの日一日、大乘寺山の松影に酒酌み交はし相撲とり遊ひ戯れし茶話會は新舊二生か隔たりの關を破りて親はしき友となるへき始めなりしか。

願くは寮の規約を能く守り自治の心に違ふなくこよなき美風ふり起し彼の菊のことゝいと清くゝと潔く住まゝしと云ふは寮生の某なり（某投）

第二回琵琶湖聯合大競漕會と我端艇會

吁、漾々たる金波輕く流れて、夢に浮ぶ白鷗の眠りをさまし、白雲水に映じて、八景の晴光、倒しまに影を深淵にひたせり、泓然たる靈水、長へに敷島武士の精芳を湛え得たる、漣波や昔ながらの滋賀の都に、宇治川の流れ爭ふ池月にはあらで、花の健兒が漕き連ねたるバッテーラの大競漕會は催されけり。

滿天下の貴紳淑孃が、狂はん許りの大喝采の裡に、譽れあるオリンピヤのオリーブにも勝る桂冠を戴きて、天晴れ、鍛ひに鍛ひ上げし多年の手並を、試めしえたる人々の喜悅やいかに、比良山風に胸うたせて、先登の功名、我こそと誓ひし者の、思ひきや、悪ッくき高綱めが言葉に馬の腹帶かひぐりし無念さ、晴れの戰塲に、此の梶原が一生の名折れと、哀れ鎧の袖を絞りし今景季はなかりしや、否や。

吾曹は、今回の大競漕か、寫し難き振古の大盛觀を以て、然かもテームス河畔、斯道の老將が、割據する牙營を蹴倒する底の大飛揚を以て、擧

行されたりと聞くにも係らず、我北辰校の艇隊か、波は靜に砂白き處、雄然槳を横へて、詩を賦するの勇なかりしを惜む、否な、勇勿らしめたる事情あるを深く遺憾とする也。

事情とは何ぞ、嗟吁事情とは果して何んぞや、吾曹不敏、世辭にならはす、退て之を同學に隱蔽するを敢てせす、猥りに愚衷を丹管に洩らして、單刀流露、いさゝか其の轉末を綴る、ゆるせ諸君、猿猴も樹より落つる例めしありと言はずや。

ろもや、我艇會か、疾風迅雷、聯合會委員の勸誘（第二高等校との撰手競漕）に接せるは、實に六月の中院にして、生憎にも學年試驗の際なり。我同學か繁忙多岐なると、さながら峻坂を轉する火球の如く、一冷又一熱、一愁又一喜、漏刻の油斷は一年の磴級をそこねる勝負に、短夜をこめても、烏のそら寐を盜みても、ノートブックと情死せんず存亡の折柄なりき。去るを我艇會役員の健氣なる、忽卒たる討議一回に、咄嗟、滿腹の熱情を飛して、快よく贊諾の戰書を贈りたりけり。やがて見る、清澹なる應戰のビラは、繁讀の聲かしましき控所の一隅に飜へりたるを、行路難を唱ひたる學年試驗は、間もなく終結を告げたるを、嬉々たる客子は、參差車を連ねて、桑梓に歸るを急くと切なるを。

試驗後數日、聯合會委員より親展書舞ひ込む、書は相州横須賀より來れるなり、曰く『第二とは多分成立すべし、されば聯合會へ出席し得る人々の中にて、漕手御撰定置き被下候はゝ、好都合と存候云々』と、是に於て會長以下更に商議を重ねて、落ちなく諸般の理裝と手配とを整へ盡し、終に鬼をも挫く七人のチャンと、參列役員の撰任さへ確定するの運ひに至れり。然るに會員の鮒甲斐なき、此の時既に双親の膝下に潜みて、脆くも敵に背ろを見せたる葉武者のみ多く、こゝを先途と蹈み留まりし面々は、猛稜鐵を欺く三十餘員の精腕を數え得たりしのみ。

加ふるに頼み切つたる屈强の驍將の、病痾の爲に、家務係累の爲めに、すげなくも歸國する者踵を接して、あはや、鮮明なる眞紅の旗色もやゝ動き、軍紀俄に沮喪沈銷の嘆きはありしも、いかで許るさん、骨身惜まぬ役員の經營苦心に引き留められて、心得たりと取つて返へすもの引きも切らす、玆に再び十倍の覇氣を恢復して、皷旗堂々、劔戟閃々、電光石火も何んのその、丁々發矢と拔合せて、如何なる强敵をも追ひ落さんず勢にぞ見えたりける。後出陣の部署定まるを見渡せば、靡く校旗の下に、私務を抛ち、情誼を振り棄てゝ、鋭意萬難を排し、百騎か一騎になるまでも、火花を散して快戰せんと、馳せ集りし一騎當千の漕手は、七人のチャンを總大將に、生死不知の北國の優勢すぐつて三十八人、郎黨彌次馬のべ〳〵武者は數ふべくもあらざりけり、その扮裝には、よしや、緋威の鎧こそ着ざれ、白帽黑帽、北辰の星章を輝やかし、シガーの烟り白山颪に吹き靡かせて、花か雲かと怪しまる、草の原より出つる月は、馬鞍の上にほのめきて、鎧の袖に傾けりと、謳ひたりし元弘の昔も斯くやありけん。偖て愈、七月十一日黎明に幕營進發、狂瀾天に逆捲く金石港より、船路遙かに江州さして攻め上るべしとそ下知されける。

折しも、北陸の地、名にしおふ霖雨の期に際して、濛々たる豪雨、止まざりしを十數日、俄然、富山大洪水の電報奔り、手取川大氾濫の恐信は飛ぶ、風泊怒號し、猛浪空を衝き、橋梁は落ち、道路は壞つる、行て豫習のオールを蓮湖に操つりし勇士も、今は閧として其の片影をだに現は

さず、きのふも今日も、冪々たる密雲は低く流れて、坐ろに故天の災害を氣遣はしめ、天瞑地閉、人心惶々、思ひもよらぬ一團の愁烟を會員の腦頭に送れり。越えて十日、淫雨わづかに霽る、校友一同この日をもつて撰手を招待し、一堂のもとに團欒して、清酷をくみ、芳鮮を割きて、その行色を壯んにせり。酒三行、雄談は滾々として四筵を驚かし、酣嬉淋漓顛るゝをいとはず、撰手、滿を引いて太白を擧げ、陶然歌につれて舞ひ、單簀直に入て虎狼之窟をつけば、寄せ返す太刀に、一臂深くさぐる蛟鰐之淵と和する者は吟士なり、一上一下、沈んでは拂ひ躍つては屠り、氣宇豪壯、殆んと八荒を呑む、昔し帷幕をあげて、項王を睨みし鴻門の樊噲も、かくやと疑はれたり。行くもの送るもの、手を握りいそ〳〵として終に袂別の語をかわし。車を連ねて一行を金石港に送れり。

噫、誰れか想はんや、別を送るこの高謳亂舞の瞬間か、忽ちにして、絶望、落膽、否な寧ろ悲惋、痛恨、無念の奈落に、吾曹を沈め終らんとは、あはれ、神ならぬ身の撰手は、打ち寄する港頭の轟聲に耳すまして、曉くるを遲しと控えたり、役員評議員は、東馬南轅夜を徹して、萬般の行裝を急きつゝ奔れり、沸騰せる心の會員は、バロメートルの降昇を檢視して、校友か發輒のふな路、安かれと禱りつゝ眠れり。ほの〳〵と夜は明けたり、東雲の靉靆く山巓をかすめて、朗らかなる曦光は洩れたり、尨然、港岸近く投錨して、黑烟朧々天に漲ぎる、此日の便船加能丸も見えたり、前嶺後濤、眺めやりて撰手は雀躍し、かざし見て送者は抃舞せり。發矢、咄!! 聲は何物ぞ、刹那、大會委員の簡牘は、突然一行の手に落ちたり、これ何事の消息ぞや、嗚呼これ何んたる消息ぞや、我艇隊か當の敵手

と覺悟したる、第二高等學校の艇友か、撰手競漕を謝絶するの悲報なりけり、撰手競爭不成立を通告するの悲報なりけり、然かも、我艇隊の名譽、存亡、死活を、毫釐一髮の危きに繫きたる大問題か、遲々たる一片の斷簡に依りて宣告されたるなりけり。一同展讀、唯相顧みて茫然たるのみ、乘船の間際に逼りて、策の出つる處なきに迷ひしのみ、泣きしのみ、嗚呼、嗚呼の嘆聲は、覺えず一同の唇頭を通じて洩る、絶望、落膽、遺憾、悵恨、嗟嘆、大息、等のあらゆる感愴は、驀然として一時に、吾曹か椀大の腦腔をかき亂し竭くしぬ。行かんか、苟も四高の幡幟を飜ひしたる健兒か、名もなき野武士と引組んで、敵の細首搔きたりとて、何程の功名やある、未練の者よ情けなの撰手やと歌はれなば、末代までの耻辱、之に過ぐる物は勿らん、歸らんか、きのふ宏堂の下に、袂を聯らねて高會歡呼したる三十八騎、けふ零々の箋信に膽挫きては、何の厚顏か再び半千の僚友に見ゆるをえん。船は出帆の滊笛をしきる、人は絶望の弔語を贈る、思は千々に亂るゝ、撰手の胸裡は、諸共に哀れと想へ山櫻、花に心を三芳野の馨りも清きもろ肌押拔いて、いざと言はゞと、見ん事据えし覺悟の健氣さ、懷ひみるだに苦しからすや。」

さはれ、胸膂割裂の嘆きあるものは、豈に獨り撰手のみならんや、豈に啻に四高生のみならんや、大會委員も亦多少の同情を表するに躊躇せさりしは、十二日着の雁音か、悃篤なる慰言を傳へたるを見て知るべし、文面にいふ、

本年は貴需に應じ兼候哉と存ぜられ候、折角の御催しにて、生等も至極賛成に候へば伴氏と會合致し候節も、今少し時期早やかりしならんにはと、殘念がり居り申候次第にて云々。

嗟呼、是れ少くとも吾當局の罪にあらず、二高諸君の罪にはあらず、又大會委員の罪にもあらずして、流轉免れ難き世態の一不遇のみ、一天命のみ、されば固より人を怨まず、自らも咎めず、洒々落々たる光風を宿して、錚深、絡然、素波を櫂瀝に碎き、海若の堂を北溟に探りて、徐に期を次回に待つを願ふものは、之れ即ち四高男子の本領に非すや、本領に非すや。

初め、我役員は艇員の續々として任意江州に上る者あるを知り、書を裁して、臨時、適應の處分を盡されん事を大會に請求し、更に再び、禿々たる毛錐子を舐ぶりて、力なくも撰手派遣中止の悲調を贈答し終りぬ。吾曹は該會に對する我役員の義務は、かくて殆んと間然する所なしと信するも、唯恨むらくは、派遣中止の後、我艇會を代表する委員か、聯合大會に參列して。ゆる〳〵前後策の講究に從事せざりし一事是れなり、噫。

擱筆に臨みて吾曹は、校長閣下か劇務鞅掌の間に、悃々として會務を總攬せられたると、評議員諸賢か、篤實に、忠懇に、指揮周旋の勞を取られたるとを奉謝する也。

（編修室にて不眠坊記）

附錄

夏季跋渉錄

白山登行の記

楓溪山人

神代より消えぬといひけむ雪の白山にとものす、この年月思ひたちぬることなれば、浦田柳涯上杉松堂加藤北櫻熊田東風などうちつれて、また夜深きに出て立つ、頃は九月一日有明の月はくもりたれど、風いと涼しくふきて夏とも覺えず、窪のあたりにてほのぼのと明く、しはし橋の上に足とゝめて烟草くゆらす程に、賤の童の空車ひきつゞけて來る、今日の天氣はと問ひたれば、雨ふるべしといふ、いざひとあしもとて急ぐに、あやしき姿の旅人の道の傍にやすらひたるが、つと立ちてわれらと共にあゆむ、年は三十を二つ三つ越えたらんと覺しく、長き杖もちたるが衣はいみしう垢つきて見ゆ、ことはあらあらしくしかも物わきまへぬむくつけき男なるに、心ならず從ひゆけば、草刈る賤の女ともの指さしあひていぶかしげに我等をながむるこそ心苦しけれ、額谷月橋茶屋あり、たちよらで行く、さて何處の人ぞと問へば、信州長野のものにて、越後の妙香山にのぼり、伏木をへて今朝金澤を出でぬ、なほこれより白山に趣き、歸るさには乘輦御嶽富士をも見むと思へるなりと答ふ、鶴來も過ぎ國幣小社白山比咩神社の森を左に仰けど、急く道なればえ詣てず、遙に拜みてゆく、福岡にて雨降り出てたれは、茶屋にたちよりて休らふ、男もまた入りて柳行李より取出したる小さき器の中にて、生米と砂糖を水にかきまぜて食ふさま尋常のものとは思はれぬめり、我等も飯ものする程に、蠅おびたゞしく集ひ來てうるさけれは、止まりかねて立ち出づ、男なほはなれずこの蠅いかにして拂ひうへきと、額に皺よせて口々にいひさゝめく、江津吉岡をもすきて手取川のあなたに、立ちつゞく松の景色たゝならぬをほめはやしつゝ行けは、いつしか九十九谷に至る、こゝらの谷まこと數へたらましかは二百にも餘りぬべし、雨強くふれは、谷々より瀧の落つる有樣えもいはすめてたしとかや、上吉野につき足たゆげにして茶屋にいりて憩らふ、男はいかゝ思ひけむさきに行きぬ、からうじてやり過したれば皆手をうちあな心地よやと幾度も繰返して笑ひのゝしるを、里の童ともの門邊に群りてとめ見さわくもおか

し、晝飯、たふへてこゝを出てゆき、行きて木滑新の村端に出てぬ、北櫻柳涯などすこしさきに歩みたるかゆくりなく蛇ふみたらん如き顔して走りもとりてあれに例の男寢ね居ると云ふ、如何にせんとためらふ程に童三人來るにこのほかに道なきかと問へは、こゝより行けかし濁澄橋に出づへしと告くるまゝに、橋打ち渡れば、道二つに分れてしるべの石ぶみたてるを、右に分れゆく、女原の茶屋にて菓子など食ひ、長居もえせで出づ、これより山を左に川を右に見る、大なる岩ともこゝかしこに亂れ立てり、歩みぐるしなど云ひて屢やすらひつゝ、岨傳ひして行くに道いとせまくて、荷負ひ來る牛馬にあふ毎に蹴落されんかと思ひて、掌に汗を握る、川水は鼠色の布引きたらむやうにて、瀨々の波石にふれて白う打ち烟り、とゞろとゞろと鳴りとよめる聲の山にひゝきあひぬるは、おかしき中にも冷しき心地す、五味島の橋渡りてより川を左になして流にそひつゝゆく、道やゝよけれど、雨いよいよ強く風ましり、笠もる雨のしふき面をうちてわひしともわひし、釜谷に近きほど、川曲り岩のそば立ちたるに、水のあたりて激する音のいさきよきけはひ、いふへくもあらず、釜谷にて巡査にあひ、共に石に腰うちかけ、煙草くゆらし乍ら行く、先きの宿などを聞くに、いとくはしく敎へて、去年の夏三好君などの白山に行くにあひたりとてねもころに談す、深瀨につきしは四時下りにて、日高けれども今日は旅に出てゝ初めての日とておのおのつかれ困したれは、こゝより桑島までは一里にみたしと人のいふをもきゝいれず、谷口と云ふ家に宿る、手取川の岸なりあるしは七十歳はかりの老人一人住めるが、巡査のいひけるにもまして貧しくものむつかしきあはら屋なりしかど、詮なく手洗ひ足そゝぎなどして打ちくつろぎ夕の食ものしてやすらふ程に、一人の旅人來る、例の男にはあらずやとふすまのひまよりそと窺へは、白きひげある翁にて、我等さきにやとりてよき室あらねば、入りて爐のほとりにすはれり、まづ父母のもとに手紙送り、あるは燒火箸もてしうしうと足の裏なるまめをやきかてら、何處の人そと翁にとひたれは、東京四谷なる毛利萬輔といふ者にて、時計の修繕を職とす、此程は尾小屋にありつるか、白山に詣てんとてこゝに來れりといひて、九州北海道は更なり、浦潮斯德をもへめくりし次第より、地理風俗ことことく詳かに物語るもゆかしき翁なり、宿の後に清水わき出つるかこよなう清けれは、全村の者この水を用ひさるはなしとぞ、あすはとく起きてその水にて眼洗はゝやと云ひて、布團ひきかづきて臥ぬるに、雨いとはげしくなりぬ、夜中頃とおほしきに、宿の主水が出てしぞよと高らかにさけぶ、騷かしきことないひそとひとりごち居たれど、雨の音の強きとなれぬ枕のわびしきに、のみさへ身をせめて寐られねは夢も見ず、ともしひかきよせて、日記などものする程に、夜はいみしう更けゆく、

明くれは二日、雨ますます降りしきりて、聊かおやむへくもあらず、あまつさへなる神は、落ちかゝるやうに閃きかゝるに、心安からで朝食は湯にてのみけり、十時ころより、川の水かさたゝましに增して、根こしにせられたる杉の大木、あるは七八間にも餘れる材木など、數知らす重なりおしあひて流るゝ勢のはやきこと、矢の行くにもたとへつべし、今はこの宿も危からむ、立ち退く用意してよと、主人の告ぐるにまかせて、皆衣はむしろもて包み、赤裸に革袋などうちかけなから、主人をたすけて、家財取纏むる程に、水あふれて村の家五つまで流れゆく、心地まどひ、きも消えて寺に走りゆけば、女童のつどひてなきさけぶさま、めもあてられす、覺えす涙こほれてさまさまに慰むれば、一入つよく泣くも、いとあはれにかなし、夕くれ近きころより、やうやう雨はれたれは、宿に歸り主人の談をきくに、かゝる洪水は、百年このかたなきことなりとぞ、」三日、空はれたれど、橋々流れて道通せずとぞ、さらぬだに宿のわひしきを、日毎飯毎にきうりの汁のみ、すゝめられてはきりきりすにも劣るべしゆき得む限りまでとて晝飯たうへてこゝを出づ毛利の翁も打ちつれてゆく、十町はかりも來しと思ふに、道は川の中に崩れつきて、片足たにかくるはかりの土も殘らず、何處かかりの道なきかと探す程に、誰かしたりけむ、大なるはしごを、藤つるもて樹の根に、ゆひつけたるをみつく、これよとてくたるに、忽ちにつきぬ、皆杖をすて身ひとつになりて、覺束なき草にすかりて、河原に下り、大嵐と小嵐の川、打ち渡りぬれは、山のくつれたる處あり、土やはらかにして、足はもゝまで沈む、桑島村に着きしは、二時頃なれど、行くさきの道、いとあしくなりぬときゝて、酒井と云ふにやどる、日くれてより、雨また強く降り出てゝ、つゆまどろむひまもなきに、夜なか打ち過くる頃ほひ、何とはしらず、わや

わやと、人の騷く聲して、警鐘の音つゞけさまにひゞく、何事やらんと布團けはなちて。戸をあらゝかにあくれは、宿の婦走りきて、後の山か崩るゝぞとよ、いさはやく立ち去れよかし、といふ、餘りの事に、胸つふれ齒ふるひて、足もたゝず、あはれ、如何なれはかく天災の苦みをうくることぞや、行かんとするに道なく、歸らんとするに巷なし、よすかもなけれは、賴むへき人もなし、あはれ大君に仕へて遠行し、あるは軍旅にしたかひて、遠征する身にしあらは、勇みたつへき事のあらむに、親をも家に殘しおきて、今空しく枕をならべて、すゝろなる死にをす、へかめるかなと、かれを思ひこれをなげきて、涙にむせひあひぬ、毛利の翁は、顏を草の葉の色にして、一言をも言はず、かくて夜のふくるにつれて、雨ふりやみたれは、しはしとて臥ぬれど、めも合はず、燈火のかけくらうして、心細きかきりなり。

四日。夜のあくるまゝに、見やりたれは空はれて川のあなたなる山々に白雲のたなひき渡りたる景色繪にかゝまほしき朝なり、父母のもとに手紙送らむとすれは、郵便通せずときゝてほいなく思ひとゞまる、翁は命たすかりし祝にとて、主人に鏡餅あまたつくらせて我等にすゝめ、おのれも食ひつゝ、いとうれしけにくさくさ珍らしき話するをきくに、旅のわひしさもうちまぎれぬ、こよひはやすらかにねむらんと思ひしに、あやにく隣室に樵夫あまた泊り合ひて、わらひのゝしる聲耳ちかくきこえて夜もすがらものさわかし。

五日。曇る、道危きよしなれど宿をたゝんとて草鞋などとゝのふる程に、毛利ぬしはいと名殘惜けに、この秋の末は金澤に出でふさはしき家もとめて店を開かむと思へるなり、いつれ再ひあふへき時あらむ、たゝ心をもちひ身をつゝしみて行き給へかし、とねもころなる翁のことはに見送られて出でゆく、日頃ふりける雨に、道いとわろく谷々より土砂をつき出したるか、いみしうやはらかにてさなから水田の面を渡るにことならす、あまつさへ見上くるはかりの山の岨より、家程の岩の落ちむとしてかゝれる處、皆ものもいはで走りすくるひゝきに、小石などくづれきて危きことといはむかたなし、一里餘り來て川のあなたに牛首村を見やる、橋失せぬれは至るへからす、またさかしき岨つたひしておとろ生ひ茂れる中に、あるかなきかの道をたとりゆくに、一人の農夫にあふ、へとつくはかりけしからずくさきは、このあたりの村人は、にんにくを好みて食ふによりて、息のくさきなるべし、これよりますます道けはしく、右は川にて向はおかしう山峙ち、綠につゞく杉のまに、わら屋の軒一つ二つたちたるは、いかなる人のすめるにやとゆかしきこゝちして、且つなかめ且つやすらひつゝ行くほとに、山賤の旅人を貧ひて坂をのぼるあり、われら苦しといへともいかて人力を賴み馬鞍に心を惱ますへき、手の奴足の乘物たゝ心のまゝなり、赤岩白峯などの村をもすくれば、岩山谷川にいたる、あやうきかりの橋をかけたり、柴負ひくる賤の女の、こゝには柳橋とていと高き橋のありしなり、またその石原は鳩のいてゆとて宿屋もありしに、橋と共に過くる日の洪水にて流れぬ、と語る、悉くおとろきのたねならぬぞあさましき、夕くれちかき程、白山礦泉宿薩摩屋につく、家の構などのすぐれたる、かく山深く奥まりたる谷ふところにはまた得かたき處なるへし、庭はせまけれども小さき池をつくり、これに瀧おとしたるか、ふすまを隔てゝは、雨そゝきの音かとあやしまれ、前を流るゝ湯谷川の水音は、いかつちの響かとうたがはる、夕飯たうへて故鄕に手紙を送る、いつれも恙なけれど尙三日はかり、こゝにゆあみして身を養ふよしを認めて、山川の變災は少しもかゝす、これ親の憂へむことを思ひやりてなり。

六日。日たくるまて朝いして起きて見れはなほ曇れり、飯ものするにいとつめたし、いぶかりて如何に白山のふもとなりとも、飯のひゆることのはやきことかなと、下婢に尋ぬれは、面ざしあからみて、朝は湯をそゝきて食ふかこゝの習ひなりと應ふ、柳涯東風の二人は、岩山谷川にしのふ石といふ、しのふの形つきたる怪しき石とらむとて赴きけるか、やかてあまたもちて歸れり、主人ともより集ひてこの石もとめむとて行く者多けれとも、得ることは稀なるに幸ある人かなと、舌を卷きてほめあひたり、今日白山よりくたりし客の談をきけば雨いさゝか降れりとなり、何程の事かあらん、いざのぼらむとこゝろさして、あないの人を賴み、夜十時ころより松明ともして出づ、まづ鳥居をくゞりはんそう坂と云ふをのぼれば、さかしき坂にかゝる、これを梯子坂ととなへて樹木生ひ茂りたるか、ひるさへ小暗しとぞ、この男いみしきしれものにて、我等のい

ふことをうけかはねば、腹たちて宿にたち歸り、雇料あたへてさらしむ。

七日。例の野山踏み分くるすさみのやめかたくて、處々の名、道のひとすちにて迷ふへき憂なき由をも、こまかに主人よりきゝとり、柳涯東風は力あれは松明餉など重やかに荷ひ、日のくるゝを待ちかねて、草鞋ひき結ひ立ち出つ、案内の人を雇はねは、一葉の圖こそよなき路しるへなれ、梯子坂のむけにけはしきをのぼりぬれは、日すでに暮れ果てぬ、松明をともして行くに、あたりさなからひるの樣なるに、右は岩山谷川、左は湯谷川の流るゝ深き谷にて、水音遠くきこえてものさひしけれど、こよひは空能くはれたれは心にかゝるへき雲も見えず、檜宿と云ふは一の宮の跡ときけとも、大方朽ちはてゝ柱めきたるものゝ面影をとゝむるに過きす、指尾豐坂などを越ゆれは、大なる岩屋あり、泰澄大師の白山をひらきし時、くしおろしゝよりこれをかみそりいはやと名つけたりとぞ、たゝ火をうちふりつゝ、九折坂をのぼりて慶松室堂といふ堂あり、足も休めかてらいりて見るに、木もて作れる小さき堂にて、旅人のやすらひしもしるく火焚きしあとあり、この邊り平かにて百合などの花さけり、草むらの中より清水わき出づ、競ひて掬ふに冷たきこと限なけれはよめる、

白山の雪消なるらしむすふてもこほるはかりの谷の眞清水

これより女郎坂別當坂などを越えて、たつかみと云ふえもいはずあやうく、けはしき處などあへきつゝのぼり行けは、空もいと近う星つかむへき程なるに、夜あらしの音も物すごく、松明さしおろして千尋の谷を見むとすれは、眼くらみ足のうらかゆくなりて、いはほの上をはらはひつゝ、崖路をなふみおとしそと、互に呼ひかはして行く、彌陀原に出つれは五葉松の地にはひ廣こりて、樹の高きものはいささかもなく、雪また殘れるにいみしう寒き風の衣を吹き通し、身ふるひて暫くもたゆたふへきならず。

八日。三時過くる頃やうやう室堂に至りつく、山守二人すめり、爐に松葉などたきて手足あたゝめむとすれとも、煙にむせひていとくるし、澁き茶のみてしはしやすらふほとに、東の空ほのほのと白うなりぬれは、日の昇るを見まほしうて、山守にあなひさせて出づ、白き雲の綿つみあけたらん樣なるか、見おろさるゝを、誠に麓のものなりけりと云ひもあへす、風と共に上りきて足の下に踏むへきやうになる、今は雲の上人とこそ呼ふへけれと、語り合ひてゆく、高天原とて小社白山比咩神社の奥院なり、我等ぬかつき終へて景色うち望むに、日は定かに見えわかで、雲の指さすへき程なるに、と男の語るにつけても、せめて今日のみはこのくもなくもかなと思へどかひなし、後なる嶮峯の頂は、さなからつるきをたつるに似たり、その下には小さき池三つはかりありて、あるは紺屋地獄、あるは油屋地獄、あるは鍛冶屋地獄と呼ふとそ、神殿の傍に内務省地理局測量の櫓たちたるか、つかさ人めきたる人一人、その上に居て望遠鏡をもて諸方をなかめ居たり、大汝は程遠からねどえゆかてやみぬ、このあたりはまたく石にて、皆金くその樣なり、暫しくたれは土見え草ありて、はしめて世界の景色あり、室堂に歸りて餉ものし、あゆひ引きしめてもとの道に下る、彌陀原うち見やるに、只目路の限り小松ともの這ひつゝきて、いづこを限りとも得分かす、春夏秋の草一時に花咲けり、山の背をつたひゆく、程いと遠し、足疲れたるけにや坂路の苦しさ、のぼりし時に倍まされり、されど遙なる山々のたゝすまひも常ならずおもしろきに、少しは心もなぐさみて、例のたつかみを過くれは殿か池あり、いふへきほどのものにはあらす、千人窟を通りて慶松室堂に至り、清水見すてかたくてやすらふ程のてすさみに、幾むすみをかしけむ、やうやう日も傾けは、心急きせられて走らまほしけれど、危ふけなる坂路なれはいかにともしかたし、胎内久久利といふ處は、三つの大なる石の道をはさめるにて、のぼりし時はしかと見えさりしに、何れも一丈あまりの高き石なること、今見ておどろきぬ、梯子坂にて上り來る人あり、見れは宿の者にて、になへる餉おろし、必らす餓てやおはすらんとおもひて、むかひにまゐりつるなり、いさきこしめせよと云へど、程近けれはとて共に宿に歸り、湯あみして夕飯ものし、あすは金澤に向はんとてやかてねむりぬ。

九日。下婢の呼ふにおとろきて目さむれは、昨日の山路のさかしきにいたう疲れぬるに、空さへ

かき曇りて雨降りたれは、足ふみ出さん力もあらぬど、今は皆の財袋はほとほと空しくなりて、あるじの此雨にはいかてか歸らせ給ふへき、山の岨道危かるべし、今日尙一日休らいて、あすなん立ち歸らせ給へなど、いふをもうけかはで、しぶしぶに打ちつれて七時頃宿りを出づ、來し時にはひきかへて道やゝつくろひたり、二人の巡査にあひ、女原などのことを尋ねたれは行くへからずと答ふ、また牛首のあたりにて、里人に問へは、易しと答ふ、けしからぬことなりと、云ひ合ひつゝ急きゆきて、桑島村につきし頃、雨またく晴れたり、例の宿に立ち寄りて憩らふ、旅費なければ今日は夜になりても歸らではえあるへき、携ふる餉は、夕のものにせむとて、おのおの小さき餅二つづゝ食ひて行くさま、乞丐のよき衣きたらんか如し、村を出つれば、遙かに人二人たち居て、手にて招く樣なり、近づきて見れば、わか父と親戚皆木ぬしなるに、暫しは夢かとのみたとられて、覺えす涙こほれにき、石に腰うちかけて父のいふことをきけば、日ころの新聞にかける事ともの恐ろしさ、只人すら驚きあきるゝを、まして我子の音つれさへ、一度もきかれねば、何れの親も心のやみにくれまとひて、日ことに集ひ合ひて、とやせんかくやせんと語れど、親しき人々の訪ひ來てとかく云ふ程に、心の安きひまなく、立ちても居ても忘れねば、昨日なん家を出てぬるに、皆々恙なかりしこそうれしけれ、と聞けはいとあはれにありかたく覺ゆ、深瀨より女原に至る間、山々のあさましきまで崩れたる有樣、筆にも繪にも得つくしかたうなむ、もとの道はつゆはかりの面影もなくて、あるは山の頂を越え、あるはあやうき梯子渡したるを傳ひゆくに、目くらまんとすれは、今朝巡査の云ひしも宜へなりとうなづく、女原の箕谷と云ふに宿り、今日は日蝕なりしも曇りて能く見えさりしなどゝ、主ともの語り居るをきゝて、餘りの危さに忘れける事哉、あたらことしたりとてうちなけく。

十日、つとめて起き出てゝ、端近く見出せは、空は塵はかりも曇らす、晴れ渡りたれば、心おのつから勇み脚結つくろひ立ち出つ、秋のはしめなるに、鶯の聲かすかにきこえていとめつらかなる心地す、上吉野にて暫しやすらひ、下吉野に至る、川のあなたに太皷うつ音す、ふと心つきて、吉野なる太皷野は何處なるらんとて、草刈れる賤の女に、太皷の音する處はと問へは、あれは遙なる村なりと云ふに、問ふものはことは拙し、答ふる者は正しとて皆腹をかゝえて笑ひぬ、童一人かたはらなる畠より走り出てゝ、太皷野ならは教へむとて伴ひゆくまゝに、至りてこゝぞと云ふ處を疲れたる足にてふめば、太皷うちてはやすに似たり、おもしろやまはではいかで通るへきとて、吉野初瀨の花紅葉と謠ひ出せば、往來の人々も足をとゝめて笑ひ合へり、福岡のあたりに至れは、手取川の水のあふれにしあともしるく、見上くる程の高き樹の枝に、流れ木あまたかゝれり、今日はいみしう照りて暑さ苦しけれは、處々の小川にて足うちひやしなどしつゝ、行きて鶴來の町に入りたつ、去る日の洪水にて、左は河原にありて人の住居の脆くも滅び失せたるあちきなさ、唯水の泡にぞ似たりけると、昔の人のみ、しか思はむや、茶屋にて晝食ものし、四時はかりに歸りつきぬ。

（完）

五箇山紀行

豐泉生

舟に車に、苟も身一たび、中越の廣野を横ぎりし者は、必ずや、湘水の源　礪波野の南に方りて、嵯嶙たる連山、嚴として雲の上高く、自然の牆壁をなすを見ん、而も誰か、斯高山の背に、文明の度に於て、風俗の點に於て、優に一百年以前の、民族として亦平家の遺族として、傳稱せらるゝ、一大部落が、如何に細く又輕く、炊烟を揚げつゝあるを知らんや〃、豐泉生、嚮に白岳登山を企てゝ成らず、空しく西天を睨して、孤村に幽居せる者、殆ど半月、烟霞の癖、欝勃の氣、益々迸發して仰ゆる能はず、遂に自ら驅て、此奇谷に投ずるの企を成すに至りしもの、抑幸か不幸か、於是か葉月中旬、遙に書を、一松、田吉、兩氏に飛ばして、五ヶ山行を促がし、爾來漫然去つて、有磯の濱、大岩の瀑、に放浪せしもの數日、歸り來れは、兩君此行を賛するの郵信は、既に机頭を擁して、生を待てる者の如し、生が欣快如何なりしぞ、則ち郵書を手にし、地圖を按じて、家宅に日來の勞を慰する者僅に一日　宿勞未だ愈えざるに、再び立て、五箇幾條の、峻坂嶮路の間を、踏破せんとす、生が好奇心も此處に到て極まれりと謂ふべし、夜に入て、徐に旅裝

を整へ、筆硯を洗つて、寢に就く、時に三更、雨滴の既に霄々たるを見る、喝、喝

明くれば八月廿六日、夜來の雲雨、既に收つて、涼氣頓に至り、滿眸の郊景轉た初秋、六時鄉閭出發、菅笠と吳蓙とに身を固め、只一箇の杖と、一枝の筆とを携へ、漂然として南天に向ふ、鄉兒見て奇と呼ぶも、吾子其何故たるを知らざるなり、想起す先月今日は、生が正に牛岳登山の爲めに、南に向ひしの日、而して今や又此方角に向はんとす、午岳若し靈あるも、生が狂癖を咎むる勿れ、坦たる青野の間を經、山又谷を踰ゆる幾度　檀谷野の古戰場を吊して、專光寺境內、義經卿の墓あるを聞き、庄川の岸に出でゝ、水後の慘狀に泣き、午後一時、庄の渡を亘る、只見る牛岳峨々として雲を衝く處、庄川の水は、碧く又白く、溪間烟霞の間より奔注し來る、而かも幾千の綠松は亭々として、對岸を繡ひ、妙趣自ら、一幅の畫圖をなす、忽焉雲油然として起り、驟雨沛然として降り、妙は愈々妙となり、趣更に趣を添ふ、予見て恍惚、又衣袖の悉く潤ひたるを知らず、金屋村に至りて、雨益々急、則入て一茶店に憩ふ、主婆生が異裝なるを見、喃々語て曰く、聞く近來巧に人を欺き以て、生血を取るの惡者入込み居るとは眞か、と問ふ顏甚だ眞面目なり、予則ち其訛傳流說固より妄なるを知り、辨疏稍々力む、豈に計らんや、主婆遂に生等を目して　是が一味の者となさんとは、昨今到る處として此怪說を聞かざるなく聞くとして其妄なるに驚かざるなし而して今や自ら其一人として疑はれんとは、抑も何等の因果ぞ、信耀君側に在り戲て曰く君人相甚だ惡く、破笠に白裝既に人の疑を引て餘りあり況や仕込杖を携ふるをやと相顧て哄然、金屋以南、山漸く深く、而かも尙ほ、一條の車道は、高く庄水に沿ふて、遠く山又山の裏に堙滅するを見る、進むに從ひ山勢益々雄大、岩層歷然として、山骨妙に露出し、浩漾の象自ら其間に顯る、忽見る兩岳巉岩相迫る處、一帶の虹霓溪に亘りて懸るを、近て之を見れは則ち飛橋の架するなりけり、橋高百尺舛水竭きて僅に底に達すと云ふ、橋頭試に立て眼眸を放ては、山は厭と迄高く、水は厭く迄白く、流激して岩を嚙み、岩怒つて水を呑み、落ちて瀨となり、止まつて潭となる、而かも一條の白龍遠く淡靄疎樹の間に嘯下するを見る、何等宏大の景ぞや、既にして湯谷温泉に到る、蓋し兩氏と此處に會合の約なれはなり、到れは兩氏既に在り、茶を烟し席を掃つて待つ、於是か快談頻りに出で、淸興頓に湧く、樓景色絕佳、坐して溪山烟雨の大觀を賞すべく、又以て山水自然の妙趣を味ふべし、湯は鹽泉にして庄水の流汀に湧き、河水漏注して温度稍々冷、加之洪水一たび到れば、幾尋濁流の下に沈み、徒に魚龍の窟となるは只夫れ此温泉の乏しとする處か、樓檻高く放吟する者あれは又口に任せて默句を呻るあり、畫する者あれは又題する者あり、事異なりと雖も其絕勝に醉ふたるや則一なり、偶々烟雨後を收めて日漸く昏く濃霧山川を蔽ふて只水聲の雪々たるあるのみ、時に一人あり叫んで曰く、月出づ／＼と、淸涴拭ふが如きの凉月と思ひきや、霞みて又朧に、一に春の月觀る思しぬ、吁月よ汝脫塵離俗の此仙界に出でて、尙何の包むこと有て然る乎、此日程七里

廿七日曇、十時湯谷温泉出發城端に向ふ、金屋黑岩村の西端一泉あり、淸水混々として湧き、以て掬すべし、傳曰ふ、往昔僧釋如、此池にて一顆の瓜を洗ふ、水極て冷凍、瓜爲に裂く、後人傳へて瓜破の泉と云ふと、之より道路大平坦、滿眸の稻田、既に微黃を帶びて豐兆自ら穗粒の間に顯る、吁此歲にして此作あり、彼等擊壤鼓腹の狀想ふべきなり、正午井波に着す、先づ巨刹瑞泉寺に詣る、固より幽邃閑雅仙界に入るの趣はなしと雖も、伽藍の魏乎たると、山門の古きと、境域の廣きは、蓋し以て三國の白眉となすを得んか、井波の西一里赤そぶ谷なる處あり、木葉昆虫一だび此谷に落つれば、悉く石化すと云ふ、土民以て奇となし、一に神靈の所爲なりとし、大に尊信し、苟も人之に入て神靈に觸るゝあらんか、大風忽ち起りて、萬作枯る、故に殊に番人を置て、人の之に入るを防ぐと、甚哉迷信の極、之を聞きし予が、失望は如何なりしぞ、吁斯る研究の好資料を目睫の間に認めながら、空しく過ぎ行く余が悲さ　、午後四時城端地に着し扇屋旅館に投ず、夜相共に出でゝ街路を逍遙す、道黑くして互礫途に轉々し、夜行甚だ艱む、而かも機業の盛なる、到る處孤燈を羅して機に對するの婦女子あるを見る、町民生活の度一般に高きも亦偶然にあらざるなり、夜雨又蕭々一行爲に喃々天の無情を歎く、殊に切なる所以の者は何ぞや、夫れ生等今回の旅行は眞意一に五ヶ山幾十の深谷を涉り、峻山を踰え、以て其地理を觀じ其風俗を察するにあり、昨今に亘れる旅行の如きは只之に附帶せる序幕のみ、將に來るべき本幕は實に明

日以後にあるなり、而して今や風雨の害を受く果して其行を完ふするを得べきか、昊天若し眞に善に與するならば乞ふ吾一行を惠むに吝なる勿れ』、

廿八日、果然無情なる檐滴は點々として夢境に入る驚起雨戸を排せは曉星燦として秋涼颯々萬籟尙ほ靜にして獨り后庭の泉水溢出して潺たるあるのみ、一同思はず萬福を稱す、此日は愈〻深山に入るの覺悟なるを以て、悉く一塊の彈丸を腰にし、輕裝して發す、城端よりして五ヶ山に通ずるの道凡そ四、新道あるありと雖も先日の洪水以來、崩壞甚しく、危險甚しきを以て、遂に舊道朴峠を經て、梨谷に出づるに決す、城端より既に登勢に移る、仰けは高岳嚴として前關を遮り、雲霧蒸々焉として前途漠々、一行相誓て其險を豫想す、進むに從て途次々に傾き、登るに從て足趾益〻仰く、坂愈〻急にして眺め漸く開け、一歩一喝氣息奄々、登る者里許、前山忽ち聲あり、淙々として長く、激々として高く、冷風颯然空を掠めて來る、驚き仰けば黛山雲を凌で、奇嚴天に伸する處、二條の瀑布高く雲關より懸り、奔激直下尙双龍玉を爭ふて地に迫るが如し、其夫婦瀑として遠近其名高きも理ありと謂ふべし、

峠盡くる處、老樹頓に蒼鬱、山毛欅、椚、七葉樹、等矗々又矗々、又亭々殆んど別天地に入りたるの思あり、斯の如き者半里、坂路再び急にして、所謂朴峠の險となる、然れども之を夫の背囊を着け、銃劍を提げて、山中越の險を踰えたるに比すれは、易々たるのみ、峠巔海を抜く優に二千尺はあらん、更に降る者半里流あり家あり團として一村をなす、梨谷村と云ふ實に五箇山の門戸なり、家屋の構造衣服の態度業已に別乾坤をなす、畑畔植うる所稗粟の類にあらずんば則ち馬鈴薯山芋の類のみ、若夫黃禾穰々として薫風波を漂すの青稻に至ては寥〻稀に觀るのみ、梨谷村の南又松尾峠あり坂巔眺望最も開け、五ヶ山一百の山脈起伏の狀殆んど達觀すべく、下梨附近の村落に至りては歷々指すべし、而も見渡す限り高山深壑ならざるなく、谷として烟の揚らざるなし、近くは人形金剛堂の諸山を望み、遠く飛信の諸山を望むべし、顧後行人喋々一行を咎むる極めて切、而かも問ふ者皆曰く汝は何職業にして何處に行くや」、と、余等其繁に堪えず言を左右に托すれは彼等益々疑色ある者の如し、一行其何故たるを知らず、平然問ふて曰く、松尾の天柱石へ行くの順路如何、と、吁此天柱石（土民は之を立石と云ふ）、汝立石の名は如何に彼等の頭腦を刺擊したりしよ！、優しき答を得るならんと思ひきや、言も荒〳〵げに汝等は立石へ何の爲に行くかとの反問は實に第一の答なりき、遇ふ者來る者皆斯の如し、吾初以爲く赤そぶ谷、繩ヶ池（城端の南一里許り山中にあり周凡一里傳曰く俵藤太瀨田の唐橋にて蛇の兒を貰ひ放ちて繩を以て圍みたるゆへ繩け池と云ふと而て現今尙大蛇其中に棲み氣に觸るれば則ち雨を降らすとなし近傍の村民番人を置て之を警戒する甚だ嚴、强て入らんとすれば鼓を打ちて全村民を集むると云ふ）等は何れも迷信の爲に其意を得ざりしと雖も、尙幸に天柱石のあるあり、聊以て慰むる處あらんかと、豈計らんや天柱石に於て復此迷信禍中に葬られんとは、噫、記せよ、諸子、文明〳〵と稱誇する大和民族の中、尙是等愚昧の民あるを、咄、則ち止むなく羊腸たる山路を迂餘曲折して松尾村に至り、區長山田某なる者に刺を通じ辭を卑ふして懇請す、時に井爐の邊、胡坐大管を口にせる彼は、冷然拒絕して顧みず、且曰ふ夏の土曜後稻刈上ぐる迄は、例令何人が來るも見せざるの契約なり、故に區長に於ては許す能はず、若し强て行かむとならば汝等自身に行け、然れども爲に横擊する者あるも吾關せず焉、と、生等顧みて只茫然たるのみ、聞が如くは近來米商投機の輩窃に之に至て害を加ふ、故に嚴禁斯の如し、と、初て知る嚮の問ふ者悉先づ職業を以てせし所以を、然も遂に說きつ諭しつ又諛りつゝ、漸にして諸の一字を得し迄の苦心は、蓋し他の得て知らざる所なり、而して附加せる彼が一言は、正しく彼が本性を現はす者乎、曰く卿等誰に案内を托せらるゝも、相當の賃錢を與ふべし、と、予曰く諸、彼曰く然らは吾親ら敢て導かん、と、衆相顧て更に茫然、暫して鎌を腰にし、踝脛着靴して來る、背後の一山を踰ゆれば傾斜せる山の半腹に、大岩兀として峙つを見る、是則ち天柱石なり、石高凡卅間、周亦之に沿ひ、恰も一大穀粒を立てたるに似たり、石上處々に萎樹生ず、土人以て奇となし、相戒めて謂ふ、石下靈神あり、之に觸るれは忽ち大風起る故に近づくべからず、と、余等亦路上より遙に之を望むのみ、豈啻に靴を隔てゝ痒を搔くの感のみならんや、蓋し古より玆に在りたる者が風雨雪霜の晨蝕に遇ひ、露顯したるに外ならず、然るに彼等は辨慶之を谷より拾上げ重きに絕へずして此處に捨てたる者なりとなす呵々、松尾より一坂を下れは則ち下梨村なり、戸數凡二百戸、學校あり、裁判所出張

あり、其他郵便局、駐在所、悉く備はり、實に梨谷數十ヶ村の小都會なり、白堊朱輪の宏倉あれは又茅屋素樹太古風の家あり、見る者聞く者一として奇ならざるはなし、就中生等の奇とせるは一家内に家族の多きと建築の異樣なるにあり如何なる矮屋と雖とも三階を備へざるなし、蓋し冬時降雪の多きは固より之が一源因なるべしと雖も、家族の多きは之が大々的源因ならんか、生等の宿せるは實に五箇山一の豪家水上方なりき偶々家族の數を問ふ主人曰ふ僅に、二十人しか居ません」と然れども豪家は又豪家の風あり、人品風采自ら備はる、家酒造を業とし又製糸養蠶に盡力せらる、晩餐膳に上る處は則ち葡萄の美酒なり、一行皆陶然として醉ひ、又深山僻鄕の間にあるを忘る、十一時就寢、時に尙ほ一家の主僕數十人、爐を圍んで團欒笑話するを見る、蓋し此等の美風は、山家にあらずんば又多く見ざる處のみ、偶戸外又風雨の聲あり、

因に記す村南二里猫池なる者あり之も一時例の迷說を稱へしも今や鯉魚潑測として游棲し笑島なる者處々に浮び以て舟に交ゆべく又彼の迷說を稱ふる者なしと、又中畠村及び天柱石附近に石炭脉あるも時代尙若きと運輸の不便とにより、荏苒今に只試堀の間にあるのみと

廿九日、晴、雨後山溪の曉色殊に佳、七時出發心神殊に淸爽、下梨村より對岸大島村に至る處、五ヶ三奇の一として有名なる吊橋あり、兩岸大鳥居を樹て、二條の鐵鎖を之に渡し更に幾百のブランコ樣の者を三尺距離程に垂れ、而して之を接合し、上に板を架して通行するなり、故に平時尙ほ搖動して危險甚し、況や時正に洪水の後破損甚しく上に架せる者とては僅に一枚の板片(巾一尺)のみ、衆皆鎖に據り、蟹行蛙步相戒めて亘る、手足爲に震ふ、亘り終つて吐息せるもの長時、而かも山人重荷を負ひ、高馱を足にし、平然として亘る、之より庄河に沿ふて北す、山は千尺の高きに聳え、川は百丈の下を流れ、巖石削拔峠嵋として頭上に臨み、水は雪涙を躍らし珠璣を作つて脚底に迫る處山家點々蒼樹の間に隱見するあり風光の絕佳なる蓋し多く見ざる處なり、更に谷を繞り山を踰え進む者里許、溪流愈々深くして岩崖益々高き處又吊橋あり、實に絕壁巉巖の間に懸る、橋下深さ幾仞、激流急に潭して碧きと藍の如し、時正に午に近く暑蒸すが如し則ち衣を捨てゝ橋下に投ず、壯は則壯なりと雖も、碧潭底を知らざる懸崖の下、焉ぞ幾分の忸怩たる者なか

らんや、之より路最も峻嶮、嵯峨たる蠻岩の緣、緜々たる葛藤の間、僅に途の如き者通ずるのみ、於是一行疲饑交々至る、偶々水あり極て淸冷涓々として落つ、則麥粉を出し、混糖冷水に和して飮む、美味得て謂ふべからず、眼下庄水最も曲折の妙を極む、剛塊磊砢たる深壑の裏、尙萩尾花の嬋妍たるあり、相對して趣更に深し、加之涼風颯然、溪水を掠めて至り、淸爽心に撒し、塵汗頓に消ゆ、午下二時祖山村に達す、此村は舊前田藩の流刑人を置きたる處、大槻傳藏亦此地に流されたりと云ふ、宜なり村の南北坂路一に峻嶮を極むるや、忽聞く讀經の聲朗々又囀々、顧れば田吉氏巖上に端坐し以て是等刑亡人の爲に回向を手向くるなり、村民見て愕く、蓋し現住する村民は又是等流人の裔孫ならんか、更に懸崖を捨て北する者里許忽魂々たる礫石の間湯氣の蒸々焉たるを觀る、是則ち祖山の温泉なり、嚮きには客室浴槽等觀るべき者無きにあらざりしも先來再三の洪水にて、悉く流亡し、今は只蕭殺たる洗根礫岩の間、硫氣紛々たる温水の僅に其跡を殘すのみ、一行則ち衣を投じて之に浴す、温度甚た身に適す、一人歎じて曰く、此良泉にして此事あり吁噫、と語未だ終らざるに一人口を遮て謂ふ否嶮峭たる嶄岩を壁とし、浩々たる蒼天を屋となし、奔激注瀉せる川を浴槽とす、又何ぞ其之なきを憂へんや、と、相見て奇と稱す、祖山より大牧に至る僅に十町の間、路最も險、或は木梯を攀ぢ、岩側を匐ひ、纏綿匍匐して僅に通ず、午後五時大牧温泉に達す、時恰も農家の閑時茲を以て幾十の客室一も虛なるなく、余等亦廐然たる六疊敷に六人割込の不幸に遇へり、加之食事一に自炊せざるを得ず衆相見て唯々、幸にして同室一夜の友能く調理に長じ炊事萬端生等の爲に竭し、毫も内顧の憂なからしむ厚意謝するに餘りあり、温泉は庄水の河原玄武岩と花崗岩との間より湧き、祖山の湯と同源同質の硫黃泉なり、而かも爲に別に浴槽の設もなく只兀々牙々たる岩石を鑿堀りたる者、故に久しく坐すべからず、加之四本の丸木に一杷の茅藁之れ之を蔽屋となす、衣服置くに處なく、雨露凌ぐに由なし、不躰裁一に如斯のみ、然るにかく繁盛なる所以、抑何處にあるか吾子得て解せざるなり、

卅日醒むれば靄雨霏々、歸意頓に動かず、九時雨を犯して下和賀に向ふ、而も三里半の逕路を取らずして六里半の迂路を取りしものは後者の川に沿ふが爲めのみ、大牧以北一里許の間は路稍々

佳なりと雖も、北原以東は實に荒路險道雜樓は參差、榛棘は條暢、蓋し仙人龍女の外又通ずる者なけん、若し夫岩側一歩を誤れは身は深溪千尋の鬼と化せんのみ、且坂路昇下甚しく、忽ちにして山頂、忽にして溪底、實に前日來嘗て踏まざる處、人をして疎然歸を思はしむ、正午仙納原村に達す、村下は則ち和賀川の庄川に合する處なり、仰けは牛岳峨々和賀川を控て立ち、半腸一帶の新道悠々遠きに連なるを見る、先日金屋に於て目擊せる牛岳新道則ち是なり、衆見て羨望措く能はず、速に此佳路に出づるを願ふ而かも前に千尋の利賀谷より直徑僅に五六町に過ぎざるも歩せば殆ど里に近し以て其谷の深きと新道の高きを想見すへし溪底の流、幅僅に數武、深さ幾丈、老樹蔚然之を蔽ひ、岩下水蝕して巨洞を作り、淵深洶々乎として鯨孔す、所謂龍蛇の窟とは其是等を謂ふ乎、且夫橋の兩岸岩尤も奇、餓虎怒て群羊を驅るが如き者、蟆蛙の据するが如き者、龍の如き者、馬の如き者、而かも岩頭悉く枯株蟠崛し、刻せる不動尊亦凛として雄姿あるを覺ゆ、橋より牛岳新道に登る處坂路最も急且長く、衆皆困憊僅に吐息を漏らすのみ、既にして新道に出づれば、路濶然として開け、漸を以て牛岳南背に昇まる、全く牛岳の石灰運輸の爲めに開鑿せる者なり、而して其終極點の如き實に海面を拔く優に二千尺を踰えん、誰れか知らん牛岳の背白雲戴裏馬子の追分勇ましく鶴ならで馬を御するの風流見あらんとは、偶々井波分署長星野警部の利賀谷巡廻せるに會ふ、一松氏多年同氏に知あり、爲に相伴連して行き便を得たる甚し、氏曰ふ高沼村に螢石を北曾嶺村に石墨を產す、君若し意あらは吾敢て導かんと、高沼村に至るや、直ちに之が採堀者市平なる者を訪ひ、入て之を見るに、脈厚さ約三寸、青綠色をなし、能州寶達山より產する者と全く同じ、星野氏巧に採堀の狀態、販路の摸樣を問ひ、一に之を勵ます、市平頓首拜跪唯々命之れ從ふのみ、聞く山里最も尊重する處は査公なり、と、而して今や警部到る、思ふに彼等尙ほ昔時の大名の如き感の起きたるならんか、初氏余に謂て曰ふ、巧に螢石を以て杯盤を製す、と、余窃に以爲く螢石質脆弱、欠損甚易し、蓋し呑噬の言ならんと、俄に首肯せざりき、而して今や其進むる者を看るに、果然々々、螢石を溶解して造れる一種の玻璃杯なり、余等相顧て默笑す、警部亦愕然、則瓦鑛數個を懷にして出づ、市平甚だ面目を施せる者の如く、門を出で

て遙送するも面白し、既にして曾嶺村に石墨取扱者某の宅に到る、而かも瓦鑛を得ずして歸る、彼等の愚昧なる石墨何の用に供せらるゝやを知らず、只之を採りて賣るのみ、可憐々々、時に五時」疲飢共に迫り衆皆無言の佛となる、次村を豆谷村となす、其間實に一里なり、則ち就て一家に憩ふ、時所謂ぼぶらの煮羮將に熟す衆皆兩椀を傾く、羮蓋し大牢に勝る、余等麥粉を啜り星野氏晝餉を披く、時實に午下六點鐘、余等其遲きに驚き其故を問ふ、氏謂ふ、曾て五ヶ山巡廻の際、飢非常に迫て遂に歩すべからず、則ち露を嘗め草を嚙み、椿花を食ふも徒に口唇を染めて益々飢渴の度を高くするのみ、當時の苦今尙恐れず、再來山里に入る食は堪へ能ふ丈之を保つ、と、一同其注意の周到なるに驚く、昏黑下利賀村に達す、役場あり、駐在處あり、又學校あり、下利賀の利賀谷に於ける尙下梨の梨谷に於けるが如き乎、此夜當地の豪家前小方に泊す、主人頗る俠量あり、鑛山に製糸に一として氏の力を致さゞるなく、又古器名畫を蒐集するに汲々たり、茲を以て高談頻に湧き、既にして談は轉じて五箇殖產振はざる所以に至る、主人謂ふ、昔、加藩の領たりし時には、山民悉く硝石と簑とを製造し、硝石の如きは加藩より相當の扶持を受け、山民皆太平を謠歌せしも、時勢一變、王政維新と共に、保護は解かれ、簑は其用途を失ひ、一大恐慌は五ヶ山を通じて來れり、爾來止むなく僅に硝石（床下に塵土を堆積して來る）と製紙とにて漸く口を糊し居るも、如何せん、是亦外國產に壓倒せられて、又振はす、若夫れ此勢にして、續かんか、遂には五ヶ山數萬の生靈をして、空しく頭を伍して飢死せしむるに致らん噫、と談益々佳境に入るも夜既に深く、疲れたる一行は早や舟筏を華胥に浮べて、櫓聲頗る轟々、主人則ち察して去る、時に午後十二時、

因に記す同氏鑛山を有する二、一は銅鑛にして他は石綿を產すと余則ち標本二箇を獲たり

卅日、夢か夢にあらず、幻か幻にあらず、只聞く轟々たる音は百雷の如く、樹木の折るゝ聲、戶障の劈くる響、寂然又溯滂たり、吁是何の變ぞと驚き我に歸れは、暴風襲ふなりけり、余等相語て曰く、若し此風をして余等天柱石を見しの夜にあらしめは、余等の今日或は測り難かりしならんと、窃に慶ふ既にして晨曉風、雨、を交へ漸を以て靜まる、今晨主人秘藏の書畫名什を披露せら

る、名什佳墨其數尠からざりしも不幸一昨年祝融の災に罹り失ふもの少からずとて先づ壁間に懸られしは、山陽、竹田、大雅堂、三名家の合作なり、竹田畫し、(竹、雀)山陽大雅堂各々之に賛す、三名家の合筆蓋日本一ならん、とは主人の言、尙幾多の書幅掲られ最後に是ぞ世界一の珍幅なり、との前置を以て披かれしは、充明の書なり、筆力勁逞、猛虎深山に嘯くの慨あり、主人謂ふ、千金未だし、二千金以て放つべし、と、尙他に一個の古瓶あり、高尺餘、口徑四寸、古色蒼然周の時代に用ゐられし者なり、と、主人滔々是等の來歷を說く極て詳密、余等只唯々たるのみ、九時雨を排して發す、發するに臨み、主人曰ふ弊村以南里許にして坂上村あり、村背護良親王の御館趾とも思しき者あり、卿等須く一顧せよと予等諾して發す、利賀谷川に沿へ南進する者時ならすして坂上村に達す、則ち同村の古老須川氏に就き其趾を吊す、趾は村背字館と稱する臺地にあり、郭壁悉く頹壞して半ば畠となり、宮趾蕩然として草茫々、殘牆堆墟して僅に門口を劃するのみ、東北隅に經塚あり、高三間、長十間許の巨石にして、上に經堂建てりと云ふ、社檀杭樹の楚痕歷として視るべし、吁妖雲天を蔽ふて至誠容られず、萬斛の熱情を抑えて、遂に斯深山僻鄕の間に影隱し玉へし當時の御心中は如何なりしぞ花の晨、月の夕、經堂靜に淨几に對せらるゝの時、落花の蕭篠たる明月の浮焉たるを觀ては、天蓋の雲行は、如何に、東都の春は如何にと、憂ひ玉ひし心の程は如何なりしぞ、思て玆に至る流涕滂沱たらざらんと欲するも得べけんや、大塔山は魏然東南に聳えて當年の事歷を語る者に似たり、半腹大洞仁太郎なる一軒の舊家あり、今は軒落ち壁破れて僅に露命を繫ぎ居るも、若し大洞は大塔より轉化し來りし者ならんには其祖先測られざる者あらん惜哉舊記鑑錄等悉く數度の火災に堙滅せられ其統を知るに由なし、嘆亦歎、坂上より百瀨谷へ踰ゆる處路甚險惡岐路橫出遂に邪路に踏み迷ふ、而も雨霏々として滿目の山景、轉た荒寥、訪ふに人なく行くに道なく、空しく草露影を沒する山中に彷徨する者時許、止むなく坂上に歸り、道を尋ね、殆と越ゆるを得たり、百瀨谷より、山田川に沿ふて北する者二里、途に松、吉、兩氏と分かれ、余と信耀君とは、下若溫泉に向ひ、兩君は山田溫泉に向ふ更に一嶺を踰ゆれは新婦の野河手に取るが如く北海の涇波渺として襟帶の間に集る連日深山懸絕の地にありし身の今初て此海と野とに會ひし時の心地よ、之より坂路一に下るのみ午下六時下若溫泉に着す此日行程八里溫泉は井田川の上流にあり山深からずと雖も楓樹蔚然晝尙暗く幽邃閑雅とは蓋し是等の境を言ふならめ

九月一日、六時出發流潺々氣浩々心神頗る爽是より道極て平坦馳行飛ぶが如し八時八尾町に着す顧れば五箇數十の高山髣髴として雲關に聲え轉た生等が壯行を祝送する者に似たり正午無事歸鄕す

御嶽、立山紀行

義山養愚

六月の歸省の途次、有恒子と日本海岸に沿ひて宮津に至り雨中小舟を僦て天の橋立を賞し大江山に登りて鬼窟を探り、百餘里の道程、九日の間、野宿と砂利的米飯とに瘦せ細りて家族を驚かしぬ。八月四日更に旅裝を整へて河內に義兄を尋ね大坂陣の古戰場に藤堂高虎木村重成などの墓を吊し、大坂に出てゝ有恒子と藤敎篤君とを誘ひ八日の日、瀛船にて紀州に渡り和歌山市、和歌の浦、紀三井寺、高野山、九度山、千早、金剛山、吉野山、畝火及ひ奈良を行脚して十三日歸京。同廿七日家庭を辭して歸校の途に就く、十六日の間、雨に打たれ風に吹かれて百二十里を跋涉し、御嶽山と立山とに今にては面白く當時にては難儀なりし旅行談。聞きたしと云ふものあれは書くなり、さはれあまり長きも如何はしけれは最後のをのみ日記のまゝ物するとゝなしつ

八月廿七日、　朝四時に起く身支度終れは父上曰く餘り冒險すること勿れと、母上は曰く今度は野宿なとを止めよ無理して歸校後病氣となる勿れと、予唯々として拜辭し弟妹に送られて七條停車場に至る、弟妹曰く每日葉書を給へ着澤しまさは速に詳しき旅行談を給へ我等其を樂みに待ち申さむと、予此を諾す、阿部天心、同無操、母堂と小弟とに送られて來る、森溪水病餘の身を以て特に予輩を見送らる此に其厚意を謝す、待つこと半時滝車大坂より着す、瀧山有恒其內に在り

即ち弟妹に分れて此に乘す、六時發す、窓外の景、湖水、伊吹山、關原等目慣れたれは面白くもなし、十時十分加納にて下り途中の森陰にて中食す、食後所謂濃尾の原野を過く、松林遠く相連り宮內省御料地、陸軍所有地多し、兩三年來移住開墾に從事せる者もあり、鵜沼まで四里十町の間暑くして懶く屢々路傍の井水を汲む、勝山近傍木曾川に沿ひてより、山水の景頓に絕佳、有恒子か文人畫の現實と云へるもの評し得て可なり、忽ち孤帆風を孕むて溯るを見る大聲之を呼て乘せよと云へは彼れ手招きして船を北方に致せり、河岸を走せ下りて此に及ばむとすれは船頭知らぬ顏して船を進む、追及して乘せよと云へは彼云々す而かも言語不通何の意たるを知らさるなり、船去り予輩呆然岸頭に佇立す、相顧し他の俊寬めきたるを笑ふ、五時半太田に着し磯谷水明樓に投す、樓を去る十四五間木曾川流る、奔勢岩に激して轟々聲あり、此夜夢魂京都に歸り又去つて寐覺めの床に遊ふ、行程六里十町

廿八日、　三時頃出足せむと欲したれとも左襟早くては渡守居らすと聞き態と後れて六時半出づ出つる時亭主ふと御嶽山に登るにやと云へるより急に登り度なり、相談一決太田町端より御嶽道に移る、豫定の木曾街道は後日東都よりの歸路に讓り今度は通せす、されは渡場を渡る必要もなく朝は何程早くてもよかりしなり、此を第二の失錯とす、古井より飛驒川に沿ひて上る鶴來黃門橋邊の規模大なるものにて兩岸の屏風岩數里に連り激流岩を嚙む所雪よりも白く、深潭淵に堪る所藍よりも碧なり、清泉高く掛りて瀧となり低く走りて征夫の渴を慰やしむ、左右の峯巒高く峙る骨露はれて疎松僅かに之を蔽ふ、釣橋あり、棧橋あり、隧道あり、將に蘿ならぬとも張金二本の籠渡しあり、木曾街道の景も略想像するに足れり、下麻生にて稀鹽酸を求む、此地方赤痢病流行すれはなり、上吉田にて中食し暑けれは一時間半休憩す、其間に三十三人組の行者あり過き行く、河岐より加子母川に沿ふ其景飛驒川の如く妙ならす、和泉にて先きの行者の休息せるを逐ひ越し中川にて憩ふ、鈴の音漸く近つき旗持てる先發隊二名我を越して進み本隊次て來れり、予輩躍起歩を速めて進み先發隊を追ひ越す、然るに彼も左る者次第に足力を急にし腰なる鈴を鳴して我を追ふことと頗る力む、勢此の如し予輩豈に彼等に負く可けんや、背後にりん〳〵聲を聞きて大急きに急く、疲るれとも休む能はす渴すれとも飲む能はす、二里の競走一切夢中なり、七時神土に着す而かも土地不案內の爲め良旅宿を占領され已むを得す絲屋と云ふに泊す、彼曰く宿取りの爲め先發せりと、然らは彼は使命を完ふせるもの亦以て忠臣たるを失はす、我は入らぬ事に足を疲らしまづき宿に眠る、正に是れ彌次喜多の仲間か、行程十二里

廿九日、　朝早く立たむとて天心屢々起き宿屋の者どもを起しなと騷きたれとも五時半となりぬ加子母川の景色次第に其趣を減したるも此に代りて種々面白き出來事こそ起りたれ、今日こそは彼の行者共に目に物見せて呉れむと勇み進みたれは何時の間にか越原を過きて加子母に着く、家皆小奇麗にて多く鯉を飼へり、廣き村かなと噂して村端の橋畔に初めて休む、天心道筋を聞かむとて傍の農家に入り容易に出てす、何事をなすらむと思ふほどにシクシッタリと叫ひて走せ來る、嗚呼予輩は道を來過きたるなり、加子母村の入口より直ちに右に折るべかりしなり、往返二里二時間の損をなしたり、此に於て勇氣頓に挫け悄然として戻り十一時付知峠に達す、藤屋に憩ひ晝餉を濟ませ批把葉湯と云ふものを飲む、此峠より王瀧までは新道にして行者の往來盛なり、知原川の支流を溯る水淺きに材木多く浮べたるは雨を待つものならむ、赤石の小屋より眞弓峠の頂上まて六十町あり、路幅二間もあれども實に羊腸にして且つ急なり、空腹を忍ひて登り頂上にて何か食はむと思ひたるに何もなしと聞き益々空腹を覺え四十町許りにて橋上に憩ひ流に下りて携へたる道明寺粉を漬す、降り來る行者共に里程を問へは或は三十町或は一里と答へ甚たしきは猶一里半もあれは速に進むへし、峠を下りて舊道は路惡しけれは日暮れては通し難かるへしと、親切氣に注意し呉るゝもあり、予輩は腹さへ膨るれは遠くとも、惡くとも、暮るゝとも何程の事あらむとて四時半より五時半まで費す、道明寺粉に砂糖をかけィナダを下物にして喰ふ美味云はむ方なし、六時半頂上の小屋に達す老翁一人あり、袷に袷羽織を着し足袋を穿てり、日漸く暮なむとす、提灯を借り草鞋一足（三錢）蠟燭二本（一錢）を求め提灯返し賃五厘を拂ひ大急きにて降る登り坂と同しく頗る急なり、三十町を忽ち降りて工夫小屋に着く、降雨の爲め新道破損せるを普請する間の假小屋なり、一婦人松火一本を惠與し懇ろに舊道を敎ゆ、謝して舊道にかゝれは先

きに行者の注意し呉れたるも道理、如何にも悪道なり、白晝ならは左ほどの事もなからんも日は全く暮れて四周辨せず、左は山、右は谷、谷深くして溪水幽に響き、山高くして巖石急に聳ゆ、道は細く一歩を誤らは墜落せむとし足下に氣付くれは岩角に突き當らんとす、絶壁の丸木橋は特に危嶮にして礁巖の凹凸せる歩み難きこと非常なり、而して此際予輩か生命と頼むは唯一本の松火のみ、四人に一本の松火のみ、一本の松火は四人の足下を照らすに足らす、足らすと雖とも是れ四人の生命なり、前途猶知る可からす而して松火は刻一刻消滅す、枯木を裂き小笹を折り點火せむとするも點せす、此の如くして五分を過さむか松火全滅して天地暗黒ならむ、進む可からす退く可からす又露宿すべからさるなり、世に心細しと云ふは恐らく此の如き場合をや云ふならむ、而かも地獄に佛の譬に漏れす予輩は前路に一の工夫小屋を發見したり、無操先つ進みて松火を請ひ天心次て進む、有恒と予と此方に待つ、天心呼んで曰く茶を一杯飲まないかと、即ち此に近づく未た入らす、屋内忽ち怒聲を聞く、予其の何の意なるを解せす、私に之を窺へは工夫十數名圓坐觴を擧け骰子を弄し盛に博奕を行ふもの〻如し、年壯の一偉漢赭顔巨目を怒らして叱して曰く去れ汝等の用なき處ぞと、書生の落武者と見へて小才子らしき男曰く我等は世の酸いも甘いも知り拔いた者だ、自分も難儀したれは他人の難儀をも察する、松火か欲しけれは幾何でもやる、然し君達人に物を頼むには頼み樣かあるだらう、帽子を冠りなからモウ少しでよいとは何だ、少しも澤山も君達か云ふ可きことかと、他の命知らずども其尾につれて口々に罵りて曰く茶屋ぢやあるまいし茶を飲めた何だ、エラさうに洋服なむか着て……人形ちやあるまいなぜ默つて居る、どむな面をして居るか出して見せろ、など恐ろしげに悪口を並べ、親切に松の根を割れる老人に與ふるに及はず與ふ可からすと命したり、今まで猫を見たる鼠の如く丁寧なりし彼等か俄に虎にも増して猛く荒くなれるに驚きたるも暫し、腹立たしくもあれとも此處に松火を得されは一歩も進めぬ悲しさ、言ひ合はさぬとも心は一つ口を揃へて無禮を謝す、特に有恒か得意の大坂辨を振ひて喃々せるさま予は思はす失笑せざるを得ざりき、松火だに得ば用なき所、逃くるか如く早々立ち去る、道の嶮しきこと前と同しく急かむとすれとも急かれす、急かれぬとも急きつ〻今の工夫の擧動を語へは道理こそあれ、初め天心白服を着して小屋に至るや彼等巡査と誤り丁寧に問ひて曰く今朝御出てなされたのに何處から御歸りになりましたかと、天心卒然否な今初めてと答ふるや彼等の氣色一變したるなりとか、大笑をなして進みふと顧みれは後に松火の火見ゆ、一二三と増して三の松火此方に來るらし、且つ怪しみ且つ疑ひ且つ恐れて進む、八町と云へと半里もある如く覺え、舊道一里と云へと二里もある如く感し、漸く新道に出づ、後の松火は如何にしたるやらむ遂に來らす、予輩も消へ殘りの松火を棄て提灯を點して降る、未た五六町ならす丸木を横へ小石を積みて往來を止めたり、注意しつ〻一町許り下れは橋落ちて下は眞黒なり、往來止めまで戻りて舊道を進まむとすれとも提灯にては道筋判らす、なるき山ならは踏み分け行かむも左したる業ならぬとも岩石突兀として急峻、能く滑り、滑り誤らは谷間に轉せむこと定まりたれは困し果て〻一相談となりぬ、暫しにても蠟燭は大切なりとて吹き消す、予と有恒とは其儘露宿せむと云ふ、天心は斯る處に眠らむよりは如何にもなして谷間に下り流に沿ひて道を求めむと云ふ、腹空きたれは道明寺粉を堅きまゝかぢる、廿一日の月影出てたれとおぼろなり、谷を隔て〻二つ三つ螢火の如く無きかあるかに見ゆるは工夫小屋にやあらむ、火の極めて小さきは猶麓まて遠き證なり、眼は闇黒に慣れて燈なき方却てたよりよし、さらは行く處まで行かむとて少しく降り道を外つれて、谷間に下らむとす、手支ふるものなく足踏むへきなし、一間許りも滑り落ちて心を冷やすこと屢々なり、斯る事には得意なる天心も此先導には兜を脱きぬ、新道に戻り更に橋詰より石垣を傳ひて下る、壞れたる所石を踏めはガラ〳〵と高き音して落ち行くさま物凄し、皆々無事に彼方に攀ち登り猶損處もあらむと注意して下る、半里にして立脈なる吊橋あり、橋畔小屋あり小俣（？）と云ふ、所謂麓の小屋にして峠頭にて借りたる提灯を預く可き所なり、時既に十時を過くること三十分、熟睡せるを起す、無操王瀧まで進まむと云ひ予は徹夜御嶽に登らむと云へと小屋の男ども兎ても〳〵と云ふまゝ贊するものなし、飯に腹膨らせ端書のみを認め日記には及はす普請中の部屋に眠る、十一時半なり、行程は僅か七里なれとも二里の損を加ふれは九里あまりとなりぬへし

三十日、　目覺むれは何時のほとより降り出しけむ板葺の屋根を叩いて雨頻りなり、降らは御山には登れすと聞きたれは落膽して七時頃まで起きす、支度するうち小降りとなり頓て止みぬ、亭主の紹介にて赤石より來れる三人の行者に伴はれ八時半出足す、十時王瀧に着きて禰宜屋に入り携へたる大なる握飯一個を喰ふ、此ほとりの宿屋何れも廣大なり、愈々五里の上りとなり里宮の前にて四人ともアラヽギの金剛杖（十二錢實は唐松一名落葉松）を求む、里宮は絶崖の下に在り洞窟なとありてよき所なり、此邊より盛に石碑立ち並ひ三十三度、五十度、百度登山なと肩書して何々靈神と記したり、大瀧と云ふに浴す、進むと八町又清瀧と云ふあり、予輩浴せさる積りにて小屋にあり、有恒走せ來りて曰く同行の先達瀧に打たれてブル〳〵震ひ出し、神詔を傳へて同しく登山する者は同しく身を淨めよと云へり、兎角はあれ今一度打たるへしと、漸く服裝を終りたるに又々浴するなとゝは馬鹿らしく面倒なれとも案内料をも出さで案内を賴めるなれは逆はぬかよしとて打たる、兩瀧とも高さ二三十間雨の如く降りて頗る奇觀なり、清瀧の小屋に「スリ御用心」と云ふ貼紙あり、一老翁見て御山にもスリが居る樣になりましたかと歎けり、眼鏡をかけ洋服に菅笠、莫座、金剛杖の怪物さへ登る世なれはスリも居る可しとて笑ふ、辨當の殘りを皆食ふ、行者に和して御山快晴、六根清淨（ドッコイショに通す頗る妙）　懺悔々々を交互に高唱し足調子を取りて登る、八海山、三笠山を過く、坂急なれは杉檜の木片を横へ土砂の流下を防けり、三時半頃兩降り初む、三笠山の小屋にて温飩（一杯二錢實は索麵）飯（一杯二錢五厘悪臭あり）豆（小皿一杯一錢三厘）を食ふ、本山となりては木は偃伏せる五葉松、松下芝麗しく生ひ繁れり岩石山にて岩石は皆燒石、道は切立なり、我先達及ひ行者は脚無双に健、他の行者を追越して息をもつかす登る、若し予輩に此の同伴者なかりしならは恐らく（寧ろ必す）斯く速に登山すると能はさりしならむ、男兒の意持、雨路の滑轉と、膝部の彈力盡きたるとを金剛杖に扶けられ一歩も後れじと追從す、他の行者ども見て其壯なるを感賞せり、下界を去ること既に遠きも白雲蒸々足下に浮動し遠望は愚か近景又濃霧に罩まれ天地の形勢容易ならす見ゆ、菅笠、莫座なと二三十も木に結ひ石に伏せある所を過き絶頂より十二三町、此世の物忘れと云ふ難所に至れは俄然

風激しく霧凝て呼吸協はす、莫座は背に舞ひ笠は切れ飛はむとす、此を手にせは身吹き仆さる、有恒其一人なり、走せ登りて八町目の田原（？）と云ふ小屋に逃け込む、六時半なり、此時風威激烈當る可からす、小屋は俄かの泊り人にて充滿す、後れ至れるを合せは百名にも餘りぬへし、彼の神土まで先着を競ひたる三十三人組亦此内にあり、吳越も船を同うすとか、船ならぬ暴風雨を一つ小屋に避くるも何等かの因緣ならむ、山下に殘せる笠、莫座は彼等の所有にして下山の積りにて上り此始末とは氣の毒なり、夜更くるに從ひ戸外の天變益々烈しく砂礫霰の如く飛むて板戸を打つ、轟々たり、殷々たり、怒濤洪波の時海岸に立ちたらむか如し、而して屋内を見廻せは是れ亦人界の一奇觀、予輩に於ては初めて接する所、特に妙味を感す、曰く朝日講、曰く松本講、曰く何々講と講名を異にせる信心家の數團、各其位置を占め日の神、月の神、素箋雄尊なとを描きたる幅をかけ燈明をあけ祈禱せるあり、机上に榊なとを据ゑ祈念を凝らすあり、御幣を打ち振りて神詔を傳ふるあれは指を握り合せて術を使ふか如きあり、鈴を鳴らし經を誦し、チン〳〵リン〳〵ワヤ〳〵ガヤ〳〵として喧騷耳を聾し奇態目を驚かす、而かも一人轉け二人横はりて天候獨り其猛威を肆にせり、狹き小屋に多くの人數、臥すも起くるも容易ならす、給着てさへ寒けれは爭ひて蒲團を請求し僅かに二枚を得たり、一枚の借賃三錢五厘、猶物價表を示さは

三錢	屋根代	二錢七厘	飯一杯	二錢五厘	味噌汁一杯
二錢八厘	草鞋一足	一錢三厘	豆小皿一杯	三錢	コワ飯

樣子を知れる行者連中は何れも粉、餅なと用意し猥りに斯るものは求めす、予輩も此高價に辟易して飯二三杯に止めたるか予は何時の間にか四杯食ひて三人より叱責を蒙る、生平の大食家哀れむ可きかな、懺悔々々

卅一日、　荒るゝも道理、明くれは二百十日、風伯の威漸く衰へたれとも未た以て靜まれりと云ふ可からす、他の連中は風霧を犯して下山し三十三人組のみ勇ましく絶頂に向ひたるか間もなくホウ〳〵の躰にて走せ戻り下山々々と叫ひ奥の院へは到らで下山し去りぬ、我先達彼等を嘲りて御山へ飛脚に來れるか如しとて笑ふ、今は十時も過きぬ小屋に殘れるは我七人と松本講（？）の

七八人となり、此講の先達は神勅を傳ふるもの、傳へて曰く今日奥の院へ參りて危嶮はないぞ、明日は晴天と心得ぞ、御山廻りは明日致すかよかろう云々と、我先達予輩を伴ひて不可なきやを問ふ、彼れ曰く碍けないぞ、能く邪念を拂ふて同伴至すかよかろう、と彼徒先つ奥の院に向ひ次て予輩も發す、十一時なり、道は巖に近く沿ひ燒石の上を傳ふ、颯風白霧深谷を廻りて騰り、硫黄の臭氣鼻を撲つ、霧濃くして前後辨せず、風急にして身倒れむとす、行者踟躇進ます、遙に奥の院を拜して歸らむと云ふ、此時に當り有恒立て放尿し先達に叱らる、其俗尿せむと欲せは白紙を敷きて尿す、御山を汚す恐れあれはなり、先きの松本講の先達歸途予輩を見、勵まして曰く行く可し〳〵何の危嶮かあらむ、我れ案内せむ早く〳〵と其進むこと飛ふか如し、日の門、月の門とて巨巖欠けて門形をなせる難所、彼れ口經を唱へ手印を結び予輩を保護す、奥の院は三尺四方許りの小社のみ、而して其背後は直ちに是れ千萬仞の深谷、所謂地獄谷なるものにして蠱下峭壁雲霧常に朦々、況むや此日をや、目眩し脚戰く、歸路少しく下りて夷路を撰ふと云へとも突兀嵯峨たる大石を傳ふこと前路の如し、十町以内ならむも恐しき路なり、小屋に戻りて荷物をかづき山頂に進む、急なれとも僅か八町なれは難なく達す、絶頂の御嶽神社に詣づ、行者か熱心に祈願せる間の寒さ四人とも風引かざりしか不思議なり、服は全く濡ひ頭髪、眉毛、手の毛、服の毛、脚袢の糸毛など、一筋毎に霧を帶ひ忽ちにして眞白なり、磴下の小屋に憩ふ、甘酒（一杯二錢五厘）を飲めとも寒さ癒えす、松本講員は此處に泊し明日晴天を待て靈光を拜し御山廻りをなさむと云ふ、我三人の行者も先きの神詔を確信し其説に同す、予輩は半日を空費する能はす、彼等か君達一二人死しても差支へなけれと御山を汚す恐れあれは成る可く本日は泊り明日御山廻りをなして下山せられよと勸むるをも聽かす、道筋を尋ね霧を踏て勇み下る、八町目の小屋にて更に道筋を確む、道の急にして悪しきこと登路に同しけれと小屋は數多あり、風の爲め家傾き屋根石飛ひたるを修復せり、予本山の道を評して磧を竪にしたるか如しと云へは皆々至極適切なりと云へり、されど犀川、手取川の如きより知らぬ人は到底想像し難かるへし、御山快晴にドッコイショを混せし爲めにや懺悔々々と呼ひたれと霽れやらす、一萬尺の高きに登りなから少しも望む所なく

六時頃黒澤村につき田中と云ふ大なる宿屋に投す、一日に五百人、千人も登るとありと聞き例の針小棒大的囈言と冷笑し居たるか、實際王瀧及ひ此黒澤の宿屋の大仕掛なると御嶽山の高嶺なるを知りて其虚語ならぬを悟りぬ、此夜行者數多泊り居り大騷きをなすと山頂小屋に異ならす、昨日も今日も行程七里、此地方頁馬を產し多きものは四百匹以上を飼ふと云ふ、頃者御役人來りて牧場を測定せりとか

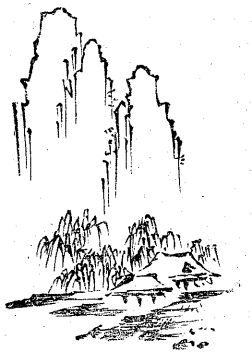
九月一日、　四時に起きて床の幅を見れは御嶽之二柱、大已貴大神、少彦名大神と二行に記せり此他に三十八社を祠れりとそ、神社に詣つる時何の神たるを知らす、下山して後初めて之を聞く一年一度の暴風雨に惱めるも神の罰にやありけむ、行者講により山の表裏を異にす、王瀧より開山せるを普寛大菩薩と云ひ、黒澤よりせるを覺明大菩薩と云ふ、覺明は尾張の人、大八車を曳きたるか發心して金比羅に籠り修行積みて開祖となれりとか、開祖を祭ると同しからす隨て表山、裏山を生し表より登りて裏より下るを例とす

五時半出發したるも他の講連か祈禱して去れる後なりき、曉氣に足も輕く福島まで三里、峠二つ越す、峠頂より鳥居を通して御嶽を望めは神詔信すへし、神山巍然白雲を帶し、靈光曈々其巔を照せり、壯嚴崇高、肅然人を起たしむ、念ふに彼の親切なりし三行者正に神德の畏きに感し九拜次くに涙を以てしたるや疑ひなからむ、福島にて木曾街道に合し十時四十分宮越にて名物の蕎麥と餅とを食ふ、茶菓子には梅干を出す習慣なるらし、右側に駒嶽を望みて進む、峯三つに分る頂上に駒に似たる石あるを以て此名ありと木曾路記に記せと見えす、午後二時鳥居峠にて辨當を喫す、木曾、信濃二大川の分水嶺なり、此峠頂の鳥居よりも御嶽山を遙拜すへし、楢川村に奈良井贄川なとあり三四里に亘る、家皆二階其狀平家を二軒重ねたるか如し、衰頽の樣見え不潔なると丸岡の町に讓らす、拂へとも去り難き蒼蠅を行々叩き殺す、信濃に入りてより落葉松甚た多し、本岡に達し花村屋に泊す、七時前なり福島より九里、道も平凡、事も平凡、記す可きとは唯ガタ馬車の多くして而して其馬の剛壯なること

二日、　昨夜眠むる時亭主に特に注意して明朝三時出發と命したるは立脈なれと覺むれは五時過

きなるに流石の予輩も顔紅めぬ、兎角して七時半に出足し一度も休まず頻りに勸むる馬車にも乘らず六里を四時間餘りにて歩み松本に着く、洪水に破損せる家のさま哀れなり、晝餉として生蕎麥を喰ふ、商業盛に見ゆ、ガタ馬車の多きには驚きたり、有明村社にて假睡し新橋にて氷水を失敬してコップを破り、豐科新田より左に折れて烏川村に六時頃着、齋藤丁眼か勇健なる狀貌を見て互に無事を祝し、寐物語りに夜の更くるとも知らざりき

三日、　充分寐るへしとは約束し置きたれとも十時過ぎまで寐込みたるには我なから呆れぬ、有恒は九州なる元田不足庵へ予は大坂なる大塚太虛へ何れも此日までの經歷を報知す、蓋し二子此行を約し病氣及ひ事故の爲め同伴するを得さりし故なり、丁眼兩三日を期して有明山に登り葛の湯に浴せむと勸む、學校始業日に餘日もなけれは辭し、午後相率ゐて西山に遊ぶ、松林連り綠芝なめらかに烏川近く流る、境閑にして樹下小兒の臥する繪なと思はしむ、岩原十景の一と云ふも宜なり、山神に詣で花崗石の砂山に攀ぢ、松か枝を臂に敷き兩手其束を握り急坂を滑り落つ、柴馬と云ふ頗る面白し、既に御嶽に登り將さに丁眼を加へて立山を探らむとす、心氣和暢悠々として樂極まらす、實に此小天地は予輩をして小兒化せしめぬ、歸來鷄を割て蕎麥を喫す、丁眼手製の片栗粉と並せ予輩をして美味忘る能はさらしむ、此日曇りたれとも降らす（未完）



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず

一雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゝるべし

明治二十九年十一月十日印刷
仝　年十一月十四日發行

編輯兼發行者　河原始二
金澤市廣坂通第四高等學校時習寮

印刷者　春秋原在文
金澤市石浦町七十六番地

發行所　第四高等學校北辰會

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地